

ニハと訓るゝことならば、寧樂人などにも、しか書たるがあるべし、此集中に、難波、那爾波、奈爾波、名庭、など、假字にも借字にもさまざま書たれど、浪速とも浪華とも書たるが一所もなきは、しか書てはナニハとは訓れぬが故なり、書紀崇神天皇卷十年の處に、禪尿處曰尿禪、今謂樟葉訛也、とある樟葉を、假字にて久須葉など書むは、心まかせなり、もとの由縁をおもひて、いまだ訛らざりしさきのまゝに、尿禪とかきて、クスバと訓とても、誰かは諾がはむ、これらは月の光波といふ歌を、佐々良之光波とかけると、同じものがたりなり、そのひがことなるをば、誰か難ぜざらむ、しかるにこの浪速浪華のひがことを、わきまへ云る人のなきこそ、いぶかしけれ、卷三に、昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都備仁鷄利、卷四に、吾衣人莫著會網引爲難波壯士乃手爾者雖觸、又、押照難波乃菅之云々、卷八に、忍照難波乎過而云々、十一に、難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻許會常目頰次吉、又、臨照難波菅笠置古之後者誰將著笠有魚國、十九に、虛見都云々、忍照難波爾久太理、卷廿に、夜蘇久爾波那爾波爾都度比布奈可射里安我世武比呂乎美毛比等母我母、又、海原乃由多氣伎見都々安之我知流奈爾波爾等之波倍努倍久於毛保由、又、大王乃云々、安之我知流難波爾伎爲而云々、○〔宮〕難波長柄豐崎宮なり、卷六に、幸于難波宮一時、忍照云々、續麻成長柄之宮爾云々、又、天地之云々、臨照難波乃宮爾云々、(續紀に、聖武天皇神龜二年冬十月庚申、天皇幸難波宮、とあるこれなり、)又、安見知云々、在通名庭乃宮者云々、又、有通難波乃宮者海近見漁童女等之乘船所見、(續紀に、聖武天皇天平十六年閏正月乙亥、天皇行幸難波宮、二月云々、戊午、行幸紫香樂宮、太上天皇及左大臣橘宿禰諸兄、留在難波宮焉、庚申、左大臣宣勅云、今以難波宮、定爲皇都云々、七月己巳、車駕還難波宮、と見えたり、)○〔宮附〔臨照宮〕

難波高津宮なり、お部、おしてるみや條、た部、たかつ條考合べし、卷廿に、天皇乃云々、之伎麻世流難波宮者云々、又、櫻花伊麻佐可里奈里難波乃海於之豆流宮爾伎許之賣須奈倍、(此歌は、天平勝寶七歲二月、難波に至りて、家持卿の作れし趣前後に見えたり、これは續紀に、孝謙天皇天平勝寶八歲春二月戊申、行幸難波、是日至河内國云々、壬子、行至難波宮、御東南新京云々、とあるそれにて、此卷下に、天平勝寶八歲二月云々、行幸於河内離宮、經信以壬子傳幸難波宮也、とある、空同度のことなり、かくて此は八歲春、難波に行幸あらむとて、七歳の春より御用意ありて、卿大夫を難波に下されしに、家持その時兵部少輔なりければ、兵器儀仗の事等を掌るにまりて下られしが、あらかじめ行幸のありしさまをよまれしと見えたり、さて此歌の初に、天皇乃等保伎美與爾毛於之豆流難波乃久爾々何米能之多之良志賣之伎等伊麻能乎爾多要受伊比都々云々、とあるは、仁德天皇の難波高津宮に坐して、天下をしろしめし、ことを云、終に宇倍之神代由波自米家良志母、とあるも、神代とは、仁德天皇の御代を指て申せるにて、難波宮を草創め給ひしを云るなり、されば反歌に、於之豆流宮とあるも、高津宮なることしるし、かくて上に出せる六卷幸于難波宮時云々、忍照難波國者云々、とあるは、聖武天皇神龜二年十月の行幸にて、歌に長柄之宮と見えて、孝德天皇の草創め給ひし難波長柄豐碯宮を云るなれば、今の歌なると別也、又同じ六卷の末つ方に安見知之云々、有通云々などある歌の難波宮も、長柄宮なること更なり、○〔國〕難波の地をなべて廣くいふ稱なり、泊瀬國、吉野國なども云り、一國に限りていふは、後のことなり、卷三に、天雲之云々、押光難波國爾云々、卷六に、忍照難波乃國者云々、卷廿に、天皇乃云々、於之豆流難波乃久爾々云々、○〔海〕此は其處とかぎるべからず、卷六に、直超乃此徑爾師引押照

哉難波乃海跡名附家良思裳、卷廿に、櫻花伊麻佐可里奈里難波之海於之且流宮爾伎許之賣須奈倍、
 ○〔鴻〕 此も其處とかぎるべからざる中に、もはら御津の濱の邊より、比賣島かけて云しとおぼゆるは、姫島松原にて、嬢子の屍を見てかなしみよめる歌に、難波方鹽干勿有會禰、とよめるにてしるし、すべてこの海は、西をうけたるゆる、浪風よせくる土砂と、川々より落下る細石に埋れて、今は古のさまなくなれりしときこゆれば、古より干潟のことに多かりけむこと、思ひやるべし、卷二に、難波方鹽干勿有會禰、沉之妹之光儀乎見卷苦流思母、卷四に、難波方鹽干之名凝飽左右二人之見兒乎吾四乏毛、卷六に、難波方潮干乃奈凝委曲見在家妹之待將問多米、卷七に、難波方鹽干立而見渡者淡路島爾多豆波所見、卷八に、玉手次云々、難波方三津崎從云々、卷九に、難波方鹽干爾出而玉藻刈海未通女等汝名告左禰、十二に、難波方水手出船之遺々、別來禮杼忘金津毛、卷廿に、余曾爾能美々且夜和多良毛奈爾波我多毛爲爾美由流志麻奈良久爾、○〔津〕 尼が崎より南住吉の敷津の境まで、すべて船の著し津を云りしなるべし、卷廿に、奈爾波都爾美布禰於呂須惠夜蘇加奴伎伊麻波許伎奴等伊母爾都氣許會、又、於之且流夜奈爾波能津與利布奈與會比阿例波許藝奴等伊母爾都岐許會、又、大王乃云々、奈爾波都爾船乎氣須惠云々、卷五に、難波津爾美船泊農等吉許延許婆細解佐氣豆多知婆志利勢武、卷廿に、奈爾波都爾余會比々々且氣布能日夜伊田弓麻可良武美流波々奈之爾、○〔御津〕 み部みつ條考合べし、卷廿に、天皇乃云々、安之我知流難波能美津爾云々、○〔埼〕 今の長柄本莊の郷にあたりと云り、十三に、忍照難波乃埼爾云々、○〔小江〕 たゞ江といふに同じ、往古今の淀川、古大和川、平野川の、三の河水流れこみし江なりとぞ、十六に、忍照八難波乃小江爾云々、忍光八難波乃小江乃云々、○〔堀江〕 ほ部、ほりえ條考べし、卷十

に、押照難波穿江乃葦邊者鷹宿有疑霜乃零爾、○〔門〕 水門、海門など云が如し、續後拾遺集に、難波とをこぎ出てみれば時雨ふるいこまの嵩は紅葉してけり、卷廿に、奈爾波刀乎已岐滯且美例婆可美佐夫流伊古麻多可禰爾久毛會多奈妣久、○〔路〕 卷廿に、奈爾波治乎由伎豆久麻豆等利藝毛古賀都氣之非毛我乎多延爾氣流可母
 なはのうら (繩乃浦) 和名抄に、土佐國安藝郡奈半とあり、土佐日記に、九日のつとめて、大湊より、那波の泊を追むとて、こぎ出けり云々、十日、今日は那波の泊にとまりぬとあり、今奈半利村と呼り、南は海を帶、北東に山を負たり、鹽燒火氣山爾棚引、とあるに、よく叶へれば、其地にや、卷三に、繩乃浦爾鹽燒火氣夕去者行過不得而山爾棚引
 なはのうら (繩浦) 左の歌は、山部宿禰赤人歌六首の中に、首に出せり、其次に、武庫浦乎榜轉小舟粟島矣背(向)爾見乍乏小舟、といふ歌を載たり、此は粟島の方より、武庫浦を見やりてよめるにて、この粟島をよそに見棄て、武庫浦を榜めぐりつゝ、倭の方へのぼりゆくは、うらやましき小舟ぞといへるなり、この粟島は、讃岐國の海中にあること、あ部あはしま條に委云るが如し、されば此歌、その上に次でたるを思ふに、攝津國より、讃岐へかけての間によめるものとせむに、那波といへる地は未聞及ばず、件の土佐の那波は道次たがへり、これによりて思ふに、卷一讃岐國の歌に、綱之浦之海處女等之、とよめるは、和名抄に、同國鶴足郡津野とある、彼處の浦をいへるよし、既くいへるがごとし、されば左の歌の繩浦も、綱浦の寫誤にて、ツナノウラにはあらずや、なほよく考べし、卷三に、繩浦從背向爾所見與島榜回舟者釣爲良下
 なばり (隱) 伊賀國名張郡なり、古事記中卷安寧天皇條に、那婆理之稻置、とあるも、同地なるべ

し、卷一に、暮相而朝面無美隱爾加氣長妹之盧利爲里計武、○〔山〕卷一に、吾勢枯波何所行良武已津物隱乃山乎今日香越等六、〔此歌、卷後にも重出、〕○〔野〕卷八に、暮相而朝面羞隱野乃芽子者散去寸黃葉早續也

なほりやま、(名欲山) 豊前國直入郡直入郷あれば、その山なるべしといへり、しかるに、左の歌の次上の歌の端作に、播磨娘子贈歌とありて、左の歌には、たゞ娘子贈歌とのみ有を見れば、その娘子も上なるに同じく、播磨娘子なることしるければ、此山も、播磨か攝津の國ならでは道の順叶はず、故考るに、上に出せる名次山は、神名帳に、攝津國武庫郡名次神社あれば、その山なるべきを思ひ合すに、此名欲山は、かならず名次山を寫誤れりしこと疑なし、と中山巖水云り、卷九に、從明日者吾波孤悲牟奈名欲山石踏平之君我越去者、又、命乎志麻勢久可願名欲山石踏平之復亦毛來武なみしばのぬ、(浪柴乃野) 大和志に、猪飼山、在城上郡吉隱村上方、其野曰浪芝野とあり、卷十に、吾門之淺茅色就吉魚張能浪柴乃野之黃葉散良新

なみくらやま、(連庫山) 近江國滋賀郡樂浪にあり、卷七に、佐左浪乃連庫山爾雲居者雨會零智否反來吾背

なら、(平城) (寧樂) (平) (奈良) (檜) (名良) など書り、大和國添上郡にあり、添上郡より、山城國相樂郡へ越る山路を那良坂と云、これ奈良山なり、此山より廣りたる名なり、名の由縁は、書紀崇神天皇卷に、復遣大彥與和珥臣遠祖彥國尊、向山背二擊二壇安彦、爰以忌登鎮坐於和珥武鏢坂上、則卒二精兵、進登那羅山而軍之、時官軍屯聚而蹶二趾草木、因以號二其山、曰那羅山、(蹶趾此云布瀨那羅須)とあり、卷一に、青丹吉寧樂乃家爾者萬代爾吾母將通忘跡念勿、卷七

に、玉津島能見而伊座青丹吉平城有人待問者如何、卷十に、梅花吾者不令落青丹吉平城在人之來管見之根、十三に、帛剛檜從出而云々、十七に、妹毛吾毛云々青丹吉奈良乃吾家爾云々、又、安遠爾與之奈良乎伎波奈禮云々、十八に、安乎爾與之奈良爾安流伊毛我多可多爾麻都良牟許已呂之可爾波安良司可、十九に、安乎爾與之奈良比等美牟登和我世故我之米家牟毛美知都爾於知米也母、○

〔都〕續紀に、元明天皇和銅三年三月辛酉、始遷都于平城、とある、これ寧樂朝のはじめなり、新千載集に、後嵯峨院、神無月時雨降おける御法とてならの宮に殘る言の葉、卷一に、天皇乃云々青丹吉檜乃京師乃云々、卷三に、青吉吉寧樂乃京師者咲花乃薰、如今盛有、又、藤浪之花者盛爾成來平城京乎御念八君、又、吾盛復將變八方殆、寧樂京師乎不見敷將成、卷五に、多都能馬母伊麻勿愛且之可阿遠爾與志奈良乃美夜古爾由吉帝已牟丹米、又、多都乃麻乎阿禮波毛等牟阿遠爾與志奈良乃美夜古爾許牟比等乃多仁、又、阿我農斯能美多麻多麻比且波流佐良婆奈良能美夜古爾咩佐宜多麻波禰、卷六に、紅爾深梁西情可母寧樂乃京師爾年之歷去倍吉、又、世間乎常無物跡今會知平城京師之移徙見者、(此は聖武天皇、天平十二年十二月、都を山城國相樂郡恭仁郷に遷し賜ひ、十三年正月に、天皇始めて恭仁宮に御在して、朝賀を受させ賜ひ、十五年十一月に平城大極殿并歩廊を壞ちて、恭仁宮に遷し遣らせ賜ひ、四年の間に其功纒畢ぬるよし、續紀に見えて、平城は故京とされる、其ほどによめるなり、又、石綱乃又變若反青丹吉奈良乃都乎又將見鴨、又、八隅知之云云定家牟平城京師者云々特有之名良乃京矣云々、又、名付西奈良之京之荒行者出立每爾嘆思益、卷八に、秋去者春日山之黃葉見流寧樂乃京師乃荒良久惜毛、又、沫雪保村呂保村呂爾零敷者奈良京師所念可聞、十五に、安乎爾余志奈良能美夜古爾多奈妣家流安麻能之良久毛見禮村安可奴加毛、又、安

乎爾與之奈良能美也故爾山久比等毛我母久佐麻久良多妣由久布禰能登麻利都礙武仁、又、海原乎夜蘇之麻我久里伎奴禮母奈良能美也故波和須禮可禰都母、又、夜麻河泊能伎欲吉可波世爾安蘇倍母母奈良能美夜古波和須禮可禰都母、又、安麻等夫也可里乎都可比爾衣弓之可母奈良能彌夜古爾許登都爾夜良武、十七に、青丹余之奈良能美夜古波布里奴禮登毛等保登等藝須不鳴安良奈久爾、十九に、虛見都云々、青丹與之平城京師山云々、又、安之比奇能云々青丹余志奈良能京師爾云々、○〔古京〕
 (上に云たる如く、天平十二年、都を山城の久邇へ遷し賜へるによりて、故京と云るなり、今京より、故京と云は、これと異れり、其は桓武天皇延暦三年に、都を山城國長岡へうつされたるより、奈良はながく故京となれる故に云るなり、卷六に、悲三寧樂京故郷二作歌、○〔里〕、卷六に、韓衣服櫛乃里之島待爾玉乎師付牟好人欲得、卷十に、吾屋前之芽子開二家里不落爾早來可見平城里人、○〔山〕卷一に、味酒云々青丹吉奈良能山乃云々、又、玉手次云々青丹吉平山乎越云々、卷四に、君爾戀痛毛爲便無見橋山之小松下爾立嘆嗚、卷八に、平山乃峰之黃葉取者落鍾禮乃雨師無開零良志、又、平山乎令丹黃葉手折來而今夜揮頭都落者雖落、又、青丹吉奈良乃山有黒木用造有室戶者雖居座不飽可聞、卷十に、奈良山乃峯尙霧合宇倍志社前垣之下乃雪者不消家禮、十一に、平山子松末有廉叙波我思妹不相止者、十二に、戀衣著櫛乃山爾鳴鳥之間無時無吾戀良苦者、(戀衣は、辛衣の誤なるべし、)十三に、空見津云々青丹吉寧樂山越而云々、又、綠青吉平山過而云々、又、王命恐、雖見不飽橋山越而云々、十六に、奈良山乃兒手柏之兩面爾左毛右毛倭人之友、十七に、安麻射加流云々青丹余之奈良夜麻須疑底云々、○〔手向〕卷三に、佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者妹乎目不離相見染跡衣、○〔路〕卷五に、枳美可由伎氣那我久奈理努奈良遲那留志滿乃己太知母可牟佐飛

仁家理、○〔大路〕十五に、安乎爾與之奈良能於保知波山余家村許能山道波山伎安之可里家利、ならしのをか(毛無乃岳)(奈良思之岳)など書り、古郷之云々といへるを思ふに、此岡、大和國高市郡飛鳥のあたりにあるなるべし、和銅三年、寧樂に都を遷されてより、古郷となれるによりて、すべて寧樂人より故郷と云るは、もはら飛鳥の地なればなり、續千載集に法皇御製、鳴わたるならしの岡のほとゝぎす古さと人にことやつてまし、卷八に、神名火乃磐瀬乃杜之霍公鳥毛無乃岳爾何時來將鳴、又、古郷之奈良思之岳能霍公鳥言告遺之何如告寸八
 なると(奈流門) 周防國大島郡にあり、此郡は離島にて、上關の東、安藝の巖島の西南にありとぞ、さてその大島より、同國玖珂郡へわたる間の迫門なるべし、この鳴戸、今大畑迫戸と云て、潮満たる時は、鳴響いと高く、舟人のおそるゝ處なりとぞ、と本居氏云り、〔頭註、後撰、鳴戸よりさし出さるこゝちせし、これは〕十五に、過二大島鳴門、而經ニ再宿ニ之後追作歌、巨禮也己乃名爾於布奈流門能宇頭之保爾多麻毛可流登布安麻乎等女杼毛
 なるせ(奈流世) 鳴瀬と云る海門の名なるべし、何地にありや、未詳ならず、契沖云、今の世に成瀬といふ氏聞え侍るは、先祖のそこより出られけるにや、十四に、奈流世呂爾木都能余須奈須伊等能伎提可奈思家世呂爾比等佐徹余須母
 なるしま(鳴島) 播磨國揖保郡より、淡路島へわたる間の迫門なるべし、十二に、室之浦之湍門之崎有鳴島之儀越浪爾所沾可聞
 なるさは(奈流佐波) 駿河國富士郡なり、都氏富士山記に頂上有平地、廣一許里、其頂中央窪下、體如炊飯、飯底有三神池、池中有大石云々、其飯中常有氣蒸出、其色純青、窺其飯底、如湯沸

騰、其在遠望者常見煙火云々、とある、この神池とさせるもの、かの鳴澤なるべし、むかし山のもえける時、火の氣と其池水と相た、かひて、常にわきかへり、鳴響む音の高かりしがゆるに、鳴澤ともいへるなるべし、世の萬葉をとく人、この鳴澤を、石花海のことなりとするは、おろそかなり、石花海は頂上にはあらず、鳴澤は頂上にあれば、別なることさらなるをや、なほせ部せのうみ條考合べし、續古今集に、後鳥羽院、煙たつ思ひも下やこぼらんふじの鳴澤音むせぶなり、十四に、佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波布自能多加彌乃奈流佐波能其登なるさは、(奈流左波) 伊豆國の走湯のことなり、十四(或本)に、麻可奈思美奴良久波思家良久佐奈良久波伊豆能多加彌奈流左波奈須與

○に部

にきたづ (皷田津) (柔田津) など書り、皷字、熟と作る本もあり、古書に、熟を皷と書る例多し、通用しなるべし、卷三にも人乎皷見者、とあり、類聚抄に、就田津と作て、ナリタヅと訓るはひがことなり、此は彼所に、成田津とも云があるによりて、皷は就字ならむと思ひて、さかしらに改めたるものなるべし、成田津のことは、既くあ部あきたづ條下に出、此地は、伊豫國温泉郡にあり、書紀齊明天皇卷に、七年春正月丁酉朔庚戌、御船泊于伊豫、熟田津石湯行宮、(熟田津此云爾根陀豆)とあり、卷一に、皷田津爾船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝豆菜、十二に、柔田津爾舟乘將爲跡聞之苗如何毛君之所見不來將有

にきたづ (柔田津) 此は和多豆を、ニキタヅと訓ひがめたるより、つひにさかしらに、柔田津と作るなるべしと云り、和多豆は、石見國那賀郡渡津村なりと云り、卷二(或本)に、石見之海云々、柔

田津乃荒備能上爾云々

にぎしがは (饒石河) (爾藝之河波) など書り、能登國鳳至郡にあり、十七に、鳳至郡波饒石河之時作歌、伊毛爾安波受比左思久奈里奴爾藝之河波伎欲吉瀬其登爾美奈宇良波倍底奈

にしのいち (西市) 大和國添下郡九條村に、その趾ありと云り、市に東西ありて、卷三に、東一市、又、東一市之殖木乃云々、とあり、延喜式、東市司(西市司准此)云々、凡毎月十五日以前集東市、十六日以後集西市、と見えたり、卷七に、西市爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里鴨

にひかは (新川) (爾比可波) など書り、和名抄に、越中國新川(邇布加波)郡、とあり、邇布は邇比を訛れるなり、十七に、立山賦(自註に、此山者、在新川郡也)安麻射可流云々、爾比可波能會能多知夜麻爾云々

にひばり (新治) 和名抄に、常陸國新治(爾比波里)郡、とあり、書紀景行天皇卷に、四十年、是歲日本武尊云々、歴常陸一至甲斐國一居于酒折宮、時舉燭而進食、是夜以歌之間侍者曰、珥比麼利菟玖波鴨須擬氏異玖用加彌菟流、云々、とあり、卷九に、草枕云々、新治乃鳥羽能淡海毛云々

にひたやま (爾比多夜麻) 又(乎爾比多夜麻)とも、和名抄に、上野國新田(爾布太)郡新田、とあり、爾布は爾比を訛れるなり、十四に、爾比多夜麻爾波都可奈那和爾余曾利波之奈流兒良師安夜爾可奈思母、○(乎爾比多夜麻) (小新田山なり、小は、小筑波の小に同じ) 十四に、志良登保留乎爾比多夜麻乃毛流夜麻能宇良賀禮勢那奈登許波爾毛我母、(留字、舊本布と作るは誤なり、留に改べしと宮地、春樹翁云々) 〇に部

にふのひやま (丹生檜山) 大和國吉野郡にあり、丹生川の上に在るなるべし、十三に、斧取而丹生

檜山木折來而機爾作云々

にふのかは (丹生乃河) (爾布乃河) など書り、大和志に、宇智郡丹生川、源出、自吉野郡加名生谷、經丹原生子等、至靈安寺村入吉野川とあり、今の丹原は即丹生なるべし、原をフと訓ことは前に云る如し、されば古丹生を丹原とも書るを、後音訓を混へて呼るなるべし、續後拾遺集に、事かよふたよりもあらばしらせばや丹生の川舟こがれ陀ぬと、卷二に、丹生乃河瀬者不渡而出久遊久登戀痛吾弟乞通來爾、卷七に、斐太人之眞木流云爾布乃河事者雖通船會不通にふのやま (丹生之山) 和名抄に、越前國丹生郡丹生、とあり、其地の山なり、十九に、吾耳聞婆不恰毛霍公鳥丹生之山邊爾伊去鳴爾毛

にふ (爾布) 和名抄に、上野國甘樂郡丹生、とある所なるべし、七十一番職人歌合に、金ほり、あぢきなや丹生の御山に掘金の自人に思ひ入ぬる、とあるは、左の歌に本たるにや、十四に、麻可爾布久爾布乃麻會保能伊呂爾低氏伊波奈久能未曾安我古布良久波

にへのうら (爾閉乃宇良) 略解に、和名抄に、遠江國濱名郡贄代とある、是なるべし、と云り、卷廿に、等倍多保美志留波乃伊宗等爾閉乃宇良等安比耳之阿良婆已等母加由波牟

○ぬ部

ぬさかのうら (野坂乃浦) 肥後國葦北郡にあり、新續古今集に、葦北の野坂の浦に鳴千鳥みしまにかよふ聲ぞふけぬる、卷三に、葦北乃野坂乃浦從船出爲而水鳥爾將去浪立莫勤

ぬしま (野島) (奴島) など書り、淡路國三原郡にあり、野をば、後世は能とのみ呼を、又野島をば後世まで奴島と呼來れるはめだたし、土佐日記にも、正月卅日、夜半許に舟を出して、阿波のみとを

渡る云々、寅卯の時ばかりに奴島と云處を過て、田無川といふ處を渡とあり、卷一に、吾欲之野島波見世追底深伎阿胡根能浦乃珠會不拾、卷三に、三津埼浪矣恐隱江乃舟公宣奴島爾 (末句誤字脱字あるべし、舟寄金津奴島崎爾などありしなるべし) 卷六に、天地之云々淡路乃野島之海子乃云々、又、朝名寸二梶音所聞三食津國島乃海子乃船二四有良信、又、味澤相云々淡路乃野島毛過云々、○〔崎〕 (玉葉集に、近江路の野島が崎の濱風にいもが結びしひも吹かへす、とあるは、粟路之をアフミヂノと訓誤りたるものなり、風雅集に、顯輔、あふみぢや野島がさきのはま風に夕浪千鳥立さわぐなりとあるは、又誤を重ねたりといふべし、これによりて、類字集に、つひに近江の名所とせるはかたはらいたし、又千載集に、顯輔、東路の野島がさきのはま風に我ひもゆひし妹がかほのみおもかけに見ゆ、とある、これは粟路を、東路と見誤りたるものならむ、類字集に、此野島が崎を、安房とせるはいかゞ、卷三に、珠藻刈敏馬乎過夏草之野島之崎爾舟遊著奴、又、(一本) 珠藻刈處女乎過而夏草乃野島我崎爾伊保里爲吾等者、又、粟路之野島之前乃濱風爾妹之結、結吹返ぬなかは (沼名河) 此は天安河の中にある淳名井と同じ處を云なるべし、さるは神代紀に、天真名井とありて、其一書に天淳名井とあり、眞名井は、眞は美稱にて、即眞淳名井の約れるにて同じことなり、ヌナはヌと約れり、さてその井は、安河の中に、しか云處のありと見ゆるは、古事記書紀を考へて知べし、さて淳名と書るは借字にて、瓊之井といふなるべし、之を名と云ことは古言に例多し、さるは上古より、其井底に瓊ありしが故に、しか名に負るなるべし、しかるを本居氏の、淳は凡て水の湛たる所を云、さればたゞ井を美て云るにて、一の井の名には非ずといへるはたがへり、かくて古井と云しものは、今常にことに掘まうけしをのみ云とは、いさゝか異にて、河にても泉に

ても、人の飲料に汲用る處の水を凡て云名にて、其は余が別に委き考あり、さればかの灣名井も、安河の流の中にあれば、古瓊之井とも、瓊之河とも云しならむとおもはる、なり、かしこけれども、神沼河耳命と申す御名も、此河に依て負せたまへるなるべし、さればこそ瓊之河の底なる玉云々とはいへるなれ、かくて天上の地をいへるは、集中に、天なる日賣菅原とも、天なるや佐々良の小野ともよめるなど、その例なり、しかるを略解に、神功皇后紀に、大津、灣名倉之長峽と有をもておもへば、攝津國住吉郡なり、と云るは、臆度説なり、かくてあるが中にも、天上の井をしも取出て云るは、其人をいたく愛みて、二なきものにはむとてなり、十三に、沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可毛安多良思吉君之老落惜毛

○ね部無

○の部

のこ(能許) 兵部省式に、筑前國能巨島牛牧、朝野群載卷廿、寛仁三年太宰府解に、筑前國那珂郡能古島重録三在狀、小右記に、筑前國乃古島などある其處なり、但し韓亭は志摩郡にて、能許とは郡たがへれど、能許の浦は、韓亭の地にも亘れるか、なほ國人に尋ぬべし、狭衣に、韓泊そののみくづと流れしを瀬々の岩浪尋ねてしがな、とあるは、もしいはこの能許を、そこと誦誤りて、さてよめる歌にはあらざるか、さて和名抄に、筑前國早良郡能解、と見ゆれば、能許は能解の誤ならむと云説は、能巨島とあるをしらぬ人の云ることなるべし、○(浦) 十五に、可良等麻里能許乃守良奈美多々奴日者安禮杼母伊敏爾古非奴日者奈之、〔頭註、名寄云、早良郡能解浦、能古浦とも書り、殘島の浦は、多々奴日者安禮杼母伊敏爾古非奴日者奈之、此島に昔は牛の牧ありしよし延喜式に見えたり、朝野群載には那珂郡に在とし、藻草には志摩郡とかいり、共にたがへり、大木集〕〔泊〕 同卷に、可是布氣婆於に、しほかざはあらくとぞある唐泊のこのうら舟こさいづなゆめ、中務、

吉都思良奈美可之故美等能許能麻里爾安麻多欲會奴流のちせやまのちせのやまとも (後瀬山) (後湍山) など書り、若狭國遠敷郡にあり、續拾遺集に、うつろはん物とや人に契置し後瀬の山の秋のゆふゆ〔頭註、諸州めぐり、若狭國小濱町の西南の外三町はなり、其少西の方に役小角の像有、脇土に白比丘尼(又號八百比丘尼)十八歳の像あり、おくの院に岩窟あり、白樺山と云、後瀬山是也、歌に玉椿をよめる名所なり〕卷四に、云々人者雖云若狭道乃後瀬山之後毛將合君、又、後湍山後毛將相常念社可死物乎至今日毛生有

のと 國名なり、○(海) 十二に、能登海爾釣爲海部之射去火之光爾伊往月待香光、○(島山) 十七に、登夫佐多底船木伎流等伊有能登乃島山今日見者許太知之氣思物伊久代神備會

のとがは (能登河) 大和國添上郡にて、高圓、三笠の二山の間を、西へ流るゝとぞ、卷十は、能登河之水底并爾光及爾三笠之山者喚來鴨、十九に、能登河乃後者相牟之麻之久母別等伊倍婆可奈之久母在香

のとせがは又のとせのかはとも (能登湍河) (能登瀬乃河) 大和國高市郡古瀬村にあり、金槐集に、白浪の磯巨勢道なる能登湍河のちも相見む水脈し絶ずば、とあり、卷三に、小浪磯越道有能登湍河晋之清左多藝通瀬每爾、十二に、高湍爾有能登瀬乃河之後將合妹者吾者今爾不有十方のとかのやま (能登香山) 未詳ならず、十一に、紐鏡能登香山誰故君來座在紐不開寐

○は部
はかひやま又はかひのやまとも (羽易山) (羽飼山) (羽買乃山) など書り、大和國添上郡春日にあり、卷二に、打蟬等云々、大鳥羽易乃山爾云々、卷六に、八隅知之吾大王乃云々羽飼山飛火賀鬼丹云々、(羽飼二字、舊本には誤れり) 卷十に、春日有羽買之山從猿帆之内散鳴往成者孰喚子鳥

はくひのうみ (波久比能海) 和名抄に、能登國羽咋(羽久比)郡羽咋、(波久比)とあり、十七に、之乎路可良多太古要久禮婆波久比能海安佐奈藝思多理船梶母我毛

はこね (宮根) (波姑禰) (波故禰) なこ書り、相模國足柄郡にありて、かくれなし、卷七に、足柄乃宮根飛超行鶴乃、乏見者日本之所念、○(山) 十四に、安思我良能波姑禰乃夜麻爾安波麻吉氏實登波奈禮留乎阿波奈久毛安夜思、○(嶺) 十四に、安思我里乃波故禰能禰呂乃爾古具佐能波奈都麻奈禮也比母登可受禰牟

はたのよこやま (波多横山) 大和志に、山邊郡仲峯山村、一名波多横山云々、神波多神社在仲峯山村、式屬添上郡とあるは、おぼつかなし、神名帳に、伊勢國壹志郡波多神社、和名抄に、壹志郡八太とありて、そは伊勢の松坂の里より、泊瀬越して、大和へ行道の伊勢の中に、今も八太里ありて、其一里ばかり彼方に、かいつといふ村に横山ありて、そこに大なる巖ども川邊にも多ければ、其所なりと云り、卷一に、十市皇女參赴於伊勢神宮時、見波多横山巖云々

はたぬ (旗野) 和名抄に、大和國高市郡波多、と見え、神名帳に、高市郡波多神社波多魁井神社、とある、其地の野なるべし、卷十に、霰落板敢風吹寒夜也旗野爾今夜吾獨寐牟
はつせ (泊瀬) (始瀬) (長谷) (泊湍) (波都世) など書り、和名抄に、大和國城上郡長谷、(波都勢) 神名帳に、同郡長谷山口神社、とあり、此川、大和國の眞中を流れたる川上はなほ遠けれども、國中までは、此地ぞ上瀬なるによりて、其初の瀬の意にて、初瀬といへるか、長谷と書は、地のさまによりてなるべしと本居氏云り、さて此地名、中昔よりこのかたは、もはら波世と呼り、訛略りたるものなり、續後撰集に、泊瀬女のしらゆふ花はおちもこず氷にせける山川の水、卷三に、隠口乃泊

瀬越女我手二纏在玉者亂而有不言八方、卷六に、泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開來受屋、卷七に、三諸就三輪山見者隱口乃始瀬之檜原所念鴨、卷十五に、泊瀬風如是吹三更者及何時衣片敷吾一將宿、十一に、長谷弓楓下吾隱在妻赤根刺所光月夜邇人見點鴨、十三に、冬木成云々泊湍能夜樹奴禮我之多爾云々、(泊瀬能夜を、舊本に、汗湍能振と作るは、誤寫なるべし、) ○(國) 十三に、隠口乃泊瀬乃國爾云々、○(小國) 十三に、隱來乃泊瀬少國爾妻有者石者履友猶來來、又、隠口乃長谷小國云々、○(山) 卷一に、八隅知之云々、隠口乃泊瀬山者云々、卷三に、角障經石村毛不過泊瀬山何時毛將超夜者深去通都、又、名湯竹乃云々、隠久乃始瀬乃山爾云々、又、隠口能泊瀬山之際爾伊佐夜匿雲者妹鴨有牟、卷七に、隠口乃泊瀬之山丹照月者盈異爲鳥人之常無、又、隠口乃泊瀬山爾霞立棚引雲者妹爾鴨在武、又、狂語香逆言哉、隠口乃泊瀬山爾廬爲云、卷八に、隠口乃始瀬山者色附奴鐘禮乃雨者零爾家良思母、卷十に、海小船泊瀬乃山爾落雪之消、長戀師君之音會爲流、十三に、隱來之長谷之山云々、○(川) 卷一に、天皇乃云々、隱國乃泊瀬乃川爾云々、卷六に、石走多藝千流留泊瀬河絶事無亦毛來而將見、卷七に、泊瀬川白木綿花爾墮多藝都瀬清跡見爾來之吾乎、又、泊瀬川流、水尾之湍乎早井提越浪之音之清久、又、泊瀬川流、水沫之絶者許會吾念、心不遂登思齒目、卷九に、三諸乃神能於婆勢流泊瀬河水尾之不斷者吾忘禮米也、又、泊瀬河夕渡來而我妹兒何家門、近春一家里、十一に、泊瀬川速見早湍乎結上而不飽八妹登問師公羽裳、十三に、天雲之云々、隱來笑長谷之河者云々、又、沙邪禮浪淨而流、長谷河可依儀之無蚊不恰也、又、己母理久乃泊瀬之河之云々、又、(或本) 己母理久乃波都世乃加波乃云々、又、隱來之長谷之川之云々、○(小泊瀬山) (小は、小筑波、小新田などの小なり、又小國、小里などいふも同じ、) 十六に、事之有者小泊

瀬山乃石城爾母隱者共爾莫思吾背、○〔豐泊瀬道〕（豐は、豊葦原などいふ豊なり、）十一に、
 口乃豐泊瀬道者常滑乃恐道會爾心由眼
 はにしな（波爾思奈）和名抄に、信濃國埴科、（波爾志奈）とあり、十四に、比等未奈乃許等波多由
 登毛波爾思奈能伊思井乃手兒我許登奈多延會爾
 はにやす（埴安）大和國十市郡香山の麓にあり、書紀神武天皇卷に、前年秋九月、潛取天香山之埴
 土以造八十平釜、躬自齋戒祭諸神、遂得安定區宇、故號取土之處曰埴安、と見えて、埴
 安は、埴黏といふ意より負せたる名なりと云り、字鏡に、埴謂作泥物也、爾也須、とあり、安を、
 書紀に安定とある文へあて、見るは、古義にあらず、卷一に、八隅知之云々、埴安乃堤上爾在立之
 云々、卷二に、挂文云々、埴安乃御門之原爾云々、○池、卷二に、埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎
 不知舍人者迷惑

はにふ（埴生）和名抄に、下總國埴生（波牟布）郡、とあり、波牟布といふは後の唱なり、古は波邇
 布とのみ云り、卷廿に、埴生郡

はひつきのかは（延槻河）（波比都奇能可波）越中國新川郡にあり、今かの國にては、地のものはや
 つきといふよし、契沖云り、十七に、新川郡、波比延槻河時作歌、多知夜麻乃由吉之久良之毛波
 比都奇能可波能和多里瀬安夫美都加須毛

はやみはま（早見濱）左の御歌は、難波宮に幸し時、從駕にて、長皇子の作賜へるよしなれば、攝
 津國の地名なるべし、豐後國に速見郡あれば、攝津國にもさる處あるにや、すべて地名には、諸國
 に同號なるが多ければなり、又は左の御歌、豐後國におはしける事ありて、その時よませ給ひしを、

傳へ誤て記せるにもあらむ、卷一に、吾妹子乎早見濱風倭有吾松椿不吹有勿勤

はやひと（隼人）往古は、薩摩は國名にはあらず、隼人國といひしなり、薩摩は、隼人國の内の地
 名なりしが、後に廣がりて、國名となれるなり、本居氏、古事記傳に續紀を引て、委論へり、卷三
 に、隼人乃薩摩乃迫門乎雲居奈須遠毛吾者今日見鶴鴨、卷六に、隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之
 瀧爾尙不及家里

はらろがは（波良路可波）和名抄に、下總國印幡郡原、とあれば、其地の河を云るにて、路は伊香
 保呂の呂にて、原呂河と云るなるべし、又遠江國佐野郡幡羅、武藏國幡羅郡幡羅、なども見えたれ
 ば、其中にてもあるべし、十四に、安乎楊木能波良路可波刀爾奈乎麻都等酉美度波久未受多知度奈
 良須毛

はりま（播磨）國名なり、卷六に、播磨國、（なほこれかれあれど、異ならねば略く、）
 ○ひ部

ひかさのうら（日笠浦）播磨國明石郡にあり、書紀推古天皇卷に、十一年秋七月丙午、當麻皇子到
 播磨時、從妻舍人姬王、薨於明石、仍葬于赤石、檜笠岡上、云々、とある、これなり、卷七に、印南
 野者往過奴良之天傳日笠浦波立見

ひきてのやま（引手乃山）（引出山）など書り、大和國添上郡春日の羽買山の中にあるなるべし、しか
 るを大和國の名處をしるせるものに、山邊郡中村の東に、龍王と呼ふ山を引手山なりと云り、左に
 載る歌の詞によるに、羽買山の中にありとせずしては、協ひがたし、但山邊、添上兩郡に亘れる山
 なりしか、猶よく尋ぬべし、卷二に、衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往者生跡毛無、又、衾路引

出山妹置山路念邇生刀毛無

ひきつ(引津) 十五に、到筑前國志麻郡之韓亭、船泊經三日云々、聊以裁歌六首、とありて、歌を

出し、其次に、引津亭船泊之作歌七首、とあれば、なほ志麻郡とせむか、(頭註、名寄云、志麻郡引津、昔は舟入る、今、) 卷七に、梓弓引津邊在莫謂色及採不相有日八方勿謂花 卷十に、梓弓引津邊

有莫告藻之花咲及二不會君君、○〔亭〕 十五に、引津亭、

ひくまぬ (引馬野) 遠江國敷智郡にあり、阿佛尼記に、今の濱松の驛を引馬の驛といへり、此野は、

今三方が原といふとぞ、金葉集に、春霞立かくせども姫小松ひくまの野邊に我は來にけり、(岡部氏

東歸に、三方が原、此野を引馬野といふに、疑なきにはあらず、萬葉集に、天皇三河國にいであす

時とて、引馬野にほふ萩原入みだり衣にほはせたびのしるしに、とあり、さらば三原にこそといふ

べきを、阿佛尼の、こよひは引馬の宿にやどる、此ところすべての名は、濱松といふと書、關東記

行、富士紀行、また東鑑に、建長四年、宗尊親王のくだらせ給ふにも、引馬の宿にやどり給ふこと

見えて、むかしは疑ひなかりしなるべし、今濱松の北に、京へのぼる道を、引馬坂ともいひ來れり、

おもふに、この野の北西は、やがて三河にちかければ、此行幸の官人の、隣國にいたりてよめるな

るべし、) 卷一に、引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢多鼻能知師爾

ひだ (斐太) 國名なり、斐太人は、いはゆる飛驒工の事にて、工人をなべていふ稱なり、委しくは

古義に云り、卷七に、斐太人之眞木流云爾布乃河事者雖通船曾不通、十一に、云々物者不念斐太

人乃打墨繩之直一道二

ひだのほぞえ (斐太乃細江) 大和國葛城郡にも、高市郡にも、斐太といふ村あり、但し江といふは

かりの大沼有ことは聞えず、と略解に云り、古沼江にてありしところの、後世にあせもし失もせし

例、諸國に多ければ、今さる江なしとて、古細江といひしところならむも知べからねば、もしは件

の地なりしも定めがたし、十二に、白檀斐太乃細江之昔鳥乃妹爾戀哉寢宿金鶴

ひたち (常陸) (比多知) など書り、國名なり、十四に、比多知奈流左可能宇美乃多麻毛許會比氣波

多延須禮阿可多延世武、卷廿に、比多知散思由可牟加里母我阿我古比乎志留志豆都祁互伊母爾志

良世牟、○〔國〕 卷九に、衣手常陸國云々

ひたがた (比多我多) 未詳ならず、十四に、比多我多能伊蘇乃和可米乃多知美多要和平可麻都那毛

伎曾毛己余必母

ひちきのなだ (比治奇乃奈太) 忠見家集に、伊豫に下るに、よしあるうかれめに、音にきゝ目には

まだ見ぬはりまなるひゞきのなだときくはまことか、とあり、ひゞきの灘と云るは、比治奇の灘を

訛れるものなるべし、件の歌によらば、播磨なり、河海抄に、袖中抄顯昭云、ひちきの灘は播磨に

あり、俗説には、ひゞきのなだとも云と云々、李部王記云、天慶四年正月十一日、是日備前備中淡

路等飛驒至備前二使申云、賊船一艘(純友等也)從響奈多捨舟曉遁、疑入京敷云々、とあり、契

沖云、備前備中淡路等の飛驒の、賊船のひゞきの灘より曉に遁るといへるによれば、備後よりなほ

西にやと云り、按に、明石と淡路との間一里餘ありて、それを明石の迫門といふ、此迫門を西に離

て播磨灘あり、此灘に鹽の満洞ありといへり、此灘をいふか、十七に、昨日許會敷奈底婆勢之可伊

佐魚取比治奇乃奈太乎今日見都流香母

常不(知)人國山乃秋津野乃垣津幡鷲夢見鴨

ひなもり (夷守) 兵部式諸國驛傳馬條に、筑前國驛馬、(席打、夷守、美野、各十五疋云々)とあり、郡未詳ならず、卷四に、夷守驛家

ひのもと (日本) 天下の總名なり、此はもとよりいひし稱にはあらず、日本といふ字につきて、いはじめたる稱なるべし、日本といふは、蕃國へ示さむがために、孝徳天皇の御代に、新に建賜ひし號なりと、國號考に云る如し、かくてその日本といふは、かの推古天皇の御世に、日出處天子、と異國へのたまひ遣はし、意ばえなれば、その意を得て、後に寧樂人の、日本の字に、比能毛登といふ訓を設けたるより、それやがて天下の總名のごとなれるから、あきづしま倭と云る類に、日本之倭といひつゞけたるなり、續後紀十九、興福寺僧等長歌にも、日本乃野馬臺能國遠云々、日本乃倭之國波云々、とあり、しかるに皇朝は、天津日の大御神の生出ませる本つ御國なる謂にて、日本の本國といふ義かとも聞ゆることなれど、しかにはめらじ、但し藤原良經公の、我國は天照神の末なれば日本としも云にぞありける、とよみ給ひたれば、日本國の義とすることも、いと後の世のことにはあらず、國號考にも、その意にとれり、そは古學者の心にとりては、誰も然あらせまほしく思ふ事なれど、往古はたゞ何事も、あるがまゝにいひて、後世のごと、異國に抗て、皇朝のことに尊きよしを稱いひしやうの趣は、一も見えたることなければ、なほしかにはあらじとぞ思はる、卷三に、奈麻余美乃云々日本之山跡國乃云々
ひのくま (日之隈)(檜乃熊)(檜隈)など書り、和名抄に、大和高市郡檜前、(比乃久末)書紀宣化天皇卷に、元年春正月、遷都于檜隈廬入野、因爲宮號也、とあり、玉葉集に、駒とめて

影みる水や濁らんひのくま川のさみだれのころ、○(川) 卷七に、佐檜乃熊檜隈川之瀬乎早君之手取者將縁言焉、十二に、左檜隈檜隈河爾駐馬馬爾水令飲吾外將見、○(さひのくま) (さは、山田を左山田といふ左に同じ) 卷二に、夢爾谷不見在之物乎鬱悞宮出毛爲鹿作日之隅回乎、卷七に、佐檜乃熊云々、十二に、左檜隈云々、(並上に出す)

ひのみちのくちのくに (肥前國) 國名なり、和名抄に、肥前(比乃三知乃久知)とあり、十五に肥前國
ひのみちのしりのくに (肥後國) 國名なり、和名抄に、肥後(比乃美知乃之利)とあり、卷五に、肥後國

ひのいるくに (日入國) 西蕃國をいふ、推古天皇の御世に、隋王を、日没處天子とのたまひ遣はしし意なり、十九に、虛見都云々直渡日入國爾所遣和我勢能君乎云々

ひみのえ (比美乃江) 越中國射水郡にあり、平家物語に、比美の湊とあるこれなり、十七に、大王乃云々都奈之等流比美乃江過底云々

ひむかしのいち (東市) 大和國添上郡に古市村ありて、古の東市の跡なりと云り、なほに部にしのいち條に具云り、卷三に、東市之樹作歌一首、又、東市之殖木乃木足左右不相久美宇倍戀爾家利

ひめしま (姫島) 攝津國西生郡にありて、今種島といふは、姫島を訛れるなりと、その郷人もいひ傳へたるよし、難波古圖説にせるせり、古事記に、仁徳天皇幸行日女島、書紀安閑天皇卷に、別勅大連云、宜放牛於難波大隅島、與媛島松原、翼垂名於後、敏達天皇卷に、乃遣使於葦北、

悉召日羅卷屬、賜德爾等、任情決罪、是時葦北君等、受而皆殺投彌賣島、(彌賣島蓋姬島也)續紀に、元正天皇靈龜二年二月己酉、令攝津國罷大隅媛島二牧、聽百姓佃食之、攝津國風土記に、比賣島松原者、昔輕島豐阿伎羅宮御宇天皇之世、新羅國有女神、遁去其夫、來住筑紫國岐伊比賣島、乃曰、此島者猶不遠、若居此島、男神尋來、乃遷來停此島、故取本所住之地名、以爲島名、と見えたり、續古今集に、見渡せば汐風さむし姫島や小松がくれにかゝるしら浪、卷廿に、妹之名者千代爾將流姫島之子松之末爾羅生萬代爾

ひめすがはら (日賣菅原) 未詳ならず、或は天上にある野にて、佐々羅の小野の類にもあるべし、卷七に、天在日賣菅原草莫刈嫌彌那綿香鳥髮飽田志付勿

ひら (比良)(枚)(平)など書り、近江國滋賀郡にあり、○(山) 卷九に、樂浪之平山風之海吹者釣爲海人之袂變所見、○(浦) 十一に、中々二君二不戀者枚浦乃白水郎有申尾玉藻川管、○(湊) 卷

三に、吾船者枚乃湖爾撈將泊奥部莫避左夜深去來、○(大曲) 卷一に、左散難彌乃志我能(一云比良乃) 大和太與村六友昔人二亦母相見八毛

ひらしき (平敷) 肥前國彼杵郡にありと見ゆ、本居氏云、或人云、平敷と云は、今長崎に近き浦上村平野宿と云處にて、今も赤石白石の美好きが多く出るを、火打石にも、又、磨て緒結と云物にもするなり、卷五に、或云、此二石者、肥前國彼杵郡平敷之石云々

ひれふる嶺 (領中磨之嶺) 肥前國松浦郡にあり、續後拾遺集に、松浦川河音高しさよ姫のひれふる山のさみだれの水、新後拾遺集に、蟬の羽の衣に秋をまつらがたひれふる山の暮ぞ涼しき、新續古今集に、忘るなよ契りし末をまつらがたひれふる山はへだてはつとも、卷五に、大伴佐堤比古云々、

因號此山曰領中磨之嶺也乃作歌曰得保都比等麻追良佐用比米都麻胡非爾比例布利之用利於返流夜麻能奈

ひろせがは (廣瀬川) 大和國廣瀬郡にある川なり、文德天皇實錄に、仁壽三年十月己卯、遠江國奏言、廣瀬河舊有郵船二艘、而今水濶流急、不由利涉、公私行人擁滯岸上、請更加置二艘、以濟羈旅之難、許之、とあるは、同名別處なり、新千載集に、ひろせ川あたりの小田をせき入て袖つくばかりとる早苗かな、卷七に、廣瀬川袖衝許淺乎也心深目手吾念有良武

○ふ部

ふかつしまやま (深津島山) 和名抄に、備後國深津(布加津)郡、とあり、續紀に、養老五年夏四月丙申、分備後國安那郡置深津郡、と見ゆ、書紀に、日本武尊、既而從海路還倭、到吉備以渡穴海、其處有惡神則殺之、とあり、か、れば穴海は安那郡にあり、深津も、初は安那郡の内の一所の別名なるを、養老五年に分て郡とせられたれば、左の歌の出來ける時は、まだ安那郡に屬るなり、と契沖云る如し、十一に、路後深津島山暫君目不見苦有

ふかえ (布可延) 筑前國怡土郡に、今も深江村ありて、肥前の唐津へ通ふ道の驛なりとぞ、卷五に、筑前國怡土郡深江村子負原、臨海丘上有二石云々、乃作歌曰、可既麻久波云々和多能會許意根都布可延乃宇奈可美乃故布乃波良爾云々

ふかみのむら (深見村)(深海之村) 加賀國加賀郡にあり、兵部式に、加賀國驛馬、(深見五疋)と見えたり、弘仁十四年に、越前國を割て、加賀國を置ければ、寧樂朝の頃は、越前國の部下にてありしなり、十八に、到來深見村、又、到來部下加賀郡境云々、戀緒結深海之村

ふげひのはま (吹飯乃濱) 紀伊國海部郡にあり、大和物語に、故右京のかみ宗子の君、成出べき程に、我身の得成出ぬ事と思ひ給ひける頃ほひ、亭子院の御門に、紀伊國より、石つきたる海松をなむ奉りたりけるを題にて、人々歌よみけるに、右京のかみ、沖津風吹飯の浦に立浪のなごりにさへや吾はしづまむ、清正家集に、紀伊守になりて、まだ殿上もせざりしに、天津風吹飯の浦に住たづのなか雲居にかへらざるべき、(頭註、若山と若浦の間の北の濱を吹上と云、この吹上吹飯同處二名なりと) 到三和泉國日根郡深日行宮、夫木集、寛平の、(類字抄に、吹飯和泉國日根郡とす、續紀に、天平神護元年十月甲申、菊合の歌詞書に、和泉國吹飯の浦云々、) 十一に、時風吹飯乃濱爾出居乍贖命者妹爲社

ふじ (布士) (不盡) (布仕) (不自) (布自) (布時) (布自) など書り、駿河國富士郡にあり、都氏富士山記に云、富士山者在駿河國、峯如削成、直聳屬天、其高不可測、歴覽史籍所記、未有高於此山者也、其聳峯巒起、見在天際、臨瞰海中、觀其靈基所盤連、亘數千里間、行旅之人經歴數日、乃過其下、去之願望猶在二山下、蓋神仙之所遊萃也云々、古老傳云、山名富士取郡名也、とあり、但郡名に取たりと云ことは定がたし、もと山名なるが、ひろごりて、郡の名ともなれるにもあらむ、その本末は今きはむべからず、されど竹取物語に、不死山の義といへる類は、ことさらに設けて、滑稽に云るのみにて、さらに本義にはあらず、近き頃、江戸人がかける棟梁集といふものに、富士はもと吹息穴のつゞまりにて、嶺の穴より息吹おこれるがゆゑの名にやと云るも非ず、もしさるよしの名なれば、息吹穴とこそ云べき理なれ、吹息は倒なる言様なるをや、かにかくに、もとの名の山縁も知がたし、からぶみ義楚六帖に、日本國都城東北千餘里有山、名富士、亦名蓬萊、其山峻、三面是海、一朶上聳、頂有火煙、日中上有諸寶流下、夜即却上、常聞音樂、徐福止此、謂蓬萊、至今子孫皆曰秦氏、此是後周世祖顯德中、日本僧弘順所語也、とあり、又蕉氏

筆乘といふ物に、日本國名倭國、東北數千里有山名富士、又名蓬萊、國中最高山、三面皆海、一朶直上、頂有火煙云々、とも見えて、もろこしまでも、その名かくれなし、(頭註、詞林採葉、漢國曰扶桑、彼國有山號富士、仙所居也焉、我朝大内記錄) ○(山) 十四に、可須美爲流布時能夜麻備所日記云、宣化天皇御宇、自海中涌出、此號不盡山矣、○(嶺) 卷三に、不盡嶺爾零置雪者六月十五日消爾和我伎奈婆伊豆知武吉氏加伊毛我奈氣可牟、○(嶺) 卷三に、不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利、又、布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽計田菜引物緒、十四に、不盡能爾乃伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理登倍婆氣爾餘婆受吉奴、○(高嶺) 卷三に、天地之云々駿河有布士能高嶺乎云々語告言繼將往不盡能高嶺者、又、田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留、又、奈麻余美乃云々出立有不盡能高嶺者云々駿河有不盡能高嶺者雖見不飽香聞、十一に、吾妹子爾相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之燒管香將有、又、妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺之燒管波、又、君名毛妾名毛立者惜已曾不盡乃高山之燒管毛居、十四に、佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波布自乃多加爾能奈流佐波能其登、又、阿做良久波多麻乃乎思家也古布良久波布自乃多可爾爾布流山伎奈須毛、○(河) 卷三に、奈麻余美乃云々不盡河跡人乃渡毛云々、○(芝山) 十四に、安麻乃波良不自能之婆夜麻已能久禮能等伎由都利奈波阿波受可母安良牟

ふしごえ (伏超) 中山嚴水云、我土佐國安藝郡に、伏超と云る坂あり、そは飛石はね石ころく石とて名高く峻難き地を行て、此坂を越ることなり、此坂いとさがしくて、立てあゆみがたければ、伏超とは云なるべし、此伏超の山岬は海に臨みて、今は行かよふべき處にあらざれども、いにしへは、浪間をうかゞひて、道行人の通ひしにやあらむ、卷七に、伏超從去益物乎問守爾所打沾浪不數爲而

ふしみ (伏見) 山城國紀伊郡にあり、書紀雄略天皇卷にも見えて、今も名高き地なり、新千載集に、吳竹の伏見のたるのかりの世に思ひしられてもりあかすらむ、とあり、卷九に、巨椋乃入江響奈理射目人乃伏見何田井爾鴈渡良之

ふすま (衾) ふすまといふは地名にて、其地に通ふ道路を、ふすま道と云るにや、ふすまは、契沖が、諸陵式に、衾田墓、(手白香皇女、在大和國山邊郡、兆域東西二町、南北二町無守戸、令山邊道勾岡上陵戸兼守)とあるを引たるに依ば、大和國山邊郡と定むべきか、さて布須麻といふが、もとよりの地名にて、田地につきて、そのあたりを布須麻田と呼なし、つひにそれ地名になりて、衾田と云るものか、さて衾道乎引手乃山と連ねたる、引手山は添上郡春日にありて、山邊郡と添上郡と、たちまち郡たがへるは、いかにといふに、山邊郡の布須麻にかよふ道路の、添上郡の引手山と云るにて、すこしも難なし、凡そ某道といふは、たとひ他國他郡にまれ、其地に往來する道路をいふことにて、筑紫に通ふ道を筑紫道、紀伊國に通ふ道を紀道と云る類は、國地遙にへだよりたる方よりもいへること多きに、なぞらへてさよるべし、但し左の歌の衾は、字の如く臥具の衾にて、道は、幕の乳などいふ乳にて、手して取料の物をいふことなれば、衾の乳を引、といひかけたる枕詞なるべきか、しかするときは、布須麻といふ地は、有無にかはらず、地名を云るにはあらず、しかれども、地名ならずとも、たしかに決めがたければ、姑くこゝに擧ぐ、なほ委しくは、古義に論へるを見て考べし、卷二に、衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往者生跡毛無、又、衾路引出山妹置山路念邇生刀毛無

ふせ (布勢) (敷勢) など書り、越中國射水郡舊江村に在よし、十七に、自註せり、○〔海〕十七に、

物能乃敷能云々布勢能宇彌爾布禰宇氣須惠底云々、又、布勢能宇義能意根都之良奈美安利我欲比伊夜登徳能波爾見都追思努播牟、十八に、多麻久之氣伊都之可安氣牟布勢能宇美能宇良乎由伎都追多麻母比利波牟、十九に、念度知云々布勢乃海爾小船都良奈米云々此布勢能海乎、○〔浦〕十八に、伊可爾世流布勢能宇良會毛許已太久爾吉民我彌世武等和禮乎等登牟流、又、於等能未爾伎吉底日爾見奴布勢能宇良乎見受波能保良自等之波倍奴等母、又、布勢能宇良乎由吉底之見豆波毛母之綺能於保美夜比華爾可多利都藝底牟、又、安須能比能敷勢能宇良未能布治奈美爾氣太之伎奈可須知良之底牟可母、○〔水海〕十七に、布治奈美等云々宇良具波之布勢能美豆宇彌爾云々

ふたみ (二見) 參河國にありと見ゆ、何の郡にあるにや、未詳ならず、卷三に、妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴、又、水河乃二見之自道別者吾勢毛吾毛獨可毛將去

ふたぎ (布當) 山城國相樂郡にて、即久邇京の地なり、此地、瀧川の二筋落合所にて、布當は、二瀧の意の名なるべしといへり、藻蘆草に、不替野城州相樂郡、とあるは、布多藝を、後の音便に類して、布多伊といへるなるべし、さて百代爾毛不可易、とあるを思ひて、不替の字を假て書るものなり、○〔宮〕卷六に、明津神云々高如爲布當乃宮者云々、又、吾皇云々高所知布當乃宮者云云、○〔山〕卷六に、布當山々並見者百代爾毛不可易大宮處、○〔野〕卷六に、三日原布當乃野邊清見社大宮處定異等霜、○〔原〕卷六に、明津神云々痛軻怜布當乃原云々
ふたがみ (二上) 神名帳に、大和國葛下郡葛木二上神社、とあり、大和志に、在葛下郡當麻村西北、半跨河州、兩峯對、一曰二男嶽、一曰二女嶽云々、とあり、卷十四に、大坂乎吾越來者二上爾黃葉流志具禮零乍、十二に、二上爾隱經月之雖惜妹之田本乎加流類比來、○〔山〕卷二に、宇都

會見乃人爾有吾哉從明日者二上山乎弟世登吾將見、卷七に、木道爾社妹山在云三梯上二上山母妹許會有來

ふたがみ (二上) (敷多我美) (布多我彌) (蓋上) など書り、越中國射水郡澁溪にありと見ゆ、續紀に、越中國射水郡二上神、とも見えたり、十七に、二上能乎底母許能母爾安美佐之底安我麻都多可乎伊米爾都氣追母、○〔山〕十六に、澁溪乃二上山爾鷲曾子產跡云指羽爾毛君之御爲爾鷲曾子生跡云、十七に、奴婆多麻乃欲波布氣奴良之多末久之氣敷多我美夜麻爾月加多夫伎奴、又、伊美都河泊云々多麻久之氣布多我美山者云々、又、多麻久之氣敷多我美也麻爾鳴鳥乃許惠乃孤悲思吉登岐波伎爾家里、又、物能乃敷能云々多麻久之氣布多我彌夜麻爾、又、可伎加蘇布敷多我美夜麻爾云々、又、天王乃云々二上山登妣古要底云々、十八に、敷多我美能夜麻爾許母禮流保等登藝須伊麻母奈加奴香伎美爾妓可勢牟、十九に、桃花云々眞鏡蓋上山爾云々、○〔尾上〕十九に、二上之峯於乃繁爾許毛爾之波霍公鳥待騰未來奈賀受

ふちはら (藤原) 大和國高市郡にて、宮地は、香山の西、畝火山の東、耳梨山の南なること、卷一藤原宮御井をよめる長歌の趣にてしられたり、今も大宮殿と云て、いさゝかの處を、畑にすぎ残して、松立てある地、其趾なりとぞ、さて香山は、十市郡なれども、宮地は其西にて、高市郡に屬するべし、釋紀に、氏族略記を引て、藤原宮、在高市郡鷲柄坂北地、と云り、しかるを大和志に、高市郡大原村、持統天皇八年遷居於此、とあるは、おろそかなり、なほ次にいふべし、卷一に、八隅知之云々荒妙乃藤原我宇倍爾云々、○〔宮〕卷一に、藤原宮御宇、天皇代、又、藤原宮之役民、又、藤原宮御井、又、藤原之大宮都加倍安禮衝哉處女之友者乏吉呂賀聞、○

〔京〕十三に、挂纏毛云々藤原王都志彌美爾云々

ふちはら (藤原) 大和國高市郡大原村を、即藤原とも云しなり、鎌足大臣の本居なりしが故に、藤原と云姓を賜へるなり、さて天武天皇の夫人、藤原夫人を、大原大刀自とも云るにて、大原とも、藤原とも云りしをるべし、宮地の藤原とは別地なり、思涙ふべからず、かくて卷二に、天武天皇の、大原乃古爾之鄉爾、とのたまひ、十一にも、大原古郷、とあるにて、左の藤原古郷も、大原なるを知べし、卷十に、藤原古郷之秋芽子者開而落去寸君待不得而

ふぢしろのみさか (藤白之三坂) 本居氏云、紀伊國海部郡なり、名高の里をはなれて、南ざますこし行ば、その坂のふもとにて、ふぢしろ村といふありて、そこに藤白王子と申て、御社も道のほとりに立給へり、さて十八町がほど、藤白の御坂をのぼりて、たむけに寺あり、そのすこし西の方に、御所芝といふあり、いと見わたしのけしきよき處なりと云り、播磨風土記に、奉鎮爾保都比賣命、於紀伊國管川藤白之峯云々、と見えたり、卷九に、藤白之三坂乎越跡白袴之我衣手者所沾香袋

ふぢるがはら (藤井我原) 大和國高市郡にて、藤原宮地にありと云り、即其地に、ことなる御井あるによりて、藤原の御井の原といふ意にて、負せたる名なるべし、今も香山の西北に清水ありと云り、それを云るにやあらむ、卷一に、藤原宮御井歌、八隅知之云々龜妙乃藤井我原爾云々高知也天之御蔭天知也日御影乃水許會波常磐爾有米御井之清水

ふぢえのうら (藤江之浦) 和名抄に、播磨國明石郡葛江、(布知江)とあり、新古今集に、かもめ居る藤江の浦の沖つ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ、卷三に、荒栲藤江之浦爾鈴寸釣白水郎跡香將見旅去吾乎、卷六に、八隅知之云々荒妙藤江乃浦爾云々、又、奥浪邊波安美射去爲登藤江乃浦爾船

會動流

ふなせ (船瀬) 播磨國印南郡にあり、續紀に、天應元年正月庚辰、授三播磨國人大初位下佐伯直諸成外從五位下、以進於造船瀬所也、延曆八年十二月乙亥、播磨國美嚙郡大領正六位下韓鍛首廣富、獻稻六萬束於水兒船瀬、授外從五位下、同十年十一月壬戌、授三播磨人大初位下出雲、巨人麻呂外從五位下、以獻稻水兒船瀬也、など見えたり、主稅式に、凡勘租帳者云々、船瀬功徳田造船瀬料田、並爲不輸租田、云々、と見えたる船瀬もこれなるべし、かくて中山巖水、船瀬は、船居にや、スエはセと約まれりと云り、遣唐使時奉幣祝詞に、大唐爾遣使佐牟止爲爾、依船居無二氏、播磨國與理船乘止爲氏、使者遣佐牟止所念行間爾、皇神命以氏船居波吾作牟止教悟給比支、教悟給比那我良、船居作給部禮波云々、(吾下作字、本に佐と作るは誤なり、)また臨時祭式に、開遣唐船居祭あり、此船居を、やがて地名に負せて、船瀬とぞいふならむ、卷六に、名寸隅乃船瀬從所見云々、○〔濱〕 卷六に、往回雖見將飽八名寸隅之船瀬之濱爾四寸流思良名美

ふは (不破) 和名抄に、美濃國不破郡(國府)とあり、さて伊勢國の鈴鹿、美濃國の不破、越前國の愛發を三關とするよし、續紀、令義解等に見えたり、○〔山〕 卷二に、挂文云々眞木立不破山越而云々、○〔關〕 卷廿に、阿志加良能云々不破乃世伎久江且和波由久云々
ふし (鳳至) 和名抄に、能登國鳳至(不布志)郡、とあり、十七に、鳳至郡
ふるや (古屋) 未詳ならず、十六に、虎爾乘古屋乎越而青淵爾鮫龍取將來銀刀毛我
ふるえ (舊江)(古江)など書り、和名抄に、越中國射水郡古江、(布留江)十七に、大王乃云安之我母能須太久舊江爾云々、右射水郡古江村取獲蒼鷹二云々

ふる (古)(振)(零)など書り、 神名帳に、大和國山邊郡石上坐布留御魂神社、と見ゆ、此御社まします地を云、古事記中卷に、建御雷神答曰、專有平其國之橫刀可降、此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都御魂、此刀者坐石上神宮也、とあり、卷十に、石上振乃神杉神佐備而吾八更更戀爾相爾家留、十一に、石上振神杉神成戀、我更爲鴨、○〔里〕 卷九に、虛蟬乃云云石上振里爾云々、○〔田〕 卷七に、石上振之早田乎雖不秀繼谷延與守年將居、卷九に、石上振乃早田乃穗爾波不出心、中爾戀流比日、○〔山〕 卷三に、石上振乃山有杉村乃思過倍吉君爾有名國、卷四に、未通女等之袖振山乃水垣之久、時從憶寸吾者、卷九に、振山從直見渡京二曾寐不宿戀流遠不有國、十一に、處女等乎袖振山水垣、久時由念來吾等者、○〔河〕 卷七に、古毛如此聞乍哉、兼此古河之清瀬之音矣、十二に、登能雲入雨零河之左射禮浪間無毛君者所念鴨、又、吾妹兒哉安乎忘爲莫石上袖振河之將絶跡念倍也、○〔橋〕 十二に、石上振之高橋高々爾妹之將待夜會深去家留

〇ノ部

へぐりのやま (平群乃山) 和名抄に、大和國平群郡平群、(倍久利)とあり、十六に、伊刀古云々、八重疊平群乃山爾四月與五月間爾藥獵仕流時爾云々
へそがた (綜麻形) 大和國城上郡三輪山の古の別名なるべし、みわやま條に云如く、閉蘇麻の三勾遣れるに因て、其地を美和と名けたるよし見えたる、閉蘇は、即綜麻にて、其が形状につきて、いひそめたる地名なるがゆゑに、やがて綜麻形とはいひたるなるべし、さて彼地の別名なりけるから、本名の三輪と云るのみ、世にひろく傳はりて、綜麻形の稱は、後にはきこえぬことゝなれるにやあ

らむ、卷一に、綜麻形乃林始乃狹野榛能衣爾著成日爾都久和我勢

○ほ部

ほそかは (細川) 大和國十市郡にあり、書紀天武天皇卷に、五年夏四月、是月勅禁南淵山細川山、並莫二蕪薪、契沖云、南淵はひろくて、其中に、わきてみなふち山といふも、細川山と云もありて、南淵之細川山とよめるなるべし、○〔瀨〕卷九に、椽手折多武山霧茂鴨細川瀨波驟留、○〔山〕卷七に、南淵之細川山立檀弓束纏及人二不知所

ほづみ (穂積) 大和國十市郡にありて、今蒲津村といふ地、これなりとぞ、十三に、帛間云々水蓼

穂積至云々

ほりえ (穿江) (欲江) (保里江) (保理江) (保里延) など書り、攝津國西成郡にて、今の大坂の

大川なり、書紀仁德天皇卷に、十一年夏四月、詔群臣曰、今朕視是國者、郊澤曠遠而田圃少乏、且河水横逝以流末不駛、聊逢霖雨、海潮逆上而巷里乘船、道路亦溷、故群臣共視之決二横源而通海、塞逆流、以全田宅、冬十月掘宮北之郊原、引南水以入西海、因以號其水曰堀江、とあるごとく、河水横逝とは、古大和河、河内河、其他の小川ともより、落合ふ水の汎く濫に流るゝをいふ、海潮逆上とは、風雨につれて、潮汐の入江にさしこむをいふ、かく河水と海潮の相たゝふるによりて、津國河内、兩邊の田圃を多く害ひ、且道路のゆきかひも便あしきによりて高津の宮地より北の郊原を、東さまの入江より掘通し、南水を西海へ導し、これを難波堀江とは云るなり、〔頭註、續後拾遺、おしけるやなにはほり江〕卷七に、昨夜深而穿江水手鳴松浦船楫音高之水尾早見鴨 卷十に、押照難波穿江之葦邊者鷹宿有疑霜乃零爾、十二に、妹目乎見卷欲江之

小浪敷而戀乍有跡告乞、又、松浦舟亂穿江之水尾早櫻取間無所念鴨、十八に、保里江爾波多麻之可麻之乎大皇乎美敷爾許我牟登可年且之里勢婆、又、多萬之賀受伎美我久伊且伊布保理江爾波多麻之伎美且々都藝且可欲波牟、又、保里江欲里水乎妣吉之都追美布爾左須之津乎能登母波加波能瀬麻宇勢、卷廿に、天皇乃云々、保理江欲里美乎妣伎之都々云々、又、保理江欲利安佐之保美知爾與流許都美可比爾安里世婆都刀爾勢麻之乎、又、蘆刈爾保里江許具奈流可治能於登波於保美也此等能未奈伎久麻泥爾、又、保理江已具伊豆手乃船乃可治都久米於等之婆多知奴美乎波也美加母、又、保里江欲利美乎左可能保流梶乃音乃麻奈久會奈長波古非之可利家留、又、保里延故要等保伎佐刀麻且於久利家流伎美我許已呂波和須良山麻之目、○〔河〕卷廿に、布奈藝保布保理江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都々奈久波美夜故杼里香裳

萬葉集名處考卷之六

○ま部

まかみのほら (眞神之原) 大和國高市郡にあり、書紀崇峻天皇卷に、始作法興寺此地一名飛鳥眞神、原亦名飛鳥苦田と見えたり、卷二に、挂文云々明日香乃眞神之原爾云々、卷八に、大口能眞神之原爾零雪者甚莫零家母不有國、十三に、三諸之云々大口乃眞神之原從云々

まがりのいけ (勾乃池) 大和國高市郡島宮の池の名なり、和名抄に、山城國廣瀬郡下句、(句は、勾の正字なり)書紀繼體天皇卷に、勾大兄皇子、安閑天皇卷に、勾金橋宮、などある、これみな勾といへる地名に相例すべし、卷二に、島宮勾乃池之放鳥人目爾戀而池爾不潛、又、島宮上池有放鳥荒備勿行君不座十方、(上池有は、勾池乃とありしを誤寫せるなるべし)

まきむく (卷向) (纏向) (卷目) (卷牟久) など書り、神名帳に、大和國城上郡卷向坐若御魂神社、とある、其地なり、古事記に、大帶日子淤斯呂和氣天皇、坐纏向之日代宮、治天下也、また麻岐牟久能比志呂能美夜波云々、と云歌も見えたり、卷目とも書るによりて、マキモクといふは非なり、卷七に、痛足河河浪立奴卷目之由槻我高仁雲居立良之、又、卷向之病足之川由往水之絶事無又反將見、十二に、纏向之痛足乃山爾雲居乍雨者雖零所沾乍鳥來、○(山) 卷七に、三毛侶之其山奈美爾兒手乎卷向山者繼之宜霜、又、兒等手乎卷向山者常在常過往人爾往卷目八方、又、卷向之山邊響而往水之三名沫如世人吾等者、卷十に、子等我手乎卷向山丹春去者木葉凌而霞霏霽、又、妹

カソテキムクキヤノアサツユニホフモミチノチラマクシモ
之袖卷牟久山之朝露爾仁寶布黃葉之散卷情裳、○(岸) 卷十に、足曳之山鴨高卷向之木志乃子松二
三雪落來、○(川) 卷七に、黑玉之夜去來者卷向之川音高之母荒足鴨疾、○(檜原) (檜原山) 卷七
に、動神之音耳聞卷向之檜原山乎今日見鶴鴨、卷十に、卷向之檜原丹立流春霞霽之思者名積米
八方、又、卷向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪流
まぐはしまど (麻具波思麻度) 上野國の地名か、麻具波は、眞桑といふ地名なるべし、思麻度は、
島門なるべし、但し上野は、海なき國なれば、いかゞなれど、此は彼川中島などの類にて、川島の
門を云るにやあらむ、十四に、可美都氣努麻具波思麻度爾安佐日左指麻伎良波之母奈安利都追見禮
婆

ましき (益城) 和名抄に、肥後國益城(萬志岐)郡(國府)とあり、卷五に、肥後國益城郡
まつら (松浦) (麻都良) (麻都良) (萬通良) など書り、和名抄に、肥前國松浦(萬豆良)郡、
とあり、書紀神功皇后卷に、夏四月、北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河側云々、擧筆乃
獲細鱗魚、時皇后曰、希見物也、(希見此云、梅豆邏志)故時人號其所曰、梅豆邏國、今謂
松浦訛焉、是以其國女人、每當四月上旬、以鈎投河中捕魚、於今不絶云々、古事記に、
亦到坐筑紫末羅縣之玉島里、而御食其河邊、之時、當四月之上旬、爾坐其河中之磯、拔取御
裳之糸、以飯粒爲餌釣其河之年魚、故四月上旬之時、女人拔裳糸、以粒爲餌釣二年魚、至
于今不絶也、とあり、これに肥國といはずして、筑紫と云る、此筑紫は、西海九國の總名と見れ
ば事もなけれど、なほ然にはあらじ、肥前の域は、もとは筑紫國の内にて、肥國に屬たるは、や
後かとおぼしきことあるなり、と古事記傳に云り、卷五に、麻都良奈流多麻之麻河波爾阿由都流等

多々世流古良何伊弊遲斯良受毛、又、比等未奈能美良武麻都良能多志末乎美受且夜和禮波胡飛部
々遠良武、又、得保都必等麻通良佐用比米都麻胡非爾比例布利之用利於返流夜麻能奈、又、宇奈波
良能意吉由久布爾遠可弊禮等加比禮布良斯家武麻都良佐欲比賣、又、由久布爾遠布利、騰尾加彌伊
加婆加利故保斯苦阿利家武麻都良佐欲比賣、十二に、松浦舟亂穿江之水尾早攢取間無所念鴨、○
〔山〕 卷五に、於登爾吉岐目爾波伊麻太見受佐容比賣我必禮布理伎等敷吉民萬通良楊滿、○〔川〕
卷五に、麻都良河波可波能世比可利阿由都流等々勢流伊毛河毛能須蘇奴例、又、尊富都比等末
都良能加波爾和可山都流伊毛我多毛等乎和禮許會末加米、又、和可山都流麻都良能可波能可波奈美
能奈美邇之母波婆和禮故飛米夜母、又、磨都良我波奈々勢能與騰波與等武等毛和禮波與騰麻受吉美
遠志麻多武、又、麻都良河波河波能世波夜美久禮奈爲能母能須蘇奴例、阿由可都流良武、又、麻都
良河波多麻斯麻能有良爾和可山都流伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐、○〔海〕 十五に、多良思比賣
御船波且家牟松浦乃宇美伊母我麻都做伎月者倍伎都々、○〔浦〕 卷五に、伎彌乎麻都麻都義乃于良
能越等賣良波等已與能久爾能阿麻越等賣可忘、○〔縣〕 卷五に、麻都良我多佐欲比賣能故何比例布
利斯夜麻能名乃美夜伎々都々遠良武、○〔道〕 卷五に、毛々可斯母山加奴麻都良遲家布由伎氏阿須
波吉奈武遠奈爾可佐夜禮留

まつちやま又まつちのやまとも (眞土山) (亦打山) (又打山) (信土山) (信土之山) など書り、大和國
宇智郡にありて、今紀伊國伊都郡にかゝれり、新古今集に、能宣朝臣、大和國眞土山近く住ける女
の許に云々、と見えたるを思ふに、うけはりては大和國の眞土山とせるなり、卷一に、朝毛吉木人
之母亦打山行來跡見良武樹人友師母、卷三に、亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿、卷

四に、天皇之云々眞土山越良武公者云々、卷六に、石上云々古衣又打山從還來奴香聞、卷七に、
白袴爾丹保布信土之山川爾吾馬難家戀良下、卷九に、朝裳吉木方往君我信土山越濫今日會雨莫零
根、十二に、櫛之衣解洗又打山古人爾者猶不如家利、又、乞吾駒早去欲亦打山將待妹乎去而速
見牟

まつほのうら (松帆乃浦) 淡路國津名郡にあり、新勅撰集に、來ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼や藻
鹽の身もこがれつ、とあるこれなり、卷六に、名寸隅乃云々淡路島松帆乃浦爾云々
まつがうら (麻都我宇良) 未詳ならず、十四に、麻都我宇良爾佐和惠宇良太知麻比等其等於毛抱須
奈母呂和賀母抱乃須毛

まつだえ (麻都太要) 越中國射水郡にあり、松田江なり、十七に、物能乃敷能云々麻都太要能奈我
波麻須義底云々、又、大王乃云々麻都太要乃波麻山伎具良之云々
まつばら (松原) 紀伊國に、今も松原と云ところありときけり、それをいふか、但しいづれの郡な
らむ、詳にききさだむべし、卷九に、我背兒我使將來歟跡出立之此松原乎今日香過南

まとかた (圓方) 神名帳に、伊勢國多氣郡服部麻刀方神社あり、其地なり、伊勢國風土記に、的
形浦者、此浦地形似的故以爲名、今已跡絶成三江湖也、天皇行幸浦邊、歌曰、麻須良遠能佐都
夜多波佐美牟加比多知伊流夜麻度加多波麻乃佐夜氣佐、とあり、卷一に、大夫之得物矢手挿立向
射流圓方波見爾清潔之

まとかたのみなと (圓方之湊) 別府安信云、細見大繪圖に、播磨國印南郡に、的形湊あり、其地な
るべし、卷七に、圓方之湊之渚島浪立巴妻唱立而邊近著毛

まながうら (眞長乃浦) 近江國高島郡三尾郷にあるなるべし、卷九に、思乍雖來來不勝而水尾崎眞長乃浦乎又願津

まぬ (眞野) 攝津國八部郡にあり、(頭註、類字集に、大和) (浦) 卷四に、眞野之浦乃與騰乃繼橋情

山毛思哉妹之伊目爾之所見、十一に、吾妹子之袖乎憑而眞野浦之小菅乃笠乎不著而來二來有、○

〔池〕 十一に、眞野池之小菅乎笠爾不縫爲而人之遠名乎可立物可、○〔榛原〕 卷三に、去來兒等倭

部早白菅乃眞野乃榛原手折而將歸、又、白菅乃眞野之榛原往左來左君社見良目眞野之榛原、卷七に、

古爾有監人之覓乍衣丹摺眞野之榛原、又、白菅之眞野乃榛原心從毛不念君之衣爾摺

まぬ (眞野) 和名抄に、陸奥國行方郡眞野、とあり、新拾遺集に、冬枯のまの、かやはらほにい

し面かけ見せておける霜かな、卷三に、陸奥之眞野乃草原雖遠面影爲而見云物乎

まゝ (眞間) (間々) (眞々) (麻萬) (麻末) など書り、下總國葛飾郡に、今も眞間といふところありと

ぞ、卷三に、古昔云々勝牡鹿乃眞間之手兒名之云々、又、吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間々能手兒

名之奥津城處、卷九に、鶏鳴云々勝牡鹿乃眞間乃手兒奈我云々、十四に、可都思加乃麻末能手兒奈

乎麻許登可聞和禮爾奈須奈布麻末乃氏胡奈乎、又、可豆思加乃麻萬能手兒奈家安里之可婆麻末乃於

須比爾美毛登杼呂爾、○〔浦〕 十四に、可豆思加乃麻萬能手兒未乎許具布爾能布奈妣等佐和久奈

美多都良思母、○〔入江〕 卷三に、勝牡鹿乃眞々乃入江爾打磨玉藻刈兼手兒名志所念、○〔井〕 卷

九に、勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所念、○〔繼橋〕 十四に、安能於登世受由可

牟古馬母我可都思加乃麻末乃都藝波思夜麻受可欲波牟、○〔磯〕 十四に、可豆思加能麻萬能手兒奈

家安里之可婆麻末乃於須比爾奈美毛登杼呂爾、(眞間の磯邊に浪も動響になり、)

まゝ (麻萬) 相模國足柄郡の萬々下の郷と云は、足柄の竹下と云所の下にて、酒匂川の上にあると

略解に云り、十四に、阿之我利乃麻萬能古須氣乃須我麻久良安是加麻可左武許呂勢多麻久良

まゆみのをか (眞弓乃崗) (檀乃岡) など書り、諸陵式に、眞弓丘陵、(岡宮御宇天皇、在大和國高

市郡、兆城東西二町、南北二町、陵戸六畑) 續紀に、稱徳天皇、天平神護元年冬十月辛未、行幸

紀伊國、癸酉、過檀山陵、詔陪從百官、悉令下馬儀衛卷其旗幟、とあり、味樞、丘の西一里許に

越村あり、其南に眞弓村といふありとぞ、卷二に、天地之云々由緣母無眞弓乃崗爾云々、又、外爾

見之檀乃岡毛君座者常御門跡侍宿爲鴨、又、鳥塙立飼之鷹乃兒栖立去者、檀崗爾飛反來年

まりふのうち (麻里布能宇良) (麻理布能宇良) など書り、周防國鞆生、もと玖珂郡にありしを、今

は、比波郡に隸といへり、十五に、周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌、眞可治奴伎布爾之由加受波

見禮杼安可奴麻里布能宇良爾也杼里世麻之乎、又、大船爾可之布里多豆天波麻藝欲伎麻里布能宇良

爾也杼里可世麻之、又、伊毛我伊徹治知可久安里世婆見禮杼安可奴麻理布能宇良乎見世麻思毛能乎

○み部

みうらさき (御宇良佐伎) 和名抄に、相模國御浦郡御浦、(美宇良) とあれば、その崎をいふにや、

又、陸奥國富山の麓の海に出たる岬を、三浦崎といふよし、彼國鹽竈の祠官藤塚知明云り、と中山

嚴水云り、もしは其處を云るにもあらむ、十四に、芝付乃御宇良佐伎奈流根都古具佐安比見受安良

婆安禮古非米夜母

みえりのさと (美衣利乃佐刀) 未詳ならず、本居氏云、和名抄に、駿河國志郡太に、夜梨郷あり、夜

は衣の誤が、又此集の衣は、夜の誤にてもあるべきかといへり、其説のごとくならば、美は、御吉

野の御なり、卷廿に、多知波奈能美衣利乃佐刀爾父乎於伎豆道乃長道波由伎加臣奴加毛

みかのほら (三香原) (三日原) など書り、山城國相樂郡にあり、聖武天皇天平十二年、始て恭仁京を

造られ、十三年、平城宮の兵器を獲原宮に運しめられ、新京を大養德恭仁大宮と號け給ふよし、委

しく續紀に見えたり、歴代編年集成に、天平十二年、遷都瓶原宮、(山城國相樂郡) 十三年、改瓶

原宮、號久仁宮、とあるこれなり、山城名勝志に、瓶原、在木津渡東一里半許、郷内廣、今有九

村、と見ゆ、卷四に、三日之原客之屋取爾云々、卷六に、三日原布當乃野邊清見社大宮處、定異等

霜、又、三香原久邇乃京師者云々、三香原久邇乃京者荒去家里、大宮人乃遷去禮者、○(離宮) 此

離宮は、和銅六年六月乙卯、行幸獲原離宮、といふことも見えて、久邇京より前にありしなり、

卷四に、神龜二年乙丑春三月、幸三香原離宮之時云々

みかは (三河) (水河) など書り、國名、參河なり、卷三に、妹母我母一有加母三河有二見自道別不

勝鶴、又、水河乃二見之自道別者吾勢毛吾毛獨可毛將去

みかさのもり (三笠杜) 和名抄に、筑前國御笠郡御笠、とあるこれなり、名義は、神功皇后紀云、皇

后欲擊熊鷹、而自樞日宮遷于松峽宮、時、飄風忽起御笠隨風、故時人號其所曰御笠也、

と見えたり、現存六帖に、大野なる三笠の杜にしがれふり染なす紅葉今さかりなり、續千載集に、大

野なる御笠の杜にゆたすきかけてもしらじ袖のしぐれは、などあり、さて和名抄によれば、大野

と御笠とは、同郡ながら別郷なれど、隣里にて、御笠杜といふ地は、大野に屬たりし故に、大野在

御笠杜と云りしにぞあらむ、さるは貝原氏が筑前名寄に、大野山は、御笠郡御笠森の邊なり、東南

の方、四王寺山の西のふもと、すべて大野といふよししるし、かくて御笠森といふは、今の雜掌の

限の町の東北にありて、大道より二町ほどありて、山田村に屬す、今は昔の森の楠二株あり、共し

るしばかり残りとしるせり、これにて、その隣近なるよし思ふべし、さてこの杜に鎮座神は、未

詳に考へず、神名帳に、筑前國御笠郡竈門神社、(名神大) とあるは、玉依姬を拜祭れるよし、即竈

門山上にありとぞ、しかれば別神ならむ、又帳に同郡筑紫神社、(名神大) とあれど、それは原田村

といふにあるよしなれば、別ならむか、なほ所のさま、くはしくしれらむ人にたづねて決むべし、

卷四に、不念乎思當云者大野有三笠杜之神思知三

みかさ (御笠) (三笠) など書り、大和國添上郡春日にあり、○(山) 卷二に、御笠山野邊往道者已伎

太雲繁荒有可久爾有勿國、卷三に、春日乎春日山乃高座之御笠乃山爾云々、又、高樓之三笠乃山爾

鳴鳥之止者繼流戀哭爲鳴、卷六に、雨隱三笠乃山乎高御香裳月乃不出來夜者更降管、又、待難爾余

爲月者妹之着三笠山爾隱、而有來、卷七に、大王之御笠山之帶爾爲流細谷川之音乃清也、又、春日

在三笠乃山二月船出遊士之飲酒杯爾陰爾所見管、卷八に、鐘禮能雨無間零者三笠山木末、歷色附爾

家里、又、皇之御笠乃山能黃葉今日之鐘禮爾散香過奈牟、卷十に、能登河之水底并爾光及爾三笠

之山者咲來鳴、又、春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見、又、鴈鳴之喧之從

日春日在三笠山者色付丹家里、十一に、君之服三笠之山爾居雲乃立者繼流戀爲鳴、十二に、妹侍

跡三笠乃山之山菅之不止八將戀命不死者、又、春日在三笠乃山爾居雲乎出見每君乎之會念、○(野)

卷六に、八隅知之云々、春日山御笠之野邊爾云々

みかたのうみ (三方之海) 和名抄に、若狹國三方(美加太)郡三方、とあり、その海なり、(頭註、

ぐり、當國三方の郡に湖三あり、御形の湖、) 卷七に、若狹在三方之海之濱清美伊往變良比見跡不飽可聞

小濱より六里東北にあり、長二里深し、) 卷七に、若狹在三方之海之濱清美伊往變良比見跡不飽可聞

みかきのやま (三垣乃山) 大和國高市郡三諸山に立向へる山を呼なるべし、三諸はもとより神のま
します山なれば、その山をめぐれる山を、神社の齋垣になすらへて、御垣の山とは云るならむ〔頭註、
古里のみかきはらのほじ紅葉心とらら〕卷九に、三諸之神邊山爾立向三垣乃山爾云々〔新勅撰、
せ秋の木からし、これは吉野にあり〕

みかねのたけ (御金嶺) 神名帳に、大和國吉野郡金峰神社、僧尼令義解に、假如山居在金嶺者、
判下吉野郡之類也、大日本靈異記に、聖武天皇代、廣達入於吉野金峰、經行樹下而求佛道云
云、文德天皇實錄、卷四、卷五、卷六、三代實錄卷二等にも、大和國金峯神見え、からぶみ義楚六
帖に、日本國金峯山有松柏といひ、又元亨釋書、拾芥抄、宇治拾遺、今昔物語など、其他の物に
も、金峯あまた見えて、あけつくすべからず、夫木集には、神の座こがねの峯ともよめり、後世ま
でも、金嶺とてかくれなし、御金と御の言をそへていふは、御吉野御熊野などいふ例の如し、し
かるを左の卷一なるを、耳我と書たるによりて、はやく八雲御抄に、みかかの嶺は、吉野に近き山
のよしか、せ給へるをはじめて、近來大和國の名處を書るものなどに、吉野山の一名といひ、また
窪垣内村の上方にある山ぞ、などいへるたぐひは、皆今の字に就て、おしあてに説るならむ、中に
も岡部氏の萬葉考に、耳我は御岳てふ意にて、此山の形の大きな巒に似たるよりいふならむとい
ひ、且十三に御高嵩とあるをさへに引出て、金は岳字の誤にて、ミ、ガノタケぞと謾におして定
めしは、いかにぞや、そもく美加ともしいふは、御麩の意にて、御は例の美稱にそへたる言なれ
ば、加とのみもいへる例多くて、山加、比良加、多志良加などいへるをや、しかればいかで御々麩と
御の言を重ねてはいふべきぞ、しかのみにあらず、美加の加の言は、清て唱る例なるを、我の濁音
の字を用たるも、たちまちたがへり、しかるを世の古學者、皆件の僻説に方人して、今まで誤をた

たしたる人なきを、うれたみおもひて、事長けれど、いさかおどろかしおくものぞ、卷一に、三
吉野乃耳我嶺爾云々、(耳我は誤字なるべし、十三に)、三吉野之御金嵩爾云々
みかものやま (美可母乃夜麻) 和名抄に、下野國都賀郡三鴨、(本に鴨を島と作るは誤なり、)兵部省
式に、下野國驛馬、(三鴨)とある、その山なり、十四に、之母都家野美可母能夜麻乃許奈良能須
麻具波思兒呂波多賀家可母多牟

みくまりやま (水分山) 神名帳に、大和國吉野郡水分神社、(大、月次新嘗)とあり、其地の山なり、
古事記に、天之水分神、(訓分云久麻里)祈年祭祝詞に、水分坐皇神等能前爾白久、吉野、宇陀、都
祁、葛木、登御名者白氏云々、など見えたり、卷七に、神左振磐根已凝敷三芳野之水分山乎見者
悲毛

みくにやま (三國山) 神名帳に、越前國坂井郡三國神社、とあり、これによれば、坂井郡三國とい
ふ地の山なるべし、書紀體天皇卷に、男大迹天皇、譽田天皇五世孫彦主人王子也、母曰振媛云
云、天皇父聞振媛顔容姝妙甚有嫩色、自近江國高島郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、(中此
云那)納以爲妃、遂産天皇云々、とあるを見れば、當昔いまだ坂中井といふ地は狭くて、三國郷
の中に隸たる一の邑名なりけむを、後にやうく坂井の地ひろがり行て、一郡名のとされる故に、三
國郷は、その郡内の地となれるなるべし、卷七に、三國山木末爾住歷武佐左妣乃待鳥如吾俟將瘦
みく、ぬ (水久君野) 武藏國秩父郡に水久具利といふ里あり、其地にやと云り、さて野は借字にて、
沼なるべし、十四に、水久君野爾可母能波抱能須兒呂我宇倍爾許等於呂波徹而伊麻太宿奈布母
みこしのさき (美胡之能佐吉) 相模國風土記に、鎌倉郡見越崎、每有速浪崩石、國人名號伊會

布利、謂振石也、と見えたり、十四に、可麻久良乃皇胡之能佐吉能伊波久叔乃伎美我久山倍伎已許呂波母多白

みさき (三崎) 筑前國御笠郡にあるなるべし、たゞ海の岬を云りともきこゆれども、なほ地名なるべし、廻はミと訓べし、ワと訓はわろし、島廻、磯廻の廻なり、地名につけて某廻といふは、千沼廻、鹿蒜廻などいふこれなり、卷四に、三崎廻之荒磯爾縁五百重浪立毛居毛我念流吉美

みしま (三島) 神名帳に、攝津國島下郡三島鳴神社とあり、其處の江なり、十一に、三島音未苗在時待者不著也將成三島菅笠、〔頭註〕新勅撰集、みしま江の玉江のまこもかりにだとはではどふる五月雨

〇〔江〕 卷七に、三島江之玉江之薦乎從標之已我跡會念雖未刈、十一に、三島江之入江之薦乎刈爾社吾乎婆公者念有來

みしまぬ (三島野) (美之眞野) など書り、和名抄に、越中國射水郡三島、とある、その野なり、十七に、大王乃云々三島野乎會我比爾見都追云々、又、矢形尾能多加乎手爾須惠美之麻野爾可良奴日麻爾久都奇會倍爾家流、十八に、美之麻野爾可須美多奈妣伎之可須我爾伎乃敷毛家布毛山伎波敷里都追

みちのく (陸奥) (美知能久) など書り、國名なり、和名抄には、陸奥、(三知乃於久)とあり、於は乃の餘韻に含みて、自省かる古例なれば、於をいはざるは古さまなり、卷三に、陸奥之眞野乃章原雖遠面影爲而所見云物乎、卷七に、陸奥之吾山多良眞弓著弦而引者香人之吾乎事將成、十四に、紫筑奈留爾抱布兒山惠爾美知能久乃可刀利乎登女乃山比思比毛等久、又、美知乃久能安太多良末山美波自伎於伎氏西良思馬伎那婆都良波可馬可毛、十八に、葦原能云々美知能久乃小田在山爾云々、〇〔山〕

十八に、須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久

みちのなか (美知乃奈加) 國名、越中をさせり、越中をば、越之道中と云が故なり、十七に、美知乃奈加久爾都美可未波多妣山伎母之思良奴伎美乎米具美多麻波奈

みちのしり (路後) 國名、備後をさせり、和名抄に、備後(吉備乃美知乃之利)とあるこれなり、十一に、路後深津島山暫君目不見苦有

みづき (水城) 和名抄に、筑前國下座郡三城、(美都木)城邊(木乃倍)など見えたり、三城は、水城を、後に清音に訛りて唱へたるものか、城邊は、水城に隣れる故負る地名か、書紀天智天皇卷に、三年是歲云々、又於筑紫築大堤貯水、名曰水城、と見えたり、續紀に、天平神護元年三月辛丑云々、太宰少貳從五位下采女朝臣淨庭、爲脩理水城、專知官といふことも見ゆ、松下氏云、後宇多天皇弘安四年、高麗賊船五百艘、與蒙古十萬軍船、共至八角島、見元史、時關東大軍及九國二島兵、悉集于水城、更修水城、數十里間以三大石築之、高一丈餘、其上平坦、乘馬直下賊船、〔頭註〕云、御笠郡水城、日本紀に云々、此堤今にあり、其高四間、根盤十五間、長東西四百間あり、堤の内、の詩よりか田となりて、今はため池にはあらず、太宰府にちかし、水城關、水城の大堤の東の山きはの道路に、その筑紫へまかりける、府に入日、水城の關にむれ向ふちの心もしらぬもろ人、高遠、右の歌の詞書に、此歌は卷六に、大夫跡念在吾哉水莖之水城之上爾泣將拭

みつき (水調) 和名抄に、備後國御調(三豆木)郡、とあり、十五に、備後國水調郡

みつがは (三河) 略解云、ある人近江國滋賀郡にありといへり、土人に問べし、卷九に、三河之淵瀬物不落左提刺爾衣手沾于兒者無爾

みづしま (水島) 和名抄に、肥後國菊池水島とあり、書紀景行天皇卷に、十八年夏四月壬戌朔壬申、

自_{ウツチ}海路_ヲ泊_ニ於_ニ葦北_ノ小島_ニ、而進食時召_ニ山部阿弭古之祖_ノ小_左令_ニ進_ニ冷水_ニ、適_ニ是時_ニ島中無_レ水、不_レ知_ニ所爲_ニ、則仰_ニ之祈_ニ于_ニ天神地祇_ニ、忽寒水從_ニ崖傍_ニ涌出_ニ、乃酌_ニ以獻_ニ焉、故號_ニ其島_ニ曰_ニ水島_ニ也、其泉猶今在_ニ水島崖_ニ也、かゝれば、當昔は葦北に隸るが、後に菊池郡を置れて、その郡に屬られるるべし、仙覺抄に、風土記云、球麻乾七里海中_ニ有_レ島、稍可_ニ七十里_ニ、名曰_ニ水島_ニ、島出_ニ寒水_ニ、逐_レ潮高下云々、とも見えたり、枕雙紙に、島は云々水島、卷三に、如_ニ聞_ニ眞貴久奇母神_ニ左備居賀許禮能水島_ニ、又、葦北乃野坂乃浦從船出爲_ニ而水島爾將去浪立莫勤

みつ (御津) (三津) (見津) (美津) (美都) など書り、攝津國西成郡にあり、今高津の西の方、古の御津なりとぞ、古事記仁德天皇條に、於是大后大恨怨、載_ニ其御船_ニ之御綱柏者、悉投_ニ棄_ニ於海_ニ、故號_ニ其地_ニ謂_ニ御津前_ニ也、とあれば、御綱柏によりて、御津といふ號は起れるなり、しかれども難波御津は、實は官船の出入する津なるによりて、貴みて御津といふにやとも思はるれば、かの大后の御故

事にかけていへる談は、いはゆる先代舊辭にてもあるべし、書紀仁賢天皇卷に、難波御津、齊明天皇卷に、難波三津之浦なども見ゆ、住吉御津は、同國同名にて郡異れり、卷三に、鹽干乃三津之海女乃久具都持王藻將_ニ行見_ニ、卷四に、大伴乃見津跡者不_レ云_ニ赤根指照有_ニ月夜爾直相有_ニ登聞_ニ、十一

に、白細砂三津之黄土色出_ニ而不_レ云_ニ耳_ニ我戀樂者_ニ、又、大伴之三津乃白浪間無_レ我戀良苦乎人之不知久、十五に、大伴能美津爾布奈能里許藝出_ニ而者伊都禮乃思麻爾伊保里世武和禮、卷廿に、天皇乃云

云安之我知流難波能美津爾云々、○〔濱〕卷一に、去來子_ニ早日本邊_ニ大伴乃御津乃濱松待戀奴良牟、又、大伴乃美津能濱奈有_ニ忘_ニ貝家奈有_ニ妹乎_ニ忘_ニ而念哉、卷四に、臣女乃云々、鏡成見津乃濱邊爾云々、

卷五に、神代欲理云々大伴御津濱備爾云々、卷七に、大伴之三津之濱邊乎打曝_ニ因來浪之逝方不知

毛、十五に、安佐散禮婆云々可_ニ我美奈須_ニ美津能波麻備爾云々、又、奴婆多麻能欲安可之母布爾波許

藝由可奈美都能波末麻都麻知故非奴良武、十三に、王之云々大伴之御津之濱邊爾云々、○〔崎〕卷三に、三津崎浪矣恐_ニ隱_ニ江乃舟公_ニ宣_ニ奴島崎爾_ニ、卷八に、玉手次云々難波方三津崎從云々、○〔泊〕

十五に、大伴乃美津能等麻里爾布爾波且々多都多能山乎伊都可故延伊加武、○〔松原〕卷五に、大伴御津松原可吉掃且利禮立待速歸坐勢、卷七に、朝榮寸_ニ眞梶_ニ擲出_ニ而見_ニ乍來_ニ之三津乃松原浪越似

所見

みつ (三津) 攝津國住吉郡にあり、古事記に、墨江之津、書紀に、住吉津などあり、神功皇后卷、

住吉大神の御誨詞に、大津渟中倉之長峽とある、大津も同じ、委しくは、既くす部すみのえ條に云

り、十九に、慮見津云々住吉乃三津爾船能利云々

みづほのくに (水穗之國) 天下の總名なり、水穗といふことの由は、既くあ部あしはら條に委しく

説り、卷二に、天地之云々葦原乃水穗之國乎云々、又、挂文云々定_ニ之水穗之國乎云々、卷九に、

父母賀云々葦原乃水穗之國爾云々、十三に、葦原乃水穗之國丹云々、又、葦原水穗國者云々、十八

に、葦原能美豆保國乎云々

みつがぬ (美都我野) 未詳ならず、駿河國にあるにや、十四に、都武賀野爾須受我於等伎許由可牟

思太能等能乃奈可知師登我里須良思母、(或本歌曰、美都我野爾、)

みなふち (南淵) (見名淵) など書り、大和國十市郡にあり、書紀天武天皇卷に、五年夏四月、是月勅禁_ニ南淵山細川山_ニ、並莫_ニ二蜀_ニ、薪_ニ、とあるを見れば、南淵と細川とは、地たがへるやうなれど、そのあたり、なべては南淵といふ總名負る地にて、其地の中に、わきて南淵山、細川山とてある故に、

いへるにやあらむ、かれ此集には、南淵之細川山とは云るなるべし、このこと契沖も既くいへり、
卷七に、南淵之細川山立檀弓束纏及人二不知所、○〔山〕卷九に、御食向南淵山之巖者落波
太列可削遺有、卷十に、眞十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黃葉將散
みなべのうら (三名部乃浦) 和名抄に、紀伊國日高郡南部、とあり、今も岩代の南に、三名部村み
なべ浦あるよし、本居氏云り、卷九に、三名部乃浦鹽莫滿鹿島在釣爲海人乎見變來六
みなのせがは (美奈能瀬河泊) 相模國鎌倉郡にあり、今もかの郡に、常は水乾て、潮満時は、高浪
の立川有といへり、十四に、麻可奈思美佐禰爾和波山久可麻久良能美奈能瀬河泊余思保美都奈武賀
ぬね (三野) 國名、美濃なり、○〔國〕十三に、百岐年三野之國之云々、○〔山〕十三に、百岐年
云々奥十山三野之山

みぬめ (敏馬) (三犬女) (見宿女) (美奴面) など書り、攝津國菟原八部二郡の海濱に亘れり、卷三に、

珠藻刈敏馬乎過夏草之野島之崎爾舟近著奴、十五に、安佐散禮婆云々多太牟可布美奴面乎左指天云
云、○〔浦〕卷六に、御食向云々直向三犬女乃浦云々、又、八千樺之云々定而師三犬女乃浦者云
云、又、眞十鏡見宿女乃浦者百船過而可往濱有七國、○〔崎〕卷三に、島傳敏馬乃崎乎許藝廻者
日本戀久鶴左波爾鳴、又、與妹來之敏馬能崎乎還左爾獨之見者涕具末之毛
みのしま (蓑島) 筑前國那珂郡伊知郷にあり、
ではさしてゆか 卷五に、那珂郡伊知郷蓑島人
なん 槍垣廻 卷五に、那珂郡伊知郷蓑島人

みふねのやま (三船乃山) (御舟乃山) など書り、大和國吉野郡茶摘里の東南にありて、外より見れ

ば、その形船の如しとぞ、卷三に、瀧上之三船乃山爾居雲乃常將有等和我念久爾、又、王者千
歳爾麻佐武白雲毛三船乃山爾絶日安良米也、卷六に、瀧上之御舟乃山爾云々、又、瀧上乃三船之
山者雖畏思忘時毛日毛無、卷九に、瀧上乃三船山從秋津邊來鳴度者誰喚兒鳥、卷十に、朝霧
爾之怒々爾所沾而喚子鳥三船山從喧渡所見

みへのかは (三重乃河) 和名抄に、伊勢國三重(美倍)郡、とあり、古事記に、伊勢國之三重采女見

えたり、其地の河なり、卷九に、吾疊三野乃河原之儀裏爾如是鴨跡鳴河蝦可聞
みほ (三穗) (三保) など書り、紀伊國日高郡にあり、○〔石室〕卷三に、皮爲酢寸久米能若子我伊
座家留三穗乃石室者雖見不飽鴨、○〔浦〕卷三に、加座饒夜能美保乃浦廻之白管仕見十方不怜無人
念者、卷七に、風早之三穗乃浦廻乎撈舟之船人動浪立良下

みほのうら (三穗乃浦) 駿河國廬原郡にあり、神名帳に、駿河國廬原郡三穗神社、三代實錄に、貞

觀七年十二月廿一日戊辰、授駿河國從五位下御廬神從五位上、とあり、今三穗といふ所は、清見が
崎より、入海ごしに向にありといへり、卷三に、廬原乃清見之崎乃三穗乃浦乃寬見乍物念毛奈信
み、なし (耳梨) (耳爲) (無耳) など書り、大和志に、大和國在三十市郡木原村上方、四面田野、孤
峰森然、山中樞樹多矣、因又呼三梔子山、とあり、今天神山といふよし、谷重遠翁云り、古今集俳諧、
耳なしの山のくちなしえてしかな思の色のしたぞめにせむ、卷一に、高山波雲根火雄男志等耳梨與
相評競伎云々、又、八隅知之云々耳爲之青菅山者云々、○〔山〕卷一に、高山與耳梨山與相之時
立見爾來之伊奈美國波良、○〔池〕十六に、無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來乍潛者水波將瀾

み、らくのさき (美彌良久崎) 續後紀に、承和四年七月癸未、太宰府馳傳言、遣唐三箇船共指三松浦
郡曼樂崎發行、とあり、かけるふ日記に、いづれの國とかや、み、らくの島となむいふなるなど、く

ちぐちかたるをきくに、いとしらまほしう、かなしうおぼえて、かくぞいはるゝ、ありとだによそ
にても見む名にし負ば吾にきかせよみゝらくの島、といふを、せうとなる人聞て、それもなくく、
いづことか音にのみきくみゝらくの島隠にし人を尋む、契沖云、顯昭法師の袖中抄に云、みゝらくの
わが日の本の島ならばけふもみかげにあはましものを、此歌は俊頼朝臣歌なり、その詞にいはいく、
尼うへうせ給うて後、みゝらくの島のことをおもひてよめるとあり、今考、能因坤元儀、云肥前國ち
かの島、此島にひゝらくのさきといふ所あり、其ところには夜となれば、死たる人あらはれて、父
子相見ると云々、俊頼わが日の本の島ならばと詠るは、日本にあらずと存する歟、考、萬葉集第十
六、白自肥前國松浦縣美彌良久崎發船と云々、此國といふことは一定なり、能因は、ひゝらくとい
ひたれど、俊頼みゝらくとよみたるはたがはず、如此の事、慥考、本文、可詠也、不、然は僻事出來
なり、と云り、十六に、自肥前國松浦縣美彌良久崎發船

みむろのやま (三室山) 左の歌の次上には、三毛侶之其山奈美爾云々、三室山は、とあり、即三輪
山なり、次下には、三諸就三輪山見者云々、とありて、其中にはさまれたれば、この三室山は、城
上郡三輪を云るなるべし、卷七に、我衣色服染味酒三室山黄葉爲在

みもろ (奠器圓隣) (三諸) (三毛侶) など書り、大和國城上郡三輪山をさせり、○〔神〕 卷二に、三
諸之神須疑已具耳矣自得見監乍共不寐夜叙多、卷九に、三諸乃神能於婆勢流泊瀬河水尾之不
斷

者吾忘禮米也、○〔山〕 卷一に、奠器圓隣之大相土見年湯氣吾瀨子之射立爲兼五可新何本、卷七に、
三毛侶之其山奈美爾兒等手乎卷向山者繼之宜霜、十一に、呼酒之三毛侶乃山爾立月之見我欲君我馬
之足音曾爲

みもろ (三諸) 大和國高市郡飛鳥の神岳をさせり、卷三に、三諸乃神名備山爾云々、卷九に、三諸
之神邊山爾云々、(邊は連字の誤ならむ) 十三に、三諸者人之守山云々、又、三諸之神名備山從云々、
○〔神〕 十三に、葦原笑云々、甘背備乃三諸乃神之帶爲明日香之河之云々、○〔山〕 十三に、葦原
笑云々、甘南備乃三諸山者云々、又、神名備能三諸之山丹隱藏杉思將過哉蘿生左右、又、月日
攝友久經流三諸之山磯津宮地、(磯津宮地は、離宮處なり、卷三に、天皇御遊雷岳之時、柿
本朝臣人麻呂作歌に、皇者神二四座者天雲之雷之上二廬爲流鴨、とありて、其天皇は、持統天
皇にましませば、かの御時より始れる離宮なるべし、)

みもろとやま (見諸戸山) 山城國宇治郡にありと、契沖云り、卷七に、珠匣見諸戸山矣行之鹿齒
面白四手古昔所念

みやけ (三宅) 和名抄に、大和國城下郡三宅(美也介)とあり、此外諸國に三宅といふ郷、これかれ
あれど、大和國をよめる歌どもに次たれば、なほ大和のなるべし、○〔原〕 十三に、打久津三宅乃
原從云々、○〔道〕 十三に、父母爾不令知子故三宅道乃夏野草乎榮積來鴨
みやけのうら (三宅之酒) 和名抄に、下總國印幡郡にも、海上郡にも、三宅郷見えたる中に、鹿島
にさし向へるは、印幡郡なりとぞ、さらば印幡郡三宅之浦と定むべきにや、卷九に、牡牛乃三宅
之酒爾指向鹿島之埼爾云々、(酒字、舊業酒に誤れり、)

みやじろのをか (美夜自呂乃緒可) 未詳ならず、十四に、美夜自呂乃緒可敵爾多氏流可保我波奈莫佐

吉伊低會禰許米氏思努波武

みやのせがは (美夜能瀬河泊) 未詳ならず、十四に、宇知比佐都美夜能瀬河泊能可保婆奈能孤悲天

香眼良武伎會母許余比毛

みわ (三輪) (彌和) (三和) など書り、大和國城上郡にあり、名の由縁は、古事記崇神天皇條に、活玉

依毘賣云々、答曰、有麗美壯夫、不知其姓名、每夕到來供住之間、自然懷妊、是以其父

母、欲知其人、詢其女曰、以赤土散床前、以閉蘇紡麻貫針刺、其衣爛、故如教、而且

時見者、所著針麻者、自三戸之鈎穴、搥通而出、唯遺麻者三勾耳、爾即知自鈎穴出之狀、而

從糸尋行者、至美和山、而留神社云々、故因其麻之三勾遺、而名其地謂美和一也、と見

えたり、卷四に、味酒呼三輪之祝、我忌杉手觸之罪、敷君二遇難寸、卷八に、味酒三輪乃祝之山照

秋乃黃葉散莫惜毛、〇〔山〕 卷一に、味酒三輪乃山云々、又、三山輪乎然毛、隱賀雲谷裳情有南吠

可苦佐布倍思哉、卷七に、三諸就三輪山見者、隱口乃始瀬之檜原所念鴨、卷九に、春山著散過去鞆

三和山者未含君待勝爾、〇〔川〕 卷十に、暮不去河蝦鳴成三和河之清瀬音乎聞師吉毛、〇〔檜

原〕 山の北の奥を檜原と云よし、貝原氏大和巡覽記に見えたり、卷七に、古爾有險人母如吾等

架彌和乃檜原爾挿頭折兼、又、往川之過去人之手不折者裏、立三和之檜原者

みを、(三尾) (水尾) など書り、和名抄に、近江國高島郡三尾、(美乎)とあり、書紀繼體天皇卷に、近

江國高島郡三尾之別業、と見えたり、卷七に、大御舟竟而佐守布高島之三尾勝野之奈伎左思所念、

〇〔崎〕 卷九に、思乍雖來來不勝而水尾崎眞長乃浦乎又願津

〇む部

むこ (六兒) (武庫) (牟故) など書り、和名抄に、攝津國武庫郡武庫、(無古)とあり、今いふ兵庫な

り、兵庫は、武庫の字につきていひ出たる後の稱なり、しかるを元亨釋書に、昔神功皇后征新羅

而還、埋如意珠及金甲冑弓箭寶翹衣服等、故曰兵庫、とあるは、後に武庫の字に就て、牽強たる

説にして、更にいふにも足ぬうけことなり、兵庫は、牟故と書るに同じく、たゞ假字のみにこそあ

れ、〔頭註、書紀神功皇后卷に、務古水門、通證云、風土〕 〇〔河〕 卷七に、武庫河水尾急嘉赤駒、足何久

激、沽邪流鴨、〇〔浦〕 卷三に、武庫浦乎榜轉小舟粟島矣背(向)爾見乍、乏小舟、十五に、武庫能

浦乃伊里江能渚鳥羽具久毛流伎美乎波奈禮、古非爾久奴倍之、又、安佐妣良伎許藝、豆天久禮婆牟故能

宇良能之保非能可多爾多豆我許惠須毛、〇〔海〕 卷三(或本)に、武庫乃海、船爾波有之伊射里爲流海

部乃釣船浪、上從所見、十五に、武庫能宇美能爾波余久安良之伊射里須流安麻能都里船奈美能宇倍由

見由、〇〔渡〕 十七に、多麻波夜須武庫能和多里爾天傳日能久禮由氣婆家乎之會於毛布、〇〔泊〕

卷三に、墨吉乃得名津爾立而見渡者六兒乃泊從出流船人

むざ (武軼) (和名抄に、上總國武射郡、卷廿に、武軼郡

むざし (武藏) (牟射志) など書り、國名なり、〇〔野〕 十四に、武藏野爾宇良做可多也伎麻左氏爾

毛乃良奴伎美我名宇良爾低爾家里、又、武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻爾末爾吾者余

利爾思乎、又、古非思家波素氏毛布良武乎牟射志野乃宇家良我波奈乃伊呂爾豆奈由米、又、伊可爾

思氏古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我波奈乃伊呂爾低受安良牟、又、和我世故乎安舒可母伊波武牟

射志野乃宇家良我波奈乃登吉奈伎母能乎、〇〔嶺〕 十四に、武藏爾能乎美爾見可久思和須禮遊久伎

美我名可氣氏安乎禰思奈久流、○〔岫〕十四に、武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和我禮伊爾之與比欲
利世呂雄安波奈布與

むつだ (六田) 大和國吉野郡にあり、今吉野川の南にある町を、柳の宿とも、むつだとも、むだとも

も云、其少し川上に、六田の淀とてありと云り、〔頭註、千載集、是を見よ六田の淀にさでさしてしをれし
どりも深くか〕○〔河〕卷九に、河蝦鳴六田乃河之川楊乃根毛居侶雖見不飽君鳴、○〔淀〕卷七に、

音聞目者未見吉野河六田之與杼乎今日見鶴鳴

むなかた (宗形) (宗像) など書り、和名抄に、筑前國宗像(牟奈加多)郡、とあり、風土記に、宗像

大神自天降、居三崎門山之時、以青磬玉、置三奥宮之表、以三八尺紫磬玉、置三中宮之表、以三八尺

鏡、置三邊宮之表、以三三表、成三神體之形、納置三宮即隱之、因曰三身形郡、後人改曰三宗像、

とあり、宗像大神とは、須佐之男命の物實に因て所成る三柱女神にて、多紀理毗賣命者坐三胸形之

奥津宮、次市寸島比賣命者坐三胸形之中津宮、次田寸津比賣命者坐三胸形之邊津宮、此三柱神者、胸

形君等之以伊都久三前大神者也云々、と古事記に見えたり、書紀には、筑紫胸肩君等所祭神是也、

とあり、卷六に、筑前國宗形郡、十六に、筑前國宗像郡

むらさき (紫) 本居氏玉勝間に云るやう、名高の浦は、紀伊國名草郡にて、今はそのわたり海士郡

に入れり、今も名高とも、名方とも云里にて、藤白のすこし北の方なり、あるとき若山にて、人に

物語しけるついでに、一人が云やう、名高の里中に、むらさき川と云ちひさき川のあるなりと云、

そはいとおかしきことなるを、もし萬葉の歌によりて、事好むものにつけたる名にはあらじか、猶

たしかにとひきかまほしきことなり、とおのれいひ、又一人、おのれかのあたりは、しばくゆき

かよふところなれば、いまよくあなひとひきとてむと云るが、後にまたきたりしをりかたりけるは、

一日名高のわたり物せしに、かの川のこと、里のわらはべのあそび居たりしに、此里にむらさき川

と云川やあると問しかば、よくしりて、ちひさき流に橋かけたる所を、これなむそれとをしへつ

とぞかたりける、しかわらはべまでよくしれるは、つくり言にはあらざるを、もしこれふるき名

ならば、かの萬葉にむらさきの名高とつづけたる、いにしへのわたりを村崎などいひて、そこな

る名高の浦と云るにはあらじか、されどかの川のこと、なほ人づてなればたしかには云がたきを、

かしこに物せむ人なほよくたづね給へ、としるせり、件の説のみにては、なほ地名とも定めがたけ

れど、姑あぐ、卷七に、紫之名高浦之愛子地袖耳觸而不寐香將成、又、紫之名高浦乃名告藻之

於備將時待吾乎、十一に、紫之名高乃浦之靡藻之情者妹爾因西鬼乎

むらじがいそ (牟良自加己蘇) 駿河國防人が歌によめれば、かの國にある地名なるべし、なほ尋ぬ

べし、〔頭註、總國風土記に、島波郡建宗寺蘇我稻美連之頭也とあり、もし稻美連に〕卷廿に、多々美氣米牟

良自加己蘇乃波奈利蘇乃波々乎波奈例豆由久我加奈之佐

むろのえ (室之江) 和名抄に、紀伊國牟婁郡牟婁(無呂)とある處の江なるべし、十三に、紀伊國

之室之江邊爾云々

むろのうら (室之浦) 播磨國揖保郡にあり、新拾遺集に、友さそふ室の泊の朝風に聲をほにあけて

いづる舟人、十二に、室之浦之湍門之崎有鳴島之磯越浪爾所、沾可聞

むろがや (武路我夜) 未詳ならず、もしは武路我夜乃群草之にて、枕詞なるべきか、都留は、甲

斐國の地名なるべくおぼゆれば、群草之列といひつづけたるものか、然するときは、武路我夜は、

地名にあらざることをさらなり、しかれども、なほ地名ならむも知がたし、よく考へさだめていふべし、十四に、武路我夜乃都留乃都追美乃那利奴賀爾古呂波伊敏杼母伊未太年那久爾
むろふ (室原) 和名抄に、大和國城下郡室原、とありて、其下に、他本也と註したるは、古本には無りしを、他本に従て、那波氏などが加へたるものか、神名帳に、大和國宇陀 室生龍穴神社、と見え、後紀十三に、大和國室生山龍穴山などありて、大和志にも、宇陀村、室生村、有安明寺嶽、愛宕嶽、毘沙門嶽等支別、又有三嶽窟二、一曰仙人、一曰護摩、云々、とありて、嶽窟はいはゆる龍穴なるべし、さらば宇陀郡とすべきにこそ、城下郡とするは、おぼつかなし、十一に、日本之室原之毛桃本繁言大王物乎不成不止

○め部

めひ (賣比(婦負)など書り、和名抄に、越中國婦負(禰比)郡、とあり、婦、字禰とは訓べからず、左の歌の如く、本は賣比なりけむを、後に訛れるものか、但し本は婦負といふと、妻負といふ地と、並びてありけむを、後に妻負といふが、郡の名にもなりて、字には婦負とかき、婦負といふ地は、婦負郡に隸られたりけむを、婦負といふ地の稱も、在してありけむによりて、又後に混ひて、婦負と書るをも、禰比と唱へしものならむか、されば青木敦書が郡名考に、婦負を、當時官家に用る文書に、婦負と書と有と略解にもいへり、かの郡内に坐ます神に、鶺鴒姊比咩神、鶺鴒妻比咩神、と申すあり、鶺鴒も婦負郡の地名なり、婦負、婦負の名は、全かの姊比咩、妻比咩の神名によれる稱とおもはるればなり、この神のことは、三代實錄に見えたり、○〔野〕十七に、賣比能野能須々吉於之奈倍布流山伎爾夜度加流家敷之可奈之久於毛保遊、○〔河〕同卷に、婦負郡渡鶺鴒坂河時作歌

云々、賣比河波能波夜伎瀨其等爾可我里佐之夜蘇登毛乃乎波宇加波多知家里

○も部

もはきつ (裳羽服津) 常陸國新治郡にて、いはゆる鳥羽淡海に、かく名づけたる海津のあるにや、鳥羽淡海は、風土記に騰波江とありて、長二千九百步、廣一千九百步、と註しつれば、決くその江海の津なるべし、裳羽服津は、契沖、著裳津と云意にて、名付たる所の名か、心は、女の筑波山にまうづるに、こゝにして衣裳をあらためて、裳を著るといふ意にやといへり、卷九に、鶺鴒住筑波乃山之裳羽服津之其津乃上爾云々

もりべのさと (守部乃五十戸) 未詳ならず、(頭註、通證に、大和國山邊) 卷十に、橋乎守部乃五十戸之門田早稻刈時過去不來跡爲等霜

もるやま (守山) 大和國高市郡飛鳥の神岳なるべし、山守は諸國にもあれど、神岳は、天皇の且暮御覽し給ふ御山にて、ことに嚴しく山守を居て守しめ賜ふ故に、山名にもなれるなるべし、古今集に、白露もしぐれもいたくもる山は下葉残らず色付にけり、十一に、人祖未通女兒居守山邊柄朝
朝通 公不來哀 十三に、三諸者人之守山云々 浦妙山會泣兒守山
もろこし (唐) 蕃國なり、卷五に 神代欲理云々 唐能遠境爾都加播佐禮麻加利伊麻勢云々

○や部

やかみのやま (屋上乃山) 岡部氏の云るやう、石見國に住て、國形知る人のいへらく、まづ今の濱田城の北に、上府村下府村といふあり、是古の國府なり、そこより安藝國へ出ると、備後國へ出ると、北國へ向ふとの三の大道あり、此北國と備後へ向ふ方、上府より八里に屋上村あり、その近き

北方に渡村てふもありといへり、これにて渡の山も、屋上の山もしらるといへり、今國人に聞に、渡の山、八上山、いづれも邑知郡にて、矢上村といふに、今原山と呼ぶがある、それ即八上山なり、かくてその原山の中に、布于山といふがありて、きはめたる高山なりといへり、それをおしこめて、古は屋上の山といへることさらなり、又水戸侯釋に、或者に尋るに、備前赤坂郡に、八上と云所ありといへり、此に依て和名抄を考るに、赤坂の郡に宅美あり、流布本には、註を失へる故に、えよまずありしを、或者の説に思ひ合すれば、宅美はヤカミなり、とさだめあげつらひ給へり、しかれども、ヤカミに、宅美の訓音の字を用ひたりとせむことも、おぼつかなければ、なほ委しく國人にとひて、正すべきことなり、いかにまれ、今の屋上山は、なほ渡山に隣りたる山とせざれば、歌詞にわたりて、解がたき所あり、その詳悉なることは、古義に註しつれば、披見て考べし、うるさければこゝに略きつ、卷二に、角部經石見之海乃云々、孺隱有屋上乃山乃云々

やかみ (八上) 和名抄に、因幡國八上(夜加美)とあり、卷四に、因幡八上采女

やきづ (焼津) 神名帳に、駿河國益頭郡焼津神社、とあり、書紀景行天皇條に、日本武尊初至三駿

河云々、悉焚其賊衆而滅之、故號其處曰燒津、とあり、しかるを和名抄に、駿河國益頭

(末之豆)郡益頭(萬之都)とあるは、もと益は、ヤクの字音をヤキに轉し用ひたるにて、焼津の假字

なりしを、後に燒といふことを忌て、益字の訓に唱かへたるものなり、〔頭註〕風土記、駿河國益頭燒

所祭市杵備國の安那郡は、穴なるを、安字の訓にかへて、ヤスナと唱へ、大和國十市郡の郷名

富を、字形の近きによりて、飯富と書かへて、イヒトミと唱るなど此類なり、この事既く本居氏も

云り、卷三に、燒津邊吾去鹿齒駿河奈流阿倍乃市道爾相之兒等羽裳

やさかのるで (夜左可能爲提) 夜左可は、上野國群馬郡伊香保にある地名ならむか、爲提は堰塞な

り、又按に、夜左可もし地名ならずば、八尺にて、その堰塞の、堰杖と堰杖の間の亘の廣きをいへ

るにて、いと大きな堰のよしなるべし、略解に、其國人の云るは、伊香保の沼は、此嶺の半上に

在て、沼の三方には山ども立、一方は開けて野なり、其開けし方の水の落る所を、ゐでと云とぞと

あり、さていかにまれ、和名抄に、群馬郡井出とあるは、件の堰塞によれる名にやあらむ、十四に、

伊香保呂能夜左可能爲提爾多都努自能安良波路萬代母佐禰乎佐禰氏婆

やすのかは (安河) 近江國野洲郡にある河なり、續古今集に、治れる時にあふみのやすの川いくた

び御世にすまむとすらむ、十二に、吾妹兒爾又毛相海之安河安寝毛不宿爾戀渡鴨

やす (安) (夜洲) (夜須) など書り、高原天にありて、いはゆる天の安河なり、安河は、彌瀬河の意

なるべし、河の廣くて瀬の多きよしにて、負る名なるべし、さて神代に、八百萬神等の、神集坐し

河原にて、古典に出たるは、みな事實なるを、此集には、かの漢國の牽牛織女の故事を、かの天の

安河にいひよせてよめるなり、なほあ部あまのがは條考合すべし、○(川) 十八に、安麻涅良須云

云、夜須能河波奈加爾敵太豆々云々、又、夜須能河波許牟可比太知且等之能古非氣奈我伎古良河都

麻度比能欲會、○(河原) 卷二に、乾坤之云々、天漢安乃川原乃云々、○(渡) 卷十に、天漢安波

丹船浮而秋立待等妹告與具

やすのぬ (安野) 和名抄に、筑前國夜須(東西)郡、とあり、その野なり、書紀神功皇后卷に、元

年三月壬申朔辛卯、至三層増岐野、即擧兵擊羽白熊鷲、而滅之、謂左右曰、取得熊鷲、我心則安、

故號其處曰安也、とあり、〔頭註〕名寄云、夜須郡安野、長者町と四三島の間であり、方一里ある平なる

野なり、里人は、七板原と云、山隈山の北にあり、山隈山の南側にも廣き原

あり、山隈原と云、卷四に、爲君醜之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手、それにはあらず、

やたのぬ（八田乃野）和名抄に、大和國添下郡矢田、神名帳に、大和國添下郡矢田坐久志玉比古神社、などある處の野なり、有乳山は、越前國敦賀郡にありて、いはゆる愛發關ある地なり、既に云る如し、都近き矢田野の淺茅の色付けしきを見て、はるく越の國の山の雪の寒さを思ひやれるなり、度會弘訓が隨筆に、八田野を、大和國とする説をもどきて、和名抄に、加賀國江沼郡八田（也多）と云る處あり、加賀國は、類聚三代格に、嵯峨天皇、弘仁十四年、割越前國江沼、加賀二郡、爲加賀國とあれば、江沼郡の八田、此歌の比は、越前國なれば、これをよみ合せたりとせむ方、おだやかなるべし、大和とせむは物遠しと云るは、打聞には、さることと思はるれども、よく思ふに、此説は中々に穿鑿に過たりと云べし、其由は、越路の山に寒く雪のふる頃は、はやく同國の野もかれはてぬべし、色付は、霽雨の頃ならばこそあらめ、はやく雪ふる頃に至りては、似つかはしからず、越路は、いつかは雪の消る時ある、とさへもよみたる如く、都あたりとはこよなくかはりて、はやく雪のふることなれば、都あたりの草木のやうく色付ころ、越の國の雪をおもひやれることまことにさもあるべきことにこそあれ、さればなほ大和のとせむぞ、よく叶ふべき、諸州めぐりに、越前荒血山といふ名處なり、有乳山とも書、又矢田野と云名所も此邊なるべし、後鳥羽院御歌に、あち山矢田野の野邊も春めきぬ峰のあわゆき消やしらぬらむ、玉葉集に、衣笠前内大臣、吹風のあちの高根雪寒くやたの枯野にあられふるなり、新院御製、あち山夕こえ暮てやたの野のあさぢ刈敷こよひかもねむ、續後拾遺集に、藤原秀長、寒渡る音もあちの山風にやたのあさぢ霜むすぶなり、新千載集に、藤原重綱、やたの野のあさぢを寒み雪散て有乳の峰にかゝる浮雲、等持院

贈左大臣、あち山朝立雲のさゆるよりやた野をかけてふれるしら雪、新拾遺集に、正三位隆家、あち山夕霧はる、秋風に、やた野のあさぢ露もとまらず、新後拾遺集に、藤原長秀、あち山やたのひろ野の月影に宿り残さぬ淺茅生の露、爲家、やたの野に打出て見れば山風のあちの峰も雪降にけり、新後拾遺集に、權中納言經嗣、あち山こゆべき道も行暮ぬやた野の草に枕結ばむ、これらは皆有乳山の近きわたりにある趣によめれば、弘訓が説のごとく、加賀の八田の野を云りと定めてよまれたるなるべし、されど後世は、實地を正しくよむことはなく、皆古歌にすがりてよめることなれば、後世の歌によりてさだめいはむは、いふかひなきことなり、皆いつれも右の歌どもは、此集の八田野を、有乳山のほとりとすゑてよめるなれば、論のかぎりにあらず、さて八田野を、類字集に、越前敦賀郡とせるはおしあてなり、敦賀郡にはあることなし、有乳山こそ敦賀郡にあるなれ、同郡なりと推て定めしは、いとおろそかなり、卷十に、八田乃野之淺茅色付有乳山峰之沫雪寒零良之

やつり（矢釣）（八釣）大和國高市郡に八釣村あり、そこなり、書紀顯宗天皇卷に、召公卿百寮於近飛鳥八釣宮、即天皇位、とあり、○〔山〕卷三に、矢釣山木立不見落亂雪、朝樂毛、○〔河〕十二に、八釣河水底不絶行水、續戀是比歲

やなた（梁田）和名抄に、下野國梁田（夜奈多）郡、とあり、卷廿に、梁田郡

やぬ（矢野）和名抄に、伊豫國喜多郡矢野、とある、そこか、又同抄に、出雲國神門郡八野、備後國甲努郡矢野、播磨國赤穂郡八野、なども見えたり、この中にもあるべし、俊賴朝臣の歌に、つまかくす矢野の山なるかへの木のつれなき戀におれもとしへぬ、とあるは、全今の歌によられたるな

り、新千載集に、常磐井入道前太政大臣、秋といへば鳴やを鹿の妻かくすやの、神山露ぞ染らし、
〔頭註、類字集に、宗祇國分〕卷十に、妻隱矢野神山露霜爾二寶比始散卷惜
には、伊豫とすとあり、卷七に、淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉戀敷鬼乎
やはせ (八橋) 近江國栗本郡にあり、卷七に、淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉戀敷鬼乎
やぶなみのさと (夜夫奈美能佐刀) 神名帳に、越中國礪波郡荆波神社あり、其地の里なるべし、荆
字ヤブの訓なり、和名抄に、新川郡大荆(於保也布)とあるを思ふべし、十八に、夜夫奈美能佐刀爾
夜度可里波流佐米爾許母理都追牟等伊母爾都宜都夜
やべさか (屋部坂) 本居氏云、三代實錄三十八に、大和國高市郡夜部村とある、その坂なるべし、
卷三に、屋部坂歌

やましろ (山背)(山代)(開木代) など書り、國名、即山城なり、古多くは山背と書るを、延暦十
三年七月に、山城とあらためられてより後、なべて、其字を以行へり、卷三に、速來而母見手益物
乎山背高槻村散去奚留鴨、又、自妙之云々山代乃相樂山乃云々、卷六に、明津神云々山代乃鹿背
山際爾云々、卷七に、開木代來背社草勿手折已時立雖榮草勿手折、卷九に、山代久世乃鷲
坂自神代春者張乍秋者散來、十一に、開木代來世若子欲云余相狹丸吾欲云開木代來背、又、山
代久世川原身祓爲齋命妹爲、又、山代泉小菅凡浪妹心吾不念、十二に、山代石田
杜心鈍手向爲在妹相難、十三に、空見津云々山代之管木之原云々、十七に、山背乃久爾能美
夜古波云々、〇〔道〕十七に、次嶺經山背道乎云々
やまと (日本)(倭)(山跡)(山常)(八間跡)(夜麻登)(夜麻登)(也麻等)(夜萬登)(夜末等) など書り、
夜麻登といふは、もと畿内なる、大和一國の名なるを、神武天皇、此國に大宮しきませりしより、

後の御代々々の都も、みな此國內なりける故に、おのづから天下の總名にもなれるなり、されば各
其歌につきて、用捨あるべきこと、下の件々に云る如し、かくて日本と書は、ことに蕃國の使に示
さむがために、孝德天皇の御代に、新に建賜ひし號なり、と國號考に云る如し、さてその日本とい
ふは、かの推古天皇の御世に、日出處天子、と異國へのたまひ遣はし、同じこゝろばえなれば、や
がてその意を得て、後に寧樂人の、日本の字に、比能毛登といふ訓を設けたるより、それやがて天
下の總名とはなれるなり、さればそれよりさきに、日乃本と云ることなし、比能毛登といふ稱の有
しによりて、書る文字ならねばなり、なほひ部ひのもと條合考べし、かくて日本の字をやまとと訓
るも、上に云如く、夜麻登といふが、おのづから天下の總名ともなれることのあるによりてなり、さ
てしからば、總名の方には日本と書、一國の方には自餘の字を書べき理なるに、此集には、總名の方
なると、一國の方なるとの差別なく、いづれにも日本の字を書る所のありて、混淆しきはいかにと
いふに、すべて此集の頃までは、文字をたのみならず、言語だにたがはねば、いかにまれ文
字は假の物なれば、とかくのさだにもおよばず、あるがまゝに用ひしなれば、後世、字面をたのみ
にする慣をはなれて、考へざれば、たがふことありとしるべし、さてその次に倭字をかくは、もろ
こしの國より、わが御國の總名を倭と名づけたるより、此字をあまねく世に用ひならへるよし、こ
れも國號考に論へり、さてしからば、此字も總名の方には用ふべけれど、一國の方なるには、書べ
からぬ理なれど、これも件の日本の字を用ふると、同じこゝろばえなり、さて倭字を、和に改めら
れつるは、天平勝寶より、天平寶字までの間の事なるべきよし、國號考に、詳悉に例證を引て論へ
るが如し、されば此集の歌詞に和と書るは見えず、まれく卷一に、一とこ和と書、卷七に、和

琴とあるたぐひは、後人の、倭と和は通はし書こと、意得て、ふと寫したがへたるなるべし、この例、書紀にも續紀にも令にもあり、たゞ十九天平勝寶四年十一月二十五日、新嘗會肆宴應詔歌六首の中に、右一首大和國守藤原永手朝臣、とあるは、まことに和と改められたるによれるならむ、又、卷廿に、先上天皇、詔陪從王臣曰、夫諸王卿等宜賦和歌而奏云々、とある、これと和歌と書る始なり、と國號考にいへる、これは然ばかりの本居氏も、ふと思ひ誤りていへることなり、そのゆるは、たゞ歌を和歌といふことは、今京より以降こそあれ、名字のさだまでもなく、から歌にならべ載るときならでは、徒に歌を和歌といへるやうのことは、奈良朝以往の人に、ひとつもあることなし、件の和歌は、報歌といふに同じく、こたへ歌なり、されば件の詞の下に大御歌ありて、其次に舍人親王應詔奉和御歌云々、とあるをや、これはこゝに緊要ならねど、ことのちなみにおどろかしおくのみなり、さて山跡、山常など書類は借字、夜麻登、夜萬登など書類はみな假字にて、ここいふべきすぢなし、かくて夜麻登といふ名の山縁など、むかしより古學者の、くさふさだすることなれど、皆信がたく、又たしかにそれ考得たりとて、さのみ緊要とあることにもあらねば、此書には略きつ、なほ委しき謂を檢へ知むとならば、古義、さては本居氏國號考など、併見て考へし、卷一に、山常庭村山有等云々、又、玉手此云々、天爾滿倭乎置而云々、又、此也是倭爾四手者我戀流木路爾有云名二負勢能山、又、去來子等早日本邊大伴乃御津乃濱松待戀奴良武、又、葦邊行鴨之羽我氏爾霜零而寒暮者倭之所念、又、倭爾者鳴而歎來良武呼兒鳥象乃中山呼會越奈流、又、倭戀寐之所宿爾情無此渚崎爾多津鳴倍思哉、又、吾妹子乎早見濱風倭有吾松椿不吹有勿勤、卷二に、妹之家毛繼而見麻思乎山跡有大島嶺爾家母有猿尾、又、吾勢枯乎倭邊登佐夜深而雞鳴露

爾吾立所露之、卷三に、去來兒等倭部早白菅乃眞野乃榛原手折而將歸、又、阿部乃島宇乃住石爾依浪間無比來日本師所念、又、越海乃手結之浦矣客然而見者之見日本思櫃、卷四に、山跡邊君之立日乃近付者野立鹿毛勤而會鳴、卷六に、島隱吾榜來者之喬倭邊上眞熊野之船、又、朝波海邊爾安左里爲暮去者倭部越鴈四乏母、又、八咫知之吾大王之御食國者日本毛此間毛同登會念、卷七に、足柄之宮根飛超行鶴乃、見者日本之所念、又、若浦爾白浪立而與風寒暮者山跡之所念、又、吾舟乃梶者莫引自山跡戀來之心未飽九二、又、山跡之宇陀乃眞赤土左丹著者會許裳香人之吾乎言將成、卷九に、山跡庭間、往歎大我野之竹葉刈敷慮、爲有跡者、卷十に、山跡庭啼而香將來霍公鳥汝鳴每、無人所念、又、秋風爾山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隱筒、十一に、日本之室原乃毛桃本繁言大王物乎不成不止、十三に、打久津云々日本之黃楊乃小櫛乎云々、十四に、和我世古乎夜麻登徹夜利氏麻都之太須安思我良夜麻乃酒疑乃木能末可、十五に、須賣呂伎能、云々也麻等乎毛登保久左可里且云々、○〔國〕卷一に、籠毛與云々虛見津山跡乃國者云々、又、山常庭云々、蜻島八間跡能國者、卷九に、虛蟬乃云々磯城島能日本國乃石上振里爾云々、十三に、空見津倭國青爾吉寧樂山越而云々、又、磯城島之日本國爾云々、十九に、虛見都山跡乃國青丹與之平城京師由云々、又、蜻島山跡國乎天雲爾磐船浮云々、卷廿に、比佐加多能云々安吉豆之萬夜萬登能久爾乃可之婆良能宇爾備乃宮爾云々、○〔島〕卷三に、天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見、又、名細寸稻見乃海之與津浪千重爾隱奴山跡島根者、又、越海之云々珠手次懸而之奴權日本島根乎、十五に、宇奈波良能於伎徹爾等毛之伊射流火者安可之且登母世夜麻登思麻見無、〔頭註、新勅撰葉、夕なきに明石出る月〕○〔道〕卷四に、山跡道之島乃浦廻爾緣浪間、無牟吾戀卷者、卷六に、倭道者雲隱有離

然余振袖乎無禮登母布棄、又、日本道乃吉備乃兒島乎過而行者筑紫乃小島所念香裳、十二に、吾妹
子夢見來倭路度瀨別手向吾爲、上件なるは、皆大和一國をさして云るなり、○〔國〕卷三に、
奈麻余美乃云々日本之山跡國乃鎮十方座神可聞云々、十三に、式島之山跡之士丹人多滿而雖有云
云、又、式島之山跡乃士丹人二有年念者難可將嗟、又、蜻島倭之國者神柄跡言舉不爲國云々、又
志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在與具、卷五に、神代欲理云傳介良久、虛見通倭國者、皇
神能伊都久志吉國、言靈能佐吉播布國等云々、十九に、虛見都山跡乃國波、水上波地往如久、船上
波床座如、大神乃鎮在國會云々、卷廿に、之奇志麻乃夜末等能久爾々安伎良氣伎名爾於布等毛能乎
已許呂都刀米與、○〔大日本〕これも天下の總名なることさらなり、既くお部おほやまとの條にい
へり、卷三に、掛卷母云々大日本久瀨乃京者云々、○〔島〕卷廿に、伊射子等毛多波和射奈世會天
地能加多米之久爾會夜麻登之麻禰波、上件なるは、皆天下の總名に互りて稱るなり
やまだ (山田) 未詳ならず、和名抄に、山城國葛野郡山田、河内國交野郡山田、など見えたれば、
これらの中にもあるべし、又或人は、大和國高市郡に山田村ありと云り、と略解にあり、十三に百
不足山田道乎云々

やましな (山科) (山品) など書り、和名抄に、山城國宇治郡山科、(也末之奈) とあり、諸陵式に、山
科陵(近江大津宮御宇天智天皇、在二山城國宇治郡、兆域東西十四町、南北十四町、陵戸六烟、)と見
えたり、卷二に、八隅知之和期大王之、恐也御陵仕流山科乃鏡山爾云々、卷九に、山品之石田
乃小野之母蘇原見乍哉公之山道越良武、又、山科乃石田社爾布磨越者蓋吾妹爾直相鴨、十三に、
空見津云々山科之石田之森之云々、十一に、山科強田山馬雖在歩吾來汝念不得

やまむら (山村) 和名抄に、大和國添上郡山村、(也末無良) 書紀欽明天皇卷に、元年二月、百濟人
已知部投化、置倭國添上郡山村、今山村已知部之先也、とあり、卷廿に、幸行於山村之時
やまへ (山邊) 伊勢國鈴鹿郡山邊村といふ所、今もありとぞ、其地なり、そこに古き井もあるよし、
これ山邊御井なり、既くい部いし條に云り、なほ委くは、本居氏玉勝間卷三に、詳に論へるを見て
考ふべし、ヤマノベとの言は添べからず、卷一に、山邊乃御井乎見我氏利神風乃伊勢處女等相見
鶴鴨、十三に、八隅知之云々山邊乃五十師乃原爾云々、又、山邊乃五十師乃御井者自然成錦乎張
流山可母

やまのべ (山邊) 和名抄に、上總國山邊(也末乃倍)郡、とあり、卷廿に、山邊郡
やまな (山名) 和名抄に、遠江國山名(也末奈)郡、とあり、卷廿に、山名郡
やまぶきのせ (山吹瀬) 山城國宇治郡にあり、宇治川の橋より下の方にありしを、今は其所知ざる
よし、貝原篤信が京都めぐりの記にしるせり、新拾遺集に、散果る山吹の瀬に行春の花に筭さすう
ぢの川長、〔頭註、都名所圖會に、融大臣此地に別莊ありし時、川岸に〕卷九に、金風山吹瀬乃響苗天
雲翔鷹相鴨
やらのさき (也良乃埼) 筑紫の前後の國にあるなるべし、たしかに其處をしらず、〔頭註、名寄云、早
島の北の出崎なり、今は〕十六に、奥鳥鴨云船之還來者也良乃埼守早告許會、又、奥鳥鴨云舟者
也良乃埼多未豆接來跡所聞衣許奴可聞

- い部 前出
- ゆ部

ゆき (山吉) (壹岐) など書り、壹岐島なり、此集に由吉と見え、和名抄にも、壹岐を山岐と註し
たるによりて、山吉といふを、古訓なりと思ふ人あれど、古事記に、伊伎、書紀繼體天皇卷の歌に、
以祇とよみ、壹字も山の假字ならねば、もとは伊伎なること明けし、然れども懐風藻に、伊伎連と
いふ姓を、目錄には雪連とかき、此集に山吉とあるなど思ふに、必山吉と通はしいふべき名義と見
えたるよし、古事記傳に論へり、さて此島にて、神祭ますとて、齋忌の事ありけむ故の名にや、又
は漢國へ渡るに、先此島に舟とめて息む故に、息の島かと、齋藤彦磨諸國名義集に云り、十五に、
和多都美能云々由吉能安末能保都手乃宇良能乎、可多夜伎且由加武土須流爾云々、〇(島) 十五に、
到二壹岐島、雪連宅滿忽遇三鬼病、死去之時作歌云々、新羅奇傲可伊傲爾可加反流山吉能之麻山加
牟多登伎毛於毛比可爾都母

ゆきみのさと (往箕之里) 未詳ならず、十一に、徘徊往箕之里爾妹乎置而心空在土者蹈躡

ゆけひのみる (靱負御井) 靱負府の内にある井にやあらむ、と本居氏云り、續紀に、光仁天皇寶龜

三年三月甲申、置酒靱負御井、賜陪從五位已上及文士、賦曲水者祿有差、と云ことも見えた
り、卷廿に、冬日幸三子靱負御井之時

ゆげのかは (弓削河) 和名抄に、河内國若江郡弓削、(由介) 神名帳に、河内國若江郡弓削神社二社

(並大、月次相嘗新嘗) などあり、稱徳天皇の御時、由義宮を作らせ賜ひて、行幸し賜へること續紀に
見ゆ、弓削道鏡が本居なり、契沖云、今も弓削一椋原などいひつゞけて、人のよくしれる所なり、
〔頭語、諸州めぐり、弓削村は太子〕 卷七に、眞鏡持弓削河原之埋木之不可顯事等不有君
〔堂の巽に在、百濟の城趾あり〕

ゆつきがたけ (山槻我嵩) (弓月高) 大和國城上郡穴師山に、湯槻が嶽とて今も有よし、齋槻の峯な

るべし、卷七に、痛足河河浪立奴卷目之由槻我嵩仁雲居立良之、又、足引之山河之瀬之響苗爾弓月
高雲立渡、卷十に、玉蜻夕去來者佐豆人之弓月我高荷霞霏微

ゆづるはのみる (弓絃葉乃三井) 大和國吉野郡秋津離宮の邊に、あるなるべし、卷二に、古爾戀
流鳥鴨弓絃葉乃三井能上從鳴渡遊久

ゆのはら (湯原) 筑前國御笠郡次田温泉のあるあたりの原野を、湯の原とは云るなるべし、〔頭註
名寄云、御笠郡かまとやまのふもと、北谷の小野といふ所の北のほとりに、湯の原と云所あり、まことに〕 卷
太宰府に近き所なり、昔は此所にて湯ありしと里人いへり、今も湯の出たる所とて、其あと残り、
六に、帥大伴卿、宿次田温泉聞鶴喧作歌、湯原爾鳴蘆多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴

ゆふかは (游副川) 大和國吉野郡宮瀧の末に、今ゆ川といふ所ありとぞ、それか、卷一に、安見知
之云々遊副川之神母云々

ゆふやがは (結八川) これも大和國吉野郡にて、件の遊副川と同じきか、夫木集に、月草の縹の帯
をゆふは山絶ぬる妻を鹿や戀らむ、これはかの結八川を、ほのおぼえて、結八山と云るか、又ゆふ
やを、ゆふはといふも、後に誤訓せるによられたるなるべし、續後撰集に、ゆふは川岩本すけのね
にたて、長夜あかずなく千鳥かな、續古今集に、夏くれば流る、麻のゆふは川たれ水上に御被しつ

らむ、新千載集に、から衣たが下ひもをゆふは川とけぬぬよの氷しくらむ、元曆本に、ユフヤガ
ハとよめる然るべし、卷七に、吾紐乎妹手以而結八川又還見萬代左右荷、又、妹之紐結八川内乎
古之并人見葦此乎誰知

ゆふのやま又ゆふのやま共 (木綿山) 和名抄に、豊後國速見郡由布、(本に、由を田と作るは誤なり、)
とある、其地の山なり、兵部省式に、豊後國驛馬由布五疋、(これも本には、由を田に誤れり) 豊後

國風土記に、速水郡袖富郷、此郷之中栲樹多生、常取栲皮以造木綿、因謂袖富郷とあり、續古今集に、誰しかも雲井はるかに豊國のゆふ山出る月を見るらむ、卷七に、未通女等之放髮乎木綿山雲莫蒙家當將見、卷十に、思出時者爲便無豊國之木綿山雪之可消所念

ゆふまやま (木綿間山) (遊布麻夜萬) など書り、未詳ならず、十四はさらなり、十一なるも、東國の地名をよめる歌ども、次上に出たれば、東にある山なるべし、〔頭註、名寄云、木綿間山、藻鹽等、筑前にあるよしのせたり、今按、鐘崎の上の高山佳景なり、里人はゆわまる山と云、おそらく〕 十二に、不欲惠八師不戀登爲尋木綿間山越〔此山ならむゆふまをあまりてゆわまると云にや、〕 去之公之所念良國、十四に、古非都追母乎良牟等須禮杼遊布麻夜萬可久禮之伎美乎於毛比可禰都母ゆふしやま (結石山) 對馬にありと見ゆるを、何の郡にや、未詳ならず、卷五に、梧桐日本琴一面

(對馬結石山桐孫枝也、)

ゆふき (結城) 和名抄に、下總國結城(山不岐)郡、あり、卷廿に、結城郡

ゆらのさき又ゆらのみさき共 (湯羅前) 又(湯郡乃三崎)共 紀伊國海部郡にあり、新古今集に、紀國やゆらの湊による舟の便もしらぬ沖つ汐風、續古今集に、紀國やゆらのみさきの月きよみ浪よせかく

る沖つ白波、玉葉集に、きの國やゆらのみなとに風立て月の出しほの雲はらふなり、新古今集に、紀の海やゆらの湊の朝朗かすみの底にふねこぐらしも、由良能斗能斗那加能伊久理爾、とよめる歌の、古事記書紀に見えたる、その由良は、淡路國津名郡由良湊にて、今と別處なり、又曾根好忠が、由良のとをわたる舟人、とよめるは、丹後國與謝郡なり、混べからず、と本居氏いへり、卷七に、爲妹玉乎拾等木國之湯等乃三崎二此日鞍四通、卷九に、朝開榜出而我者湯羅前釣爲海人乎見變將來、又、湯羅乃前鹽乾爾祗良志白神之儀浦箕乎敢而榜勳

○え部 前出

○よ部

よこぬ (横野) 神名帳に、河内國澁川郡横野神社、河内志に、澁川郡横野神社、在二大地村西、今稱三印色宮、とあり、書紀仁德天皇卷に、十三年冬十月、築横野堤、とも見ゆ、契沖云、今横野と云處はうけたまはり及ばず、横沼といふ所ぞきこゆる、そこにや、又横野堤、和泉なりとて、續古今、光俊、霜がれのよこ野のつゝみ風さえて入しほ遠く千鳥鳴なり、といふ歌を、或人かたり侍りし、未考へず、(已上) 類字集に、勅撰名所抄、藻鹽草等泉とす、と云り、新古今集に、俊成、紫の根は、横野のつほ草ま袖につまむ色もむつまし、これを類字集に、八雲御抄、宗祇國分、勅撰名所抄、藻鹽草等に、上野とす、とあり、非なり、卷十に、紫之根延横野之春野庭君乎懸管 鷲名雲よこやま (余許夜麻) 武藏國多摩郡多摩川の上に、今横山村と云有て、其あたり、川にそひて、今道一里ばかりつゞける山を横山と云とぞ、卷廿に、阿加胡麻乎夜麻努爾波賀志乃里加爾豆多麻乃余許夜麻加志由加也良牟

よさみのはら (依網原) 和名抄に、參河國碧海郡依網、(與佐美) とある、其地なり、卷七に、青角髮依網 原人相鴨石走淡海 縣物語爲

よしぬ (吉野) (芳野) (能野) (與之努) (余思努) など書り 和名抄に、大和國吉野 (與之乃) 野吉野、(與之乃) とあり、努を乃と云るは後なり、又書紀天智天皇卷の歌にも、曳之努ともあれど、此集の頃に至りては、余思努とのみいへり、卷一に、淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來三、卷三に、吉野爾有夏實之河乃川余村爾鴨會鳴成山影爾之氏、十三に、帛叫云々吉野部登入座見者云

云、○〔宮〕 いはゆる秋津、離宮なり、書紀應神天皇卷に、十九年冬十月戊戌朔、幸吉野宮、と見え
たれば、其ほど離宮ははじまれるか、齊明天皇卷に、二年作吉野宮、と有は、改め造らしめ賜ふな
り、卷三に、見吉野之芳野乃宮者云々、卷六に、八隅知之云々、高知爲芳野離宮者云々、又、八隅知之
云々、見給芳野宮者云々、又、自神代芳野宮爾蟻通高所知者山乎吉三、十八に、伊爾之徹乎於母
保須良之母和期於保伎美余思努乃美夜乎、安里我欲比賣須云々、○〔國〕 一郡一郷をも、國と云る
こと、難波國、泊瀬國などの類なり、既くいへり、卷一に、八隅知之云々、御心乎吉野乃國之云
云、○〔山〕 卷一に、八隅知之云々、名細吉野乃山者云々、卷三に、山際從出雲兒等者霧有哉吉
野山、嶺霏穢、十六に、吾兄子之懷鼻爾爲流都夫禮石之吉野乃山爾水魚會懸有、○〔嶺〕 十三に、
三雪落吉野之高二居雲之外丹見子爾戀度可聞、○〔川〕 卷一に、雖見飽奴吉野乃川之常滑乃絶事
無久復還見牟、又、安見知之云々、芳野川多藝津河内爾云々、卷二に、芳野河逝瀬之早見須臾毛不通
事無有巨勢濃香毛、卷三に、八雲刺出雲子等黑髮者吉野川、與名豆颯、卷六に、茜刺日不並二吾
戀吉野乃河乃霧丹立乍、又、足引之云々、落多藝都芳野河之云々、卷七に、音聞目者未見吉野河六
田之與杼乎今日見鶴鴨、又、能野川石迹柏等時齒成吾者通萬世左右二、卷九に、馬屯而打集越
來今日見鶴芳野之川乎何時將顧、又、辛吉晚去日鴨野川清川原乎雖見不飽君、又、吉野川河浪
高見多寸能浦乎不視賦成骨戀布眞國、又、欲見來之久毛知久吉野川音清左見二友敷、又、古之
賢人之遊兼吉野川原雖見不飽鴨、卷十に、川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花會置未勿勤十八に、
物能乃布能夜蘇氏人毛與之努河波多由流許等奈久都可倍追通見牟、○〔瀧〕 卷六に、隼人乃瀧門乃
磐母年魚走芳野之瀧爾尙不及家里、○〔みよしぬ〕 御吉野なり、御は美稱にて、御熊野の御に同

じ、卷一に、三吉野之耳我嶺爾云々、卷二に、三吉野乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言乎持而加欲
波久、卷三(或本)に、三吉野之御船乃山爾立雲之常將在跡我思莫苦二、又、見吉野之芳野乃宮者
云々、又、見吉野之高城乃山爾白雲者行憚、而棚引所見、卷六に、瀧上之云々、三芳野之蜻蛉乃宮
者云々、又、毎年如是鏡見而牡鹿三吉野乃清河内之多藝津白浪、又、三吉野之秋津乃川之萬世爾
斷事無又還將見、又、味凍云々、三芳野乃眞木立山湯云々、又、三吉野乃象山際乃本末爾波幾許毛散
和口鳥之聲可聞〔頭註、詞花集、好忠、三吉野のきさやまき〕又、安見知之云々、見芳野乃飽津之小笑云々、
卷七に、三芳野之青根我峯之蘿席、誰將織經緯無二、又、神左振碧根已凝敷三芳野之水分山乎見者
悲毛、又、人皆之戀、三吉野今日見者諸母戀來山川清見、卷十に、三吉野乃石本不遊鳴川津諸文
鳴來河乎淨、十一に、三吉野之水具麻我菅乎不編爾刈耳刈而將亂跡也、十二に、三吉野之蜻乃小
野爾刈草之念、亂而宿夜四會多、十二に、三芳野之眞木立山爾云々、又、三吉野之御金高爾云々、
○〔大宮〕 十八に、多可美久良云々、美與之努能許乃於保美夜爾云々、○〔山〕 卷一に、見吉野乃
山下風之寒久爾爲當也今夜毛我獨宿牟、○〔川〕 卷六に、千鳥鳴三吉野川之川音成止時梨二所思
公、卷七に、馬並而三芳野河乎欲見打越來而會瀧爾遊鶴、○〔大川〕 卷七に、今敷者見目屋跡念之
三芳野之大川余杼乎今日見鶴鴨、○〔瀧〕 卷三に、見吉野之瀧乃白浪雖不知語之告者古所念、卷
六に、神柄加見欲賀蓋三吉野乃瀧河内者雖見不飽鴨、又、泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開來受
屋、又、萬代見友將飽八三吉野乃多藝都河内之大宮所、又、人皆乃壽毛吾毛三吉野乃多吉能床磐
乃常有沼鴨、十三に、斧取而云々三吉野乃瀧動々落白浪、又、三芳野瀧動動落白浪留西妹見
卷欲白浪

よしきかは (宜寸河) 大和國添上郡にあり、大和志に、宜寸川、源自春日水屋峯、經三野田、曰三水屋川、遶東大寺、至法蓮、入三佐保川、とあり、十二に、吾妹兒爾、衣借香之宜寸河、因毛有額妹之目乎、將見

よど (與騰) 攝津國八部郡にあり、繼橋は、攝津志に、刈藻橋、在矢田部郡、東尻池村、或曰、眞野、繼橋即此、とあり、繼橋は、今の瀬田の橋の如く、中に島の如き所ありて、又懸渡せるを云なるべしと云り、金葉集に、しるらめやよどの繼橋よとともにつれなき人を戀渡るとは、卷四に、眞野之浦乃與騰乃繼橋、情由毛思哉、妹之伊目爾之所見

よなか (夜中) (三更) など書り、夜中乃方爾とあるは、古事記に、由良能斗能斗那加能伊久理爾、とあるを思ふに、夜は度字の誤にて、度中乃方爾、なるべし、とはやく本居氏いひ、又三更刺而とあるは、夜半の刻に向ひて、といふ意とはきこゆれども、凡て指而といふことは、某地より某地をさして、といふならひにて、古證みな然ることなれば、快からず思ひしに、近き頃、江戸人の説に、夜中は、近江國高島郡にある地名にて、共に夜中瀉、といふ處なりと云り、按、卷七なるは、羈旅作と標して、九十首の歌を載たる中、左の歌の上に、高島之三尾勝野高島之香取乃浦など見え、その下に、竹島之儀越浪、竹島乃阿戸河浪など、近江の地名をよみ、卷九なるは、高島作歌二首の中

なれば、とかくのさだに及ばざれば、此説さることもあらむ、これによりて、卷七に、狹夜深而夜中乃方爾、鬱之苦呼之舟人泊兼鴨、卷九に、客在者三更刺而照月高島山、隱惜毛

よなばり (吉隱) (吉名張) (吉魚張) など書り、書紀に、持統天皇九年、幸三兔田吉隱、とあるによれば、宇陀郡と思はるゝに、諸陵式に、吉隱陵、(皇太后紀氏、在大和國城上郡) とあれば、城上郡と

見ゆ、もと宇陀と城上とは隣郡にて、吉隱は兩郡に涉れる地なるべし、今も泊瀬山こえて、宇陀の方に、よなばり村といふありとぞ、泊瀬は城上郡なり、さてもとは宇陀郡に屬たりしが、後に陵のある地は、城上郡に屬するにもあるべし、卷二に、零雪者安幡爾、勿落吉隱之猪養乃岡之塞爲卷爾、卷八に、吉名張乃猪養山、爾伏鹿之嬌呼音乎、聞之登聞思佐、卷十に、吾門之淺茅色就吉魚張能浪柴乃野之黃葉散良新、又、吾屋戸之淺茅色付吉魚張之夏身之上爾四具禮零疑、又、吉名張乃野木爾零覆白雪乃市白霜將戀吾鴨

よびさか た部たこのよびさか條にいへり
よらのやま (欲良能夜麻) 未詳ならず、和名抄に、遠江國山香郡與利、とあれば、與利乃山を、欲良乃山と云るにもあらむが、足柄をも、東歌には阿思我利ともよみたれば、良利通し云る例をも思ふべし、十四に、安豆左由美欲良能夜麻邊能之牙可久爾伊毛呂乎多氏天左禰度波良布母

よるかのいけ (因可乃池) 大和國平群郡法隆寺村に在天滿の池にや、と或説に云り、法隆寺の古名、斑鳩寺なりときけば、さもあるべきにや、夫木集に、いかるがやよるかの池は氷れども富の小川ぞ流たえせぬ、十二に、斑鳩之因可乃池之宜毛君乎不言者念衣吾爲流

よろきのはま (余呂伎能波麻) 和名抄に、相模國餘綾郡餘綾、(與呂木) 兵部式に、相模國傳馬、(足柄上淘綾高座郡各五疋) などあり、今の磯驛の東方なりと云り、本居氏云、古今集の歌のこよろきの磯も、餘綾にて、をよろきなるを、小と書るを、後にコとよみ誤れるものなり、小は小長谷、小筑波、小佐保などの小なり、十四に、相模治乃余呂伎能波麻乃麻奈胡奈須兒良久可奈之久於毛波流留可毛

○らりるれる部 無

○わ部

わかさ (若狭) 國名なり、卷七に、若狹在三方之海之濱清美伊往變良比見跡不飽可聞、○〔道〕 卷四に、云々人者雖云若狹道乃後瀬山之後毛將合君

わかのうら (若浦) 紀伊國海部郡にあり、續紀に、聖武天皇、神龜元年冬十月丁亥朔辛卯、天皇幸紀伊國、癸巳、行至紀伊國那賀郡玉垣、勾、頓宮、甲午、至海部郡玉津島頓宮、留十有餘日、戊戌、造離宮於岡東、是日、從駕百寮、六位已下至于使部、賜祿各有差、壬寅云々、又詔曰、登山望海、此間最好、不勞遠行、足以遊覽、故改弱濱、名為明光浦、宜置守戶、勿令荒穢、春秋二時、差使官人、奠祭玉津島之神明光浦之靈、忍海、午人大海等兄弟六人、除年人名、從外祖父外從五位上津守連通姓、姓、宇、舊本姬と作るは誤なり、今は類聚國史に從つ、と見えたり、しかるに弱を改めて明光としたまひしは、たゞ一時にて停にしにや、後までも若浦とのみ呼り、玉津島の社は、若浦の民家の東方にましますと云り、かれ件の如く詔へるなり、〔頭註、高尙云、岡部大文字のみかへさせ給へるなり、といはれたるは、うけがたし、名曰明光浦、とあるを、いかでかもしのみのことは云べき、こはわかのはまを、あかの浦と、地名をかへさせ給へるにぞありける、しかあれども、ひさしく云れたるは、あらたまりがたきものなるに、わかとあかと、したしくかよへる詞なれば、まぎれり、〕卷六に、若浦爾鹽滿來者瀟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡、卷七に、若浦爾白浪立而奧風寒暮者山跡之所念、十二に、若乃浦爾袖左倍沾而忘貝拾跡妹者不所忘爾、○〔眞若之浦〕 (眞は、眞熊野の眞に同じく、美稱なり) 十二に、衣袖之眞若之浦之愛子地間無時無吾戀鑑

十五に、豊前國下毛郡分間浦

わさみ (和射見) (和射美) など書り、美濃國不破郡にあり、書紀天武天皇卷に、六月辛酉朔丁亥、即日、天皇留皇后而入不破云々、到于野上、高市皇子、自和暨參迎以便奏言云々、皇子則還和暨、天皇於茲行宮與野上而居焉、云々、戊子、天皇往於和暨、檢校軍事而還、己丑、天皇往和暨、命高市皇子、號令軍衆、天皇亦還于野上而居之、○〔野〕 十一に、吾妹子之笠乃借手乃和射見野爾吾者入跡妹爾告乞、○〔原〕〔行宮〕 原は、即和射美野の原なり、行宮は、書紀を考るに野上にこそ興したまひつれ、和射美に行宮を造らしめ賜ひしことは見えざれども、件に書紀を引たる如く、和暨にたびくいでまし賜ふよしあれば、そのいでましのありし地を、やがて行宮とは云るなるべし、卷二に、挂文云々眞木立不破山越而、狛劍和射見我原乃、行宮爾安母理座而云々、○〔嶺〕 卷十に、和射美能嶺往過而零雪乃厭毛無跡白其兒

わたらひ (渡會) (度會) 和名抄に、伊勢國度會(和多良比)郡、とあり、〔頭註、新古今集、君が代は久絶せで、○〔齋宮〕 卷二に、挂文云々渡會乃齋宮從云々、○〔大川〕 十二に、度會大河邊若歷木吾久在者妹戀鴨

わたづ (和多豆) 本居氏云、石見國那賀郡の海邊に、渡津村とて今有、こゝなるべし、されば和多豆乃、四言の句なり、或本の歌に、柔田津と書る、和多豆を、ニキタツとよみ誤れるにつきて、出來たる本なるべし、にきたづといふ地は、今もなしと國人も云り、卷二に、石見乃海云々和多豆乃荒儀乃上爾云々

わたりのやま (渡乃山) 岡部氏云、石見國に住て、國形知る人の云らく、まづ今の濱田城の北に、

上府村、下府村といふあり、是古の國府なり、こゝより安藝國へ出ると、備後國へ出ると、北國へ向ふと、三の大道あり、此北國と、備後へ向ふ方、上府より八里に、屋上村あり、その近き北方に、渡村といふもあり、といへり、國人に聞に、邑知郡今の渡村甘南寺の山、これなり、と云り、卷二に、角障經云々大舟之渡乃山之云々

わづかやま (和豆香山) 山城國相樂郡にありと云り、卷三に、掛卷母云々和豆香山御興立之而云々、

○〔杣山〕 和名抄に、功程式云、甲賀杣、田上杣、杣讀會萬、所出未詳、但功程式者、修理篁師

山田福吉等、弘仁十四年所撰上二也、とあり、卷三に、吾王天所知卒登不思者於保爾會見谿流和

豆香蘇麻山

○の部

るかひ (猪養) 大和志に在ニ城上郡吉隱村上方、山多楓樹、とあり、○〔山〕 卷八に、吉名張乃猪

養山爾伏鹿之孺呼音乎聞之登聞思佐、○〔岡〕 卷二に、零雪者安幡爾勿落吉隱之猪養乃岡之塞爲

卷爾

るな (猪名) (居名) など書り、契沖云、神名帳に、攝津國豐島郡爲那都比古神社二座、これによれ

ば、居名は豐島郡の内と見えたり、和名抄に、河邊郡爲奈、とあるは、郡たがへり、兩郡相並びて

亘れるか、と云り、左馬寮式にも、攝津國爲奈野牧、(右寮)とあり、○〔山〕 十一に、四長鳥居名山

響爾行水乃名耳所縁之内妻波母、○〔川〕 十六に、如是耳爾有家流物乎猪名川之奥乎深目而吾念有

來、○〔野〕 卷三に、吾妹兒二猪名野者令見都名次山角松原何時可將示、卷七に、志長鳥居名野乎

來者有間山夕霧立宿者無爲、○〔湊〕 卷七に、大海爾荒莫吹四長鳥居名之湖爾舟泊左右手、(註

新撰撰集 風寒み夜や更ぬらんし、
ながとり井の湊にちどり鳴けり、

るのへ (井上) 契沖、大和國にありといへれど、たしかに其地をしらず、井上内親王は、まことに

此地に由縁ありて負賜へる御名なるべし、和名抄に、河内國志紀郡井於、(井乃倍)とある地をよめ

るにもあらむ、今さだかに決がたしと云り、卷七に、春霞井上從直爾道者雖有君爾將相登他回

來毛

○う部 前出

○ゑ部 無

○を部

をかみかは (雄神河) (乎可未河泊) など書り、神名帳に、越中國礪波郡雄神社、とあり、十七に、

礪波郡雄神河邊作歌、乎可未河泊久禮奈爲爾保布乎登賣良之葦附等流登湍爾多々須良之

をかのみなど (崗水門) 和名抄に、筑前國遠賀郡、とあり、筑前國風土記に、塙舸縣之東側近有

大江口、名曰塙舸水門、とあり、書紀神武天皇卷に、十有一月丙戌朔甲午、天皇至筑紫國崗水門、

仲哀天皇卷に、八年春正月己卯朔壬午、幸筑紫云々、入二崗浦二到二水門、云々、即泊于崗津、な

ども見えたり、名寄に云、遠賀郡岡の湊、蘆屋のみとなり、蘆屋の里は、遠賀の庄の東にあり、

蘆屋の里民も、昔より此處を、岡の湊と云つたふる由かたり侍る、遠賀と名づけたるは、内浦村よ

り蘆屋まで三里の間、海邊にたかき岡つゞける故なるべし、遠賀川より西を、今も取わきて、遠賀

の庄と云、卷七に、天霧相日方吹羅之水葦之崗水門爾波立渡

をくら (小倉) (小椋) (小鞍) など書り、大和國平群郡龍田山にあり、新古今集に、白雲の春は重ねて

龍田山小鞍の嶺に花にほふらし、とある 同、○〔山〕 卷八に、暮去者小倉乃山爾鳴鹿之今夜者不鳴寐宿家良思母、卷九に、暮去者小椋山爾臥鹿之今夜者不鳴寐家良霜、〔頭註、古今集に、夕月夜内には秋はくるらん、とあるは、山城葛野郡にありと云り、別なり、暮〕○〔嶺〕 卷九に、白雲之龍田山之去者小倉乃山爾鳴鹿之の歌を、類字集に、右と同地とせるは、非なり、○〔嶺〕 卷九に、白雲之龍田山之瀧上之小鞍嶺爾開乎鳥流、櫻花者云々

をくさ (乎久佐) 未詳ならず、乎久佐乎は、小草といふ地を、本居にせる壯子なるべし、血沼壯子、菟原壯子などいふ類なるべし、十四に、乎久佐乎等乎具佐受家乎等斯抱布禰乃那良散氏美禮婆乎具佐可知馬利

をぐさ (乎具佐) 未詳ならず、上の乎久佐とは、清濁異りたれば、異地なるべし、乎具佐受家乎は、これも乎具佐といふ地を本居にせる、好色男と云なるべし、これらのこと委しくは、既に古義にいへり、十四に、乎久佐乎等乎具佐受家乎等斯抱布禰乃那良散氏美禮婆乎具佐可知馬利

をさきのぬま (小崎乃沼) 武藏國埼玉郡にあり、卷九に、見武藏小崎沼鴨作歌、前玉之小崎乃沼爾鴨會翼霧已尾爾零置流霜乎掃等爾有斯

をさと (乎佐乃) 未詳ならず、もしは小里にて、小國、小嶺などの類に添たる言にて、唯里といふにもあらむ、十九に、天地爾照足之而吾大皇之伎座婆可母樂伎小里、とあるも同じ、十四に、乎佐乃奈流波奈多知波奈乎比伎余知氏乎良無登須禮杼宇良和可美許會

をすてのやま (小爲手乃山) 本居氏云、紀伊國在田郡山保田庄に推手村と云あり、そこか、其村は、伊都郡の堺にて、山のおくなり現存六帖に、見ず久になりぞしにける小爲手山眞木の古木の苔深きまで、續後拾遺集に、夕さればをすてのやまの苔の上に楨の葉しのぎつもあるしらゆき、卷七に、安太部去小爲手乃山之眞木葉毛久不者藪生爾家里

をだ (小田) 和名抄に、陸奥國小田(乎太)郡、とあり、續紀、天平勝寶元年四月詔に、陸奥國守從五位上百濟王敬福伊、部内小田郡仁黃金在奏氏獻云々、十八に、葦原能云々、雞鳴東國能、美知能久乃小田在山爾、金有等麻宇之多麻徹禮云々、〔頭註、此歌、續古今集に、初句を、年〕〔頭註、小山雜戊戌、大坂小山屋平左衛門云、聖武天皇の時金の出しは、南部の内早池峰山なり、此山に、其時堀し金のまふ七所にあり、はやちれ大明神と云宮あり、一山悉く金なり、人取ことならず、神甚をしみ給ふゆゑなりと云〕

をち (越) 諸陵式に、越智崗上陵(皇極天皇、在二大和國高市郡)とあり、書紀天智天皇卷に、小市岡上陵、天武天皇卷に、幸越智、など見えたり、城上郡に大市と云郷あれば、彼に對へて、小市と云るなり、と水戸侯のたまへり、○〔野〕 卷二に、敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛將相八方○〔大野〕 卷二に、飛鳥云々玉垂乃越乃大野之云々

をち (越智) (越) など書り、近江國坂田郡息長莊にありて、菅の名だゝる所なるべし、十三に、師名立云々息長之遠智能小菅云々、息長之遠智能子菅、卷七に、眞珠付越能菅原吾不却人之劫卷惜菅原をど (乎度) 契沖も云し如く、乎度を、或本歌に、乎野とあるに依に、小野なるべし、奴と度は、通し云る例あればなり、志奴々に濕てを、志度等に濕てといふなど、それなり、その小野は、上野

國甘樂郡、綠野郡、群馬郡などに、各小野(乎乃)といふ郷、和名抄に見えれば、其中なるべし、十四に、可美都氣乃乎度能多杼里我可波治爾毛兒良波安波奈毛比等理能未思氏

をなのを (乎那能乎) 和名抄に、遠江國磐田郡小各、とある、各は名字の誤にて、小名にはあらざるか、されば小名之嶺なるべし、又同抄に、信濃國更科郡小谷(乎宇奈)とある處の嶺を云るにも

あらむ、又同國高井郡小内(乎宇奈)とあれど、そは奈字は、誤にやあらむとおほゆ、十四に、波

奈知良布已能牟可都乎乃乎那能乎能比白爾都久麻提伎美我與母賀母

をぬ (乎野) これは、上のをど條下に云る如く、上野國甘樂郡、綠野郡、群馬郡に、各小野といふ

郷見えたれば、其中なるべきにや、十四(或本)に、可美都氣乃乎野乃多杼里我安波治爾母世奈波安

波奈母美流比登奈思爾

をはりた (小墾田) 神名帳に、大和國高市郡治田神社、とあり、治田は、小治田なるべし、書紀に、

推古天皇十一年冬十月己巳朔壬申、遷于小墾田宮、とあり、卷初に、皇后即天皇位於豐浦宮、と

あれば、それより遷座るなり、八卷に、小治田、十一に、小墾田之坂田乃橋之壞者從桁將去莫戀

吾妹

をはりた (小治田) 小治田を、舊本に小沼田と作るは、治を沼に誤れるものなるべし、現存六帖に

さきだて、沼田のわけを斯はてて年魚道の水はあらはれにけり、とあるは、もと舊本に、字の誤あ

ることをしらすしてよめるなれば、證とするにたらず、さて年魚道は、尾張國愛智郡なるべし、但

しひろく一郡を云るにはあらず、一郷一邑の名のひろごりゆきて、一國一郡の名となれること多け

れば、これももとは、一邑の名なりしならむ、さて世にことなる名水のありけむ地ゆる、そこを後

までも、愛智の水とぞいへりけむ、かくて小治田は、もとそれよりもなほひろき名にてありけむか

らに、小治田の愛智の水とは、よめるなるべし、小治田の地名なりしことは、續紀に、尾張國山田

郡小治田連藥師等、賜三姓尾張宿禰、とある小治田は、地名によれる姓なることしられたればなり、

かくて小治田連は、愛智郡本居の人なりけむを、隣郡の山田郡に住けむゆるに、山田郡云々、と續

紀にはあるにや、十三に、小治田之年魚道之水乎間無曾人者挹云云々

をふ (乎布)(乎敷)(乎不)など書り、越中國射水郡にあり、○〔崎〕十七に、布治奈美波云々乎布

能佐伎波奈知利麻我比云々、十八に、乎敷乃佐伎許藝多母保里比禰毛須爾美等母安久倍伎宇良爾

安良奈久爾、○〔浦〕十八に、於呂可爾曾和禮波於母比之乎不乃宇良能安利蘇能米具利見禮度安可

須介利、十九に、念度知云々乎布能浦爾霞多奈妣伎云々

をりのをぬ (遠里小野) 本居氏云、遠里小野之は、ヲリノヲヌノと六言に訓べきなり、トホサトヲヌ

ノと訓は誤なり、攝津國住吉郡に、遠里小野村と云ありて、今現に、乎理乎能と呼ばなり、卷七に、

住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去、十六に、緑子之云々墨江之遠里小野之眞榛持丹穗

之爲衣爾云々

萬葉集名處考を書をへて後よめる

奈良能葉之、名負御代之自古、今乃乎都追爾、言靈之、徳用隨意、書名荷、負令持管、遠長、傳來有、萬葉之、其歌集者、歌集乃、長上西在者、不盡嶺乃、高貴、名兒海乃、奧乎深目而、巨勢山之、郡良都良椿、列列似、讀見人母、甘嘗備乃、三諸乃神之、帶爾爲、明日香之川之、水尾速、生多米難、石根爾、苔生左右、新玉之、年之經去者、紫之、名高浦之、名告藻之、名耳殘而、眞鉤持、弓削之河原之、埋木之、顯不得之、山河之、澤荷多者、所虛乎霜、慨念而、鷄鳴、東方乃波多豆、馬爪、筑紫乃伎波美、不知魚取、海川不落、足檜木之、山野乎副似、白玉之、間明管、貫有緒乎、縛寄如、寄集、書連並而、古之、書之、盡、眞十鏡、相照之管、椽之、衣解洗、又打山、本津地乎、漁爲登、海人之燒火之、明方、明爲流而、隈毛不落、如得六物等、月累、年來重成而、陸奥之、阿田多良眞弓、弦著而、弛時無、勞爲、意母灼久、憤留、千重之一重母、今之紀波、殆水葱沼、雖然、乎遲那紀吾身、蛭子奈須、足副蹇而、手束杖、策毛不衝母、往而將見、爲便之無有者、向峰之、椎之左枝之、相差、事毛多兼、久延彦乃、神爾幣爲者、縱吟哉師、足者不行而、天下四方之境乎、夢谷、令覺而申尾、海松之如、和和氣懸有、可布太爾、一無禮婆、何物乎鴨、手祭之爲爾、吾者裁猿

反歌

索見與奈良能京師者舊去友本霍公鳥聲乎鄉導似

天保十二年辛丑六月八日

藤原雅澄稿

奉命上萬葉集名處考六卷

明治十二年

飛鳥井雅慶

萬葉集名處考終

萬葉集坐知佳境附錄

凡例

おのれさきに萬葉集名處考を著せり、故其書によりて、こたみ山海川里など、各部を分て、其名處名處をあつめ附録して、うひまなびのともがらの、歌よまむたづきとす

○國郡の在處の所據、并證歌等は、本編に就て見べし、たとへば、あさか山は、卷一あ部に出、かすが野は、卷二か部に出たるがごとし

○山の題を得たらむには、その嶺、或はなにの尾、上など云をよまむに妨なし、海の題を得たらむには、その浦、なにの濱など云をよまむにも妨なし、よむ人の心にまかすべし、但し古くは、まれまれ川にも浦をよみたることあれば、いさゝか心すべし、さて嶺の題ならむには、たゞその山、なにの山などあるをばよまじく、浦の題ならむには、たゞその海、なにの海などあるをば、よまじきことさらなり、いづれもこれに准ふべし

○おきつ島山、あべ島山などの類は、山の題にも、島の題にもよまむに妨なければ、兩部に載たり

○つしま、壹岐の島などは、島部に出すといへども、今島と云題によまむには、斟酌あるべし、又磯城島、やまと島なども、もとより島の題によまむこと、よろしからず

○春日山は、かすが山ともかすがの山ともいへど、かぐ山をば、かぐの山といふまじく、ふじの山をば、ふじ山とはいふまじければ、みな古歌の例によりて讀べきことなり、私にの言を、加へもはぶきもすべからず、故の言をばぶきても加へてもいへるをば、二ながら舉て、其例をしらしめたるなり

○飛鳥、春日などの類は、たゞあすか、かすがとのみもいへば、雑部にも出し、あすか川ともいへば、川部にも出し、あすかの里ともいへば、里部にも出し、かすが野ともいへば、野部にも出し、かすが山ともいへば、山部にも出して、同地を各部に隨て、かしこにもこゝにも載たる類多きことさらなり

○いかるが、うしまだなどの類、山にも、川にもつけがたき地名をば、雑部に出す、すべて雑と云名目、うるはしくは當らぬことなれど、ことごとくしき名目などを設け出むは、中々に、うひまなびのまどふべければ、おしこめて、いづれも雑部とす

○雑部に出す中に、くま野、よし野などは、もと野によれる地名ともおほゆれば、野部に出すべく、すみの江、ふか江などは、もと江によめる地名ともおほゆれば、江部に出すべく、あくら、まつらなどは、もと浦によれる地名ともおほゆれば、浦部に出すべく、しほつ、しほつなどは、もと津によれる地名ともおほゆれば、津部に出すべく思はるゝ類、これかれあれど、はやくすわりたる地名をば、なほ各部には出さずして、おしなべて雑部に入つ、さてよし野の山、すみの江の濱なども云たぐひをば、各部に出せることさらなり

○地名の首に、黒點をしるしたるは、集中に、地名のみ出て、歌詞の見えざるしるしなり

目錄終

寺……………五六五
 以上六十三部

雜……………五六五

目錄

山……………	五三八	嶺(根)(高根)(嶽)(尾)(尾上)……………	五四二	岡(丘)……………	五四三
谷……………	五四三	岫……………	五四三	坂……………	五四三
柚……………	五四四	林……………	五四四	浦……………	五四五
濱……………	五四六	湊……………	五四七	磯……………	五四七
島……………	五四八	崎……………	五四九	泊……………	五五〇
灘……………	五五〇	沖……………	五五一	川……………	五五一
瀧……………	五五三	淀……………	五五三	門……………	五五三
淵……………	五五四	瀨……………	五五四	橋……………	五五四
野……………	五五四	原……………	五五六	道(路)……………	五五七
江……………	五五七	沼……………	五五八	池……………	五五八
堤……………	五五九	回……………	五五九	湯……………	五五九
田……………	五五九	堰……………	五六〇	水……………	五六〇
國……………	五六〇	都(舊都)(宮)(離宮)(行宮)(齋宮)(御門)(御階)……………	五六二	縣……………	五六三
城……………	五六二	關……………	五六二	郡……………	五六二
里(鄉)……………	五六三	村……………	五六三	市……………	五六三
驛……………	五六四	庄……………	五六四	亭……………	五六四
				社(森)(神)……………	五四六

坐知佳境附録

萬葉集坐知佳境附録

○山

あかみ山	(未勘)	あきな山	(相樂)	あご山	(志摩)
あさかの山	(攝津)	あさか山	(陸奥)	あさち山	(對馬)
あさづま山	(大和)	あさづまのかた山とも		あしき山	(筑前)
あしがら山	(相模)	あしがらのやへ山とも		あじくま山	(未勘)
あしほ山	(常陸)	あそ山	(上野)	あなし山	(大和)
あは山	(阿波)	あふさか山	(近江)	あべしま山	(筑前、或云尾張)
あほ山	(大和、或云さほ山の誤、)			あめのかぐ山	(大和)
あらし山	(越前)	ありま山	(攝津)	あをかぐ山	(大和)
いかつち山	(大和)	いかこ山	(近江)	いくぢ山	(山城)
いこま山	(大和)	いさみの山	(伊勢、或云、いはそへたる詞にて、さみの山なり、)	いとかの山	(紀伊)
いそへの山	(近江、或云地名に非ず、)			いはれの山	(大和)
いはき山	(陸奥)	いはくに山	(周防)		
いも山	(紀伊)	いもの山とも、又いもせの山とも連ねよめり			
うすひ山	(上野)	うぢま山	(大和)	うへかた山	(對馬)
うねび山	(大和)	うねびのこのみづ山とも			

萬葉集坐知佳境附録

うら野山	(信濃)	おきそ山	(美濃)	おきつしま山	(近江)
おさかの山	(大和)	おほ野山	(筑前)	おほえ山	(丹波)
おほは山	(紀伊、或云未勘)	おほ山	(越中、或云越前)	おほきの山	(筑前)
かゞみの山	(山城)	かゞみ山	(豊前)	かゞみの山とも	
かぐ山	(大和)	かけ山	(相模)	かさ山	(大和)三笠山なり
かすが山	(大和)	かすがの山とも		かせ山	(山城)かせの山とも
かづらき山	(大和)	かまくら山	(相模)	かみのかぐ山	(大和)
かみ山	(大和)	かみ山	(出雲)	かみをかの山	(大和)
かむなび山	(大和)	かむなびの山とも		かも山	(石見)
かや山	(筑前)	きさ山	(大和)	きさの中山とも	
きの山	(筑前)	きりめ山	(紀伊)	くさかの山	(河内)
くたみ山	(豊後)	くひ山	(山城)		
くらはし山	(大和)	くらはしの山とも		くろかみ山	(下野)
こしの大山	(越前、或云越中、)	こせ山	(大和)	こせの山とも	
こはた山	(山城)	こま山	(山城)	こもち山	(未勘)
さがら山	(山城)	さき山	(大和)	さぎさか山	(山城)
さゝなみの大山	(近江)	さぬ山	(上野、或云常陸、)		
さへき山	(安藝、或云さつき山の誤か、もししかするときは、地名に非ず、)				

さほ山	(大和)	さほの山とも		さみね山	(讃岐)
さみの山	(伊勢)	しかの山		したひ山	(攝津)
しはつ山	(攝津)	しはせ山		しほつ山	(近江)
しま山	(大和)	しまくま山		すかの山	(越中)
しら山	(未勘、按に、越の白山か、)				
せの山	(紀伊)	又いもせの山ともつらねよめり			
たかきの山	(大和)	たかしま山	(近江)		
たかまと山	(大和)	たかまとの山とも		たかつね山	(石見)
たち山	(越中)	たつた山	(大和)	たつたの山とも	
たなかみ山	(近江)	たまづしま山	(紀伊)	たまのよこ山	(武藏)
たむの山	(大和)	たむけの山	(大和)	たむけの山	(近江)
たゆらきの山	(播磨)	つくは山	(常陸)	つくはの山とも	
とこの山	(近江)	となみ山	(越中)	とば山	(大和)
とみ山	(大和)	なぐさ山	(紀伊)	なご山	(筑前)
なすき山	(攝津)	なばりの山	(伊賀)		
なほり山	(豊前、或云なすきの山の誤、)			なみくら山	(近江)
なら山	(大和)	ならの山とも		にひた山	(上野)
にふの山	(大和)	にふの山	(越前)		

のちせ山	(若狭)	のちせの山とも		のとのしま山	(能登)
のとかの山	(未勘)	はかひ山	(大和)	はかひの山とも	
はこねの山	(相模)	はたのよこ山	(大和)		
はつせ山	(大和)	はつせの山とも、をはつせ山とも			
ひきての山	(大和)	ひとくに山	(大和)	ひら山	(近江)
ふかつしま山	(備後)	ふじの山	(駿河)	ふじのしば山とも	
ふたぎ山	(山城)	ふたがみ山	(大和)		
ふたがみ山	(越中)	ふたがみの山とも		ふは山	(美濃)
ふる山	(大和)	ふるの山とも		へぐりの山	(大和)
ほそかは山	(大和)	まきむく山	(大和)	まきむくの山とも	
まつら山	(肥前)	まつち山	(大和)	まつちの山とも	
みかきの山	(大和)	みかもの山	(下野)		
みかさ山	(大和)	みかさの山とも		みくまり山	(大和)
みくに山	(越前)	みちのく山	(陸奥)	みなふち山	(大和)
み野の山	(美濃)	みふねの山	(大和)	みよなし山	(大和)
みむろの山	(大和)	みもろの山	(大和)	みもろと山	(山城)
みわ山	(大和)	みわの山とも		もる山	(大和)
やかみの山	(石見)	やつり山	(大和)		

ゆふ山 (豊後) ゆふの山とも
 ゆふし山 (對馬) よこ山 (武藏)
 よし野の山 (大和) みよし野の山とも
 わたりの山 (石見) わづか山 (山城) わづかそま山とも
 むかひの山 (大和) るな山 (攝津) をくらの山 (大和)
 をすての山 (紀伊)

○嶺 (根)(高根)(嶽)(尾)(尾上)

あしがらの嶺 (相模) あだたらの根 (陸奥) あひづね (陸奥)
 あをねが嶽 (大和) あを根ろ (未勘、按に、地名に非るか、)
 いかほ根 (上野) いかほの根ろとも
 いづの高根 (伊豆) いまきの嶺 (大和) いこま高根 (大和)
 いよの高根 (伊豫) うまぐたの根ろ (上總) いむた根 (未勘)
 かしま根 (能登) きしみが嶽 (肥前) おほしまの根 (大和)
 こなのしら根 (未勘、按に、もこのしのしら根を、誤れるにはあらじか、) くろほの根ろ (上野)
 さがむ根 (相模) しら根 (未勘、こなのしら根なり、) かくらほの根 (大和)
 するがの根ら (駿河) たかちほの嶽 (日向) たかまとの嶺 (大和)
 たごの根 (上野) つくは根 (常陸) をつくはねろとも、つくはの根ろとも
 つしまの根 (對馬) とぶひが嶽 (大和) はこねの根ろ (相模)

ひれふる嶺 (肥前) ふじの根 (駿河) ふじの高根とも
 ふたがみの尾上 (越中) みかねの嶽 (大和) むざし根 (武藏)
 ゆつぎが嶽 (大和) よし野の嶽 (大和) わざみの根 (美濃)
 をくらの嶺 (大和) をなの尾 (遠江か、又は信濃か、)

○岡 (丘)

あは丘 (常陸) いくちの岡 (山城) いざにはの岡 (伊豫)
 いはしろの岡 (紀伊) いまきの岡 (大和) かた岡 (大和)
 かみ岡 (大和) きはつくの岡 (常陸) さだの岡 (大和)
 さなづらの岡 (未勘) さぬの岡 (紀伊) しげ岡 (大和)
 とみの岡 (大和) とりの岡 (常陸) ならしの岡 (大和)
 まゆみの岡 (大和) みやじろの岡 (未勘) むかひの岡 (大和)

○谷

しぶ谷 (越中)

○岫

むざし野の小岫 (武藏)

○坂

いかほろの坂 (上野) いはほろの坂 (未勘、或云いかほろの坂の誤、)

あしがらの御坂	(相模)	あふ坂	(近江)	いつはたの坂	(越前)
うすひの坂	(上野)	おほ坂	(大和)	かしの坂	(大和)
さぎ坂	(山城)	すみ坂	(大和)	たこのよび坂	(駿河)
ふぢしろの御坂	(紀伊)	やへ坂	(大和)		
○柚					
いづみの柚	(和泉)	わづか柚山	(山城)		
○林					
きへの林	(遠江)	へそがたの林	(大和)		
○海					
あごの海	(攝津)	あらつの海	(筑前)	いせの海	(伊勢)
いづの海	(伊豆)	いなみの海	(播磨)	いはみの海	(石見)
おうのみ	(出雲)	きの海	(紀伊)	くろうしの海	(紀伊)
けひの海	(淡路)	こがたの海	(伊勢)	こしの海	(越前中後)
さばの海	(周防)	すゝの海	(能登)	するがの海	(駿河)
ちぬの海	(和泉)	なごの海	(攝津)	なごの海	(越中)
なさかの海	(常陸)	なにはの海	(攝津)	のとの海	(能登)
はくひの海	(能登)	まつらの海	(肥前)	みかたの海	(若狭)
むこの海	(攝津)				

あかしの浦	(播磨)	あごの浦	(志摩)	あこねの浦	(紀伊)
あさかの浦	(攝津)	あさぢが浦	(對馬)	あみの浦	(未勘、按に、誤字か、)
あをの浦	(越中)	いそまの浦	(備中、按に、いそみの浦を誤れるか、さらば地名に非ず、)	おほの浦	(遠江)
おうの浦	(出雲)	おほ浦	(筑前)	おほの浦	(遠江)
かざはやの浦	(備後)	かたみの那	(紀伊)	かたりの浦	(近江)
からの浦	(筑前)	くまけの浦	(周防)		
くま野の浦	(紀伊)	みくま野の浦、とよめり、		けひの浦	(越前か又は淡路か、)
こすけろの浦	(武藏か)	さだの浦	(土佐か)	さひかの浦	(紀伊)
しがつの浦	(近江)	しかの浦	(筑前)	しきつの浦	(攝津)
しだの浦	(駿河)	しまの浦	(筑前)	すが浦	(近江)
たかしきの浦	(對馬)	たこの浦	(越中)	たこの浦	(駿河)
たましまの浦	(肥前)	たまの浦	(紀伊)	たまの浦	(備中)
たゆひが浦	(越前中)	たるひめの浦	(越中)	ちえの浦	(未勘)
ちたの浦	(尾張)	つぬの浦	(石見)	つぬの浦	(讃岐)
とはたの浦	(筑前)	とほつ大浦	(土佐か)	ともの浦	(備後)
ながとの浦	(安藝)	ながはまの浦	(能登)	ながるの浦	(備後)
なごの浦	(越中)	なたかの浦	(紀伊)	なつみの浦	(近江)

なほの浦	(土佐か)	なほの浦	(未勘)	にへの浦	(遠江)
ぬさかの浦	(肥後)	のこの浦	(筑前)	ひかさの浦	(播磨)
ひらの浦	(近江)	ふせの浦	(越中)	ふぢえの浦	(播磨)
まつらの浦	(肥前)	まつほの浦	(淡路)	まつが浦	(未勘)
まながの浦	(近江)	まぬの浦	(攝津)	まゝの浦	(下總)
まりふの浦	(周防)	みなべの浦	(紀伊)	みぬめの浦	(攝津)
みほの浦	(紀伊)	みやけの浦	(下總)	むこの浦	(攝津)
むろの浦	(播磨)	わかぬの浦	(紀伊)	わくまの浦	(豊前)
をふの浦	(越中)				

○濱

あくらの濱	(紀伊)	あらつの濱	(筑前)	いでみの濱	(攝津)
いせの濱	(伊勢)	いせの濱萩、とよめり		おほわだの濱	(攝津)
いはしろの濱	(紀伊)	いはしろの濱松とよめり			
かざはやの濱	(紀伊)	かみの小濱	(紀伊)		
きくの濱	(豊前)	きくの長濱とも、きくの高濱とも		こ濱	(攝津)
くらなしの濱	(未勘、或云豊前)	こぬみの濱	(常陸)	すみの江の濱	(攝津)
しかの濱	(筑前)	しなぬの濱	(越中)	つぬがの濱	(越前)
たかしの濱	(和泉)	たか濱	(豊前)		

とほつの濱	(土佐か)	なが濱	(豊前)	なが濱	(越中)
なが濱	(遠江)	なごの濱	(攝津)	なごえの濱とも、	
ふけひの濱	(紀伊)	ふなせの濱	(播磨)		
まつだえの濱	(越中)	まつだえの長濱とも、		みつの濱	(攝津)
よろきの濱	(相模)				

○湊

あどの湊	(近江)	かけの湊	(未勘)	なかの湊	(讃岐)
ひらの湊	(近江)	まとかたの湊	(播磨)	あなひの湊	(攝津)
をかの湊	(筑前)				

○潟

あかし潟	(播磨)	あさか潟	(攝津)	あせか潟	(未勘)
あぢかまの潟	(未勘)	あゆち潟	(尾張)	ありち潟	(未勘、或云、越前)
うなかみ潟	(上總)	かしひ潟	(筑前)	かしひの潟とも、	
くすは潟	(上野)	くろうし潟	(紀伊)	たゆひ潟	(未勘)
なには潟	(攝津)	ひた潟	(未勘)		

○磯

おほさきの荒磯	(紀伊)	かぢしまの磯	(未勘)	しらかみの磯	(紀伊)
しぶたにの磯	(越中)	しぶたにの荒磯とも、		しるはの磯	(遠江)

たかしまの磯	(近江)	まゝのおすひ	(下總)	おすひは磯邊の東語
むらじが磯	(駿河)			
あきづ島	(大和)	あはち島	(淡路)	
あは島	(讃岐)	あはの小島とも、		
あべ島山	(未勘、按に、筑前又は尾張、)			あべの島 (未勘、或云攝津、)
いへ島	(播磨)	いへの島とも、		いはひ島 (周防)
いらごの島	(伊勢)	いちごが島	(因幡か)	いもが島 (紀伊)
おほ島	(周防)	おほ島	(大和)	おきつ島山 (近江)
かさぬひの島	(攝津)	かさ島	(未勘)	かこの島 (播磨)
か島	(常陸)	か島	(紀伊)	か島 (能登)
かみ島	(備前)	からにの島	(播磨)	かぢ島 (未勘)
きびの兒島	(備前)	こ島	(備前)	かり島 (長門)
こ島	(未勘)	こ島	(未勘)	こ島 (紀伊)
さ島	(下總)	さみねの島	(讃岐)	こま島 (肥前)
しき島	(大和一國或は、天下總名)			
すが島	(近江か、或は云、阿波紀伊の間にあり、)			たか島 (近江)
たく島	(出雲)	たこの島	(越中)	たちばなの島 (大和)

たま島	(肥前)	たまづ島	(紀伊)	つ島	(對馬一國)
つくゑの島	(能登)	つくしの島	(西海九國)	つぬ島	(長門)
て島	(攝津)	と島	(武藏)	ながとの島	(安藝)
なる島	(播磨)	ぬ島	(淡路)	のとの島山	(能登)
ひめ島	(攝津)	ふかつ島	(備後)	まぐは島門	(上野か)
み島	(攝津)	みづ島	(肥後)	みの島	(筑前)
やまと島	(大和一國)	ゆきの島	(壹岐一國)		
○崎					
あらゐの崎	(未勘)	あらつの崎	(筑前)	あれの崎	(未勘、或云美濃、)
いそ崎	(常陸)	いほ崎	(紀伊)	おほ崎	(紀伊)
かしまの崎	(常陸)	かねの御崎	(筑前)	かみの崎	(紀伊)
から崎	(近江)	からの崎	(石見)	きよみの崎	(駿河)
さての崎	(未勘、或云しでの崎の誤、しでは伊勢、)			しでの崎	(伊勢)
しぶたにの崎	(越中)	しら崎	(紀伊)	せとの崎	(播磨)
たこの崎	(越中)	たふしの崎	(志摩)	たるひめの崎	(越中)
ちかの崎	(肥前)	つくしの崎	(西海九國)	つをの崎	(近江)
とみの崎	(大和)	なにはの崎	(攝津)	ぬしまの崎	(淡路)
みうら崎	(相模、或云陸奥、)	みこしの崎	(相模)	み崎	(筑前)

みつの崎	(攝津)	みぬめの崎	(攝津)	みくらくの崎	(肥後)
みまの崎	(近江)	やらの崎	(筑前後にあるべし)		
ゆらの崎	(紀伊)	ゆらの御崎とも		をふの崎	(越中)
○津					
あきた津	(伊豫)	あら津	(筑前)	いちひ津	(大和)
うなかみの津	(大總)	うなかみの其津とよめり		えな津	(攝津)
おほ津	(近江)	さきたまの津	(武藏)	しは津	(攝津)
しが津	(近江)	しがの大津とも		たか津	(攝津)
しほ津	(近江)	すみの江の御津	(攝津)	なにはの御津とも	
つぬがの津	(越前)	なには津	(攝津)		
にきた津	(伊豫)	ひき津	(筑前)		
み津	(攝津)	なにはのみ津なり		もはき津	(常陸)
み津	(攝津)	すみの江のみ津なり			
やき津	(駿河)	わた泊	(石見)		
○泊					
から泊	(筑前)	この泊	(筑前)	みつの泊	(攝津)
むこの泊	(攝津)				
○灘					

ひぢきの灘	(播磨、或云、備後より西にあり)				
○沖					
すみの江の沖	(攝津)				
○渚					
かち野の渚	(近江)				
○川					
あきづの川	(大和)	あしきの川	(筑前)	あその川原	(下野)
あすか川	(大和)	あすかの川とも			
あど川	(近江)	あなし川	(大和)	あなしの川とも	
あまの川	(天河)	あまの川原とも		いさや川	(近江)
いさ川	(大和)	いし川	(石見)		
いづみ川	(山城)	いづみの川とも		いなみの川	(播磨)
いみづ川	(越中)	うさか川	(越中)	うぢ川	(山城)
うなひ川	(越中)	うるわ川	(未勘)	又は、うるや川ともあり、共に誤あらむ	
おきなが川	(近江)	おほ野川原	(大和)		
かたかひ川	(越中)	かたかひの川とも		かたすは川	(河内)
かむなび川	(大和)	かも川	(山城)	きの川	(紀伊)
きさの小川	(大和)	きよみの川	(大和)	くじ川	(常陸)

くせの川原	(山城)	くらはし川	(大和)	くらはしの川とも
さきた川	(越中)	さきたの川とも	さほ川 (大和)	さほの川とも、さほの川原とも
しかま川	(播磨)	しくら川	(未勘、或云越前)	すゞか川 (伊勢)
そがの川原	(大和)	たど川	(美濃)	
たましま川	(肥前)	たましまのこの川上とも	たま川	(武藏)
ちぐまの川	(信濃)	とね川	(上野)	とひの川内 (相模)
とりかひ川	(大和)	なきの川	(山城)	なつみの川 (大和)
にぎし川	(能登)	にひ川	(越中)	にふの川 (和大)
ぬな川	(天河)	のと川	(大和)	
のとせ川	(大和)	のとせの川とも	はつせ川 (大和)	はつせの川とも
はひつきの川	(越中)	はらろ川 (未勘、按に、下總か、)	ひのくま川	(大和)
ひらせ川	(大和)	ふじ川	(駿河)	ふる川 (大和)
ほそ川	(大和)	ほり江の川	(攝津)	まきむくの川 (大和)
まつら川	(肥前)	まつらの川とも	みつ川	(近江)
みなせ川	(相模)	みへの川	(伊勢)	みやのせ川 (未勘)
みわ川	(大和)	むこ川	(攝津)	むつだの川 (大和)
めひ川	(越中)	やすの川	(近江)	
やすの川	(天河)	やすの川原とも	やつり川	(大和)

ゆけの川原	(河内)	ゆふ川	(大和)	ゆふや川 (大和)
よし野川	(大和)	よし野の川とも、みよし野川とも、みよし野の大川よどとも		
よしき川	(大和)	わたらひの大川 (伊勢)	みな川	(攝津)
をかみ川	(越中)			
○瀧				
おほ瀧	(大和)	たぎ	(美濃)	瀧のへ (淡路)
瀧のへ	(大和)	瀧のみやこ	(大和)	瀧のみかど (大和)
よし野の瀧	(大和)	みよし野の瀧とも		
○淀				
あすか川なせの淀	(大和)	まつら川なせの淀	(肥前)	
みよし野の大川淀	(大和)	むつだの淀	(大和)	
○門				
あかしの門	(播磨)	あかし大門とも	さほの川門	(大和)
せ門	(薩摩)	なつみの川門	なには門	(攝津)
なる門	(周防)	はらろ川門	(未勘、按に下總か、)	
まぐは島門	(上野)			
○渡				
うちの渡	(山城)	かみの渡	(備中)	こがの渡 (下總)

さぬの渡	(紀伊)	つしまの渡	(對馬)	むこの渡	(攝津)
やすの渡	(天河)				
○淵					
かむなびの淵	(大和)	たましまの淵	(肥前)		
○瀬					
たぎの瀬	(美濃)	ほそ川の瀬	(大和)	やまぶきの瀬	(山城)
○橋					
かたすは川のさぬりの大橋(河内)				かるぬの橋	(常陸)
さかたの橋	(大和)	さぬの舟橋	(上野)	ふるの高橋	(大和)
たか橋	(大和)	ふるの高橋なり			
まゝのつぎ橋	(下總)	よどのつぎ橋	(攝津)		
○岸					
あさづまのかた山岸(大和)		いはしろの岸	(紀伊)	さほ川の岸	(大和)
すみの江の岸	(攝津)	すみの江の岸	(丹後)	まきむくの岸	(大和)
○野					
あきの野	(大和)	あきの大野とも			
あきづ野	(大和)	あきづの野邊とも、あきづの小野とも			
あけさ、は野	(未勘、或云攝津、今按に、誤字か、)	あさ、は小野	(攝津)		

あさ野	(淡路)	あさは野	(武藏か、又は遠江か、)あさはの野らとも
あしきの野	(筑前)	あだの大野	(大和)
あぬな	(未勘)	按に、なは野、なるべし	
いなみ野	(播磨)	いはしろの野	(紀伊)
いはせ野	(越中)	いはたの小野	(山城)
いり野	(山城、或云丹後、)	いり野	(上野)
うだの野	(大和)	うだの大野とも	
おしたる小野	(未勘)	おほ野	(筑前)
おほあらし野	(大和)	かすが野	(大和)
かち野	(近江)	かはくちの野邊	(伊勢)
かみたかは野	(未勘、または山城か、又は豊前か、本には上小竹葉野とあり、)	かまふ野	(近江)
かりたかの野	(大和)	かりぢの小野	(大和)
かりはの小野	(未勘、按に、かりぢの小野を誤れるか、)	くたら野	(大和)
くるすの小野	(大和)	こせの野	(大和)
さき野	(大和)	さぬかたの野	(近江)
しきの野	(大和)	ましの野	(大和)
すぎの野	(越中)	すゑのはら野	(山城、又は和泉、或云大和、)
たかまのかや野	(大和)	たかまとの野	(大和)

たかは野	(未勸、按に、山城か、又は豊前か)	たぎの野	(美濃)
たなくらの野	(山城)	つが野	(攝津)
つくま野	(大和)	とやの野	(下總)
なばり野	(伊賀)	はた野	(大和)
ひくま野	(遠江)	ま野	(陸奥)
みかさの野邊	(大和)	みつが野	(駿河か)
むざし野	(武藏)	やすの野	(筑前)
やたの野	(大和)	わざみ野	(美濃)
ゐな野	(攝津)		
をりの小野	(攝津)		

○原

あごねの原	(未勸、或云、山城、)あぢふの原(攝津)	いしの原	(伊勢)
おほやが原	(武藏か)	くたらの原	(大和)
こふの原	(筑前)	たかぬ原	(大和)
たけたの原	(大和)	ながやの原	(大和)
はにやすのみかどの原(大和)		ふぢぬが原	(大和)
まかみの原	(大和)	みかの原	(山城)
みつの松原	(攝津)	ゆの原	(筑前)

よさみの原

○道

(路)

わざみが原

(美濃)

あふみ路	(近江)	いくちの道	(山城)	いはれの道	(大和)
いりま路	(武藏)	おほ野路	(越中)	かるの道	(大和)
き路	(紀伊)	きのへの道	(大和)	きの山道	(筑前)
みこし路	(越前中後)	こせ路	(大和)	さがむ路	(相模)
さほ路	(大和)	しなぬ路	(信濃)	しほ路	(能登)
たつた路	(大和)	たには路	(丹波)	たごこえの道	(河内)
つくし路	(西海九國)	とさ路	(土佐)	なには路	(攝津)
なら路	(大和)	ならの大路とも	はつせ路(大和)	とよはつせ路、とよめり	
ふたみの道	(參河)	まつら路	(肥前)	みやげ路	(大和)
やましろ路	(山城)	やまと路	(大和)	やまだの道(未勸、按に、山城、又は河内)	
わかさ路	(若狭)				

○湖

あふみの海	(近江)	かとり海	(近江)	せの海	(駿河)
とはの淡海	(常陸)	ふせの海	(越中)	ふせの水海とも	

○江

いなさほそ江	(遠江)	おほぐらの入江	(山城)	かしふ江	(筑前)
--------	------	---------	------	------	------

くさか江	(河内)	しかま江	(播磨)	すさの入江	(紀伊、又は出雲)
たま江	(攝津)	つたのほそ江	(播磨)	なご江	(攝津)
なご江	(越中)なごの江とも	なにはの小江	(攝津)	なにはほり江	(攝津)
ひだの細江	(大和)	ひみの江	(越中)	ふる江	(越中)
ほり江	(攝津)	まつだ江	(越中)	まゝの入江	(下總)
みしま江	(攝津)	むろの江	(紀伊)		
○沼					
いかほの沼	(上野)	いならの沼	(上野)	かはやが沼	(上野)
さき沼	(大和)	みくゝ沼	(未勸、或云、武藏、本に野とあり、沼なるべし)		
をさきの沼	武藏				
○池					
いはれの池	(大和)	うきぬの池	(未勸)	かつまたの池	(大和)
かりぢの池	(大和)	かるの池	(大和)	きくの池	(豊前)
きよすみの池	(大和)	つるぎの池	(大和)	とろしの池	(和泉)
はにやすの池	(大和)	まがりの池	(大和)	まぬの池	(攝津)
みゝなしの池	(大和)	よるか池	(大和)		
○澤					
さき澤	(大和)	なる澤	(駿河)	なる澤	(伊豆)

つるの堤	○堤	(甲斐)	はにやすの堤	(大和)	はにやすの池の堤とも
○回					
いめの回	(大和)	おほ回のはま	(攝津)		
しがの大回	(近江)	一云、ひらの大回			
○湯					
きの温泉	(紀伊)	すきたの温泉	(筑前)	とひのかふちにいづる湯(相模)	
み湯のへ	(伊豫)	湯のはら	(筑前)		
○井					
いしの御井	(伊勢)	さらし井	(常陸)	たかはらの井	(河内)
てら井	(越中)	御井	(大和)	藤原宮御井なり	
まゝの井	(下總)	ゆけひの御井	(大和)	ゆづるはの御井	(大和)
○田					
あべの田面	(駿河)				
あらき田	(大和、按に、地名ならずともあるべし)	あらきの小田とも			
かにはの田居	(山城)	さくら田	(尾張)	さぬ田	(上野)
しづくの田居	(常陸)	すみの江の小田	(攝津)	ふしみが田居	(山城)
ふるのわさ田	(大和)	をほり田	(大和)	をほり田	(尾張)

やさかの堰 (上野)
 ○堰
 あゆちの水 (尾張)
 ○水
 くまきの淀 (能登)
 ○淀
 あぎの國 (國名)
 あふみの國 (國名)
 いなはの國 (國名)
 から國 (蕃國)
 こしの國 (國名、越前中後)
 さしなみの國 (四國)
 するがの國 (國名)
 つくしのみちのくちの國 (國名)
 とこよの國 (仙境)
 ・とよ國のみちのしり (豊後)
 はつせの國 (大和) はつせ小國とも
 あしはらのみづほの國(總名) みづほの國、とのみも
 いせの國 (國名)
 かひの國 (國名)
 きの國 (國名)
 さぬきの國 (國名)
 つくしの國 (西海九國)
 ・とさの國 (國名)
 つの國 (國名)
 とよ國 (豊前、後)
 なのはの國 (攝津)
 はりまの國 (國名)

・ひのみちのくちの國 (國名) ・ひのみちのしりの國 (國名)
 ひたちの國 (國名) みぬの國 (國名) やまとの國 (總名、又大和一國)
 よし野の國 (大和) ○都 (舊都)(宮)(離宮)(行宮)(齋宮)(御門)(御階)
 あきづの宮 (大和) ・あさくらの宮 (大和) あすかの舊都 (大和)
 あぢふの宮 (攝津) ・いはゆの行宮 (伊豫) うぢの都 (山城)
 うねびの宮 (大和) おしてる宮 (攝津) おほつの宮 (近江)
 おほやまとくにの都 (山城) ・かぐやまの宮 (大和) かはくちの行宮 (伊勢)
 ・かはらの宮 (大和) きへのの宮 (大和) きよみはらの宮 (大和)
 きよみの宮 (大和) くりの宮 (美濃) くにの都 (山城)
 ・さきの宮 (大和) さなみの舊都 (近江) しまの宮 (大和)
 しまの御門 (大和) しまの御階 (大和)
 たかまとの宮 (大和) たかまとの野のうへの宮とも、たかまとの尾の上の宮とも、
 ・たかつの宮 (攝津) たぎの都 (大和) たぎの御門 (大和)
 ながらの宮 (攝津) なのはの宮 (攝津) ならの都 (大和)
 ふたぎの宮 (山城) ふぢはらの宮 (大和) ふぢはらの大宮とよめり
 ふぢはらの都 (大和) ・みかはらの離宮 (山城)
 よし野の宮 (大和) みよし野のこの大宮とも、 わざみのはらの行宮 (美濃)

わたらひの齋宮 (伊勢)
 ○城
 ・きの城 (筑前)
 ○關
 ・きの關 (紀伊)
 ○郡
 ・あさひなの郡 (安房)
 ・あやの郡 (讃岐)
 ・いにはの郡 (下總)
 ・えはらの郡 (武藏)
 ・かふちの郡 (下野)
 ・さうまの郡 (下總)
 ・さやの郡 (遠江)
 ・そのきの郡 (肥前)
 ・つがの郡 (下野)
 ・なかの郡 (筑前)
 ・ながらの郡 (上總)
 ・ふししの郡 (能登)

あしかとの郡 (下野)
 ・いちはらの郡 (上總)
 ・うどの郡 (駿河)
 ・かとの郡 (加賀)
 ・かまの郡 (筑前)
 ・さへきの郡 (安藝)
 ・しだの郡 (常陸)
 ・ちよぶの郡 (武藏)
 ・つきの郡 (武藏)
 ・ながのしもの郡 (遠江)
 ・なすの郡 (下野)
 ・ましきの郡 (肥後)

となみの關 (越中)
 ・あまはの郡 (上總)
 ・いとの郡 (筑前)
 ・うばらきの郡 (常陸)
 ・かすやの郡 (筑前)
 ・くがの郡 (周防)
 ・さむかはの郡 (下野)
 ・しほのやの郡 (下野)
 ・ちひさがたの郡 (信濃)
 ・としまの郡 (武藏)
 ・ながさの郡 (安房)
 ・はにふの郡 (總下)
 ・みづきの郡 (備後)

みづ城 (筑前)
 ふはの關 (美濃)

・むさの郡 (上總)
 ・やまのべの郡 (上總)
 ○縣
 あふみ縣^{アガタ} (遠江)
 ○里 (郷)
 あすかの里 (大和)
 おほはらのふりにし里 (大和)
 ・くれの郷 (河内)
 さほのうちの里 (大和)
 ・たむらの里 (大和)
 ふぢはらのふりにし里 (大和)
 もりべの里 (未勘)
 を里 (未勘、按に地名に非るか、)
 ○村
 ・くまきの村 (能登)
 ・ふか江の村 (筑前)
 ○市
 あべの市 (駿河)

いづみの里 (山城)
 ・かすがの里 (大和)
 こそこの里 (未勘)
 すがはらの里 (大和)
 つぬの里 (石見)
 ふる里 (大和)
 やぶなみの里 (越中)

まつら縣^{カタ} (肥前)
 ・むなかたの郡 (筑前)
 ・やまの郡 (遠江)
 ・やなたの郡 (下野)
 ゆふきの郡 (下總)

・いちの郷 (筑前)
 かむなびの里 (大和)
 こそこの里人、とよめり、
 すみの江の里 (攝津)
 ならの里 (大和)
 みえりの里 (未勘)
 ゆきみの里 (未勘)

たかつきの村 (山城)
 ・ふる江の村 (越中)
 ・ふかみの村 (加賀)

かるの市 (大和)
 つば市 (大和)

にし市の市 (大和) ひむかしの市 (大和)
 ○窟 (石見にありと云、)
 しつの窟 (大和) みほの窟 (紀伊)
 ○驛 (筑前) ・たかにはの驛 (安藝) ・ひなもりの驛 (筑前)
 ○庄 (大和) ・とみの庄 (大和)
 ○亭 (筑前) ・からの亭 (筑前) ・こましまの亭 (肥前) ・ひきつの亭 (筑前)
 ○社 (森)(神) ・いくりの森 (越後) いはせの森 (大和) いはたの森 (大和)
 いやひこの神 (越後) うきたの森 (大和) うなての森 (大和)
 かるの社 (大和) くせの社 (山城) うなての森 (大和)
 けひの大神宮 (能登) けひは、けたの誤か、 しかのすめ神 (筑前)
 すみの江のあら人神 (攝津) すみの江のあがおほみ神とも、すみの江のあがすめ神とも、
 となみ山たむけの神 (越中) つまの森 (紀伊) なきさはの森 (大和)
 ふる山のみづ垣 (大和) とよめり、又ふるの神杉とも、 みかさの森 (筑前)
 みもろの神 (大和)

かはら寺 (大和) たちばなの寺 (大和) とよらの寺 (大和)
 ○寺 (紀伊) あくら あぢ (攝津) あしきた (肥後)
 あしがら (相模) あしがりとち (大和) あしのや (攝津)
 あすか (大和) あそ (未勘) あだ (大和)
 あだ (紀伊) あだら (陸奥) あぢかま (未勘)
 あて (紀伊) あぬ (未勘) あは (國名、安房)
 あはぢ (國名) あふみ (國名、近江) あゆち (尾張)
 あられ (攝津) あらたま (遠江) あまり (攝津)
 あをみづら (或云參河、按に地名に非るか、) いかつち (大和)
 いかるが (大和) いかほ (上野)
 いけかみ (或云大和、或云地名に非ず、) いしゐ (信濃)
 いも (國名) いそのかみ (大和) いづみ (山城)
 いづも (國名) いなびつま (播磨) いなみつま、とも、
 いなは (國名) いぬかみ (近江) いはみ (國名)
 いはしろ (紀伊) いはれ (大和) いほはら (駿河)
 いやひこ (越後) いよ (國名) うしまど (備前)

うだ	(大和)	うち	(山城)	うなかみ	(上總)
うなひ	(攝津)	うなひ	(武藏)	うねび	(大和)
うゑつき	(大和)	おきな	(大和)	おきなが	(近江)
おほやまと	(總名)	おほはらき	(大和)	おほほら	(大和)
おほすみ	(國名)	かえ	(未勘)	かざはや	(紀伊)
かしはら	(大和)	かすが	(大和)	かだ	(備前)
かつしか	(下總)	かつらき	(大和)	かとり	(陸奥)
かぬま (上野か、又は下野か、)		かはる	(豊前)	かふち	(國名)
かへる	(越前)	かまくら	(相模)		
かみつけぬ	(國名)	かみつげのとも		かむしだ	(駿河か)
かむなび	(大和)	かりたか	(大和)	き	(國名)
きび	(國名)	きびのみちのしり (國名、備後きへ)			(遠江)
くせ	(山城)	くまき	(能登)		
くま野	(紀伊 まくま野とも、みくま野とも、)	くらが	(下總) まくらがとよめり		
こが	(下總)	こし	(國名、越前中後) みこしとも		
こしのなか	(國名)	こせ	(大和)	こば	(武藏)
こま	(蕃國)	さかて	(大和)	さきたま	(武藏)
さゝなみ	(近江)	さゝらの小野	(未勘、按に、天上にあるか、)		

さつま	(國名)	さど	(國名)	さぬ	(上野)
さぬかた	(近江)	さほ (大和)	さほのうちとも、さわたり		(未勘、或云駿河、)
しが	(近江)	しか	(筑前)	しなぬ	(國名)
じぬた	(和泉)	しはつ	(攝津) しはつき (未勘、或云相模、或云陸奥、)		
しほつ	(未勘)	しま	(國名)	しま	(筑前)
しま	(大和平群郡)	しま	(大和高市郡)	しもつけぬ	(國名)
・しもつふさ	(國名)	しらき	(蕃國)	すゝ	(能登)
すはう	(國名)	すま	(攝津)	すみの江	(攝津)
すみの江	(丹後)	するが	(國名)	すゑ	(上總)
たかきた	(美濃)	たかしき	(對馬)	たかま	(大和)
たかまと	(大和)	たかや (大和、又は河内)		たけち	(大和)
たご	(上野)	たちばな	(武藏)		
たちばな	(駿河、又按に、地名に非るか、)			たつた	(大和)
たどり	(上野)	たには	(國名)	たむけ	(大和)
たむけ	(越中)	たるみ	(攝津)	たるひめ	(越中)
ちぬ	(和泉)	つくま	(近江)		
つくは	(常陸) をつくは、とよめり、			つくし	(西海九國)
つくしのみちのしり (筑後)		つしま	(國名)	つぬ	(攝津)

つもり	(攝津)	てしま	(攝津)	とこよ	(仙境)
とこよ	(海外)	とこよ	(黄泉)	とは	(未勘)
とひ	(相模)	とほつあふみ	(國名)	とへたほみ、とも、	
とほつあふみ	(近江)	なか	(常陸)	なかまな	(未勘)
ながと	(國名)	なきすみ	(播磨)	なご	(越中)
なつみ	(大和吉野郡)	なつみ	(大和城上郡、宇陀郡の間にあり、)		
なには	(攝津)	なばり	(伊賀)	なら	(大和)
なるせ	(未勘)	にひばり	(常陸)	にふ	(上野)
はこね	(相模)	はつせ	(大和)	はにしな	(信濃)
はにやす	(大和)	はやひと	(國名)	ひだ	(國名)
ひたち	(國名)	ひのもと	(總名)		
ひのくま	(大和)	さひのくま、とよめり、	ひめすがはら (未勘、按に、天上にあるか、)		
ひらしき	(肥後)	ふかえ	(筑前)	ふしこえ	(未勘、或云土佐)
ふすま	(大和、或云地名に非ず、)	ふちはら	(大和高市郡)	ふたがみ	(大和)
ふたがみ	(越中)	ふるや	(未勘)	ふる	(大和)
ふなせ	(播磨)	まきむく	(大和)	まつら	(肥前)
ほつみ	(大和)	まとかた	(伊勢)	まぬ	(攝津)
まつばら	(紀伊か)				

まめ	(陸奥)	まゝ	(下總)	まゝ	(相模)
みかは	(國名)	みちのく	(國名)	みちのなか	(越中)
みちのしり	(備後)	みなふち	(大和)	みぬめ	(攝津)
みゝなし	(大和)	みもろ	(大和城上郡三輪山、)	みわ	(大和)
みもろ	(大和高市郡飛鳥の神岳、)	むらさき	(或云紀伊)		
みを	(近江)	むらさき			
むろがや	(未勘、按に、地名に非るか、)	やかみ	(因幡)	むろふ	(大和)
もろこし	(蕃國)	やましろ	(國名)	やぬ	(未勘)
やはせ	(近江)	やましろ	(大和)	やまと	(國名、或は總名、)
やましな	(山城)	やまむら	(大和)	やまへ	(伊勢)
ゆき	(國名)	よしぬ	(大和)	みよし野とも、	
よど	(攝津)	よなか	(或云近江)	よなばり	(大和)
わかさ	(國名)	わたづ	(石見)	るのへ	(大和)
をくさ	(未勘)	をぐさ	(未勘)	をだ	(陸奥)
をち	(近江)	をど	(上野)	をぬ	(上野)

天保十二年辛丑九月廿六日燈下にして書畢ぬ

藤原太郎雅澄

萬葉集坐知佳境附錄終

別卷總索引

例言

一、本索引は萬葉集古義の別卷なる、人物傳、品物解、品物圖繪、名所考、枕詞解等の中の人名、地名、品名、枕詞等の檢出に便にせむがために編纂したものである。而して、原書に項目として掲げられた地名や品物名の外に、その項目中の小項目として掲げられた名目の主なるものを併せ掲げることにした。

一、當然濁音を以て讀むべきものも、原書に清音を以て記載したものは、もとのままに濁點をつけないことにした。

一、地名の漢字の數種あるものは、その代表的のもの二三を掲ぐるに止め、品物の名の假名書のものには別に小活字を以て漢字を示し、又、人名及び地名の中、同じ稱呼で異人異所であるものは、小活字の註を加へてその別を明らかにした。

一、人名は原書に掲げる所に従つたが、檢出に不便なものは、成るべくその姓と名、若しくは名を、時として別名をも併せ掲げることにした。例へば、『大伴宿禰家持』の外に『大伴家持』、『尼理願』の外に『理願』を、『近江天皇』の外に『天智天皇』を併せ掲げた類である。

別卷索引

あ部

あいさ	(品)一七四	あかみやま(安可見夜麻)	(所)二五
あかさ	(圖)一七五	あからがし(明柏)	(品)一一六
あかごま(赤駒)	(品)二二二	あからたちばな(明橘)	(品)一三三
あがところ	(枕)一八九	あからびく	(枕)一八八
あかし(明石)(安可志)	(所)二五	あき(阿騎)	(所)二六
明石大門	(所)二五	あきかしは	(枕)一九二
明石湯	(所)二五	あきがしは(秋柏)	(品)一一六
明石の浦	(所)二五	あきかぜの	(枕)一九二
明石の門	(所)二五	あきくさの	(枕)一九二
縣犬養娘	(人)二四九	あきさ(秋沙)	(品)一七四
縣犬養子	(人)一〇六		
縣犬養淨人	(人)一〇六		
縣犬養宿禰人上	(人)九八		
縣犬養宿禰持男	(人)一〇二		
縣犬養宿禰吉男	(人)一〇二		

あきささ (圖) 一七五
あきたづ(飽田津) (所) 二八
あきづ(秋津)(蜻蛉) (所) 二六
あきづ(蜻蛉) (品) 二三〇
あきづ 蜻蛉 (圖) 二三〇
あきづしま (枕) 一九〇
あきづしま(秋津島)(蜻島) (所) 二七
蜻蛉野 (所) 二七
秋津の川 (所) 二七
蜻蛉の宮 (所) 二六
あきづは(秋津羽) (品) 二三一
あきづひれ(蜻蛉巾) (品) 二五一
あきな(安伎奈乃夜麻) (所) 二八
安貴王 (人) 二六
阿騎の野 (所) 二六
あきのはの (枕) 一九二
あきはぎの (枕) 一九〇
あきやまの (枕) 一九四

商長首鷹 (人) 二二二
あくら(飽浦) (所) 二八
飽浦の濱 (所) 二八
あげさはぬ(上小竹葉野) (所) 二八
あご(網兒) (所) 二八
あご(吾兒)(阿胡) (所) 二九
あごねのうら(阿胡根能浦) (所) 二九
あごねのはら(阿後尼之原) (所) 二九
吾兒の海 (所) 二八
網兒の浦 (所) 二八
網兒の山 (所) 二八
あさ(麻) (品) 一
あさ 麻 (圖) 三
あさか(朝香)(淺香) (所) 二九
朝香湯 (所) 三〇
あさかすみ (枕) 一九七
淺香の浦 (所) 二九
安積皇子 (人) 一九

朝香の山 (所) 二九
あさがほ(朝貌) 木槿 (品) 二〇四
あさがほ 木槿 (圖) 一〇八
あさがほの (枕) 一九九
あさかみの (枕) 一九九
あさかやま(安積山) (所) 三〇
あさがらす(朝鳥) (品) 一八二
朝倉 益人 (人) 一三七
あさくらのみや(朝倉宮) (所) 三一
あさぎりの (枕) 一九七
あささはをぬ(淺澤小野) (所) 三〇
あさしもの (枕) 一九六
麻田連陽春 (人) 一〇七
麻田陽春 (人) 一〇七
あさち(淺茅) (品) 五一
淺茅 (圖) 五二
あさち(淺茅)(安佐治) (所) 三〇
淺茅の浦 (所) 三〇

あさちはら (枕) 一九五
安佐治山 (所) 三〇
あさづくひ (枕) 一九九
あさづま(旦妻)(朝妻) (所) 三〇
朝妻の片山 (所) 三〇
あさつゆの (枕) 一九六
あさどりの (枕) 一九六
あさは(淺野) (所) 三〇
あさは(淺葉) (所) 三一
淺葉野 (所) 三一
あさひさし (枕) 二〇〇
あさひさす (枕) 二〇〇
あさひな(朝夷) (所) 三一
あさひなす (枕) 二〇〇
あさもよし (枕) 一九五
あし(葦)(蘆)(葭) (品) 三
あし 蘆 (圖) 五
あしかが(足利) (所) 三四

あしき(蘆城) (所) 三一
あしきた(葦北) (所) 三一
蘆城野 (所) 三一
あしかきの (枕) 二〇四
あしがちる (枕) 二〇五
あしがに(葦河爾) (品) 二二三
あしかび(葦若未)(葦芽) (品) 四
葦若未乃 (枕) 二〇一
あしがも(葦鴨) (品) 一八一
あしがら(足柄) (所) 三一
あしがり(阿之我利)(阿思我里) (所) 三一
あじくまやま(阿自久麻夜末) (所) 三三
あしげうま(駿馬) (品) 二一一
あしたづ(蘆鶴) (品) 一九六
あしたづの (枕) 二〇五
あじつき(葦附) (品) 四
あしつき 蘆附 (圖) 六
葦若未乃 (枕) 二〇一

あしのねの (枕) 二〇五
あしのや(葦屋) (所) 三三
あしはらのみづほのくに (所) 三二
(葦原乃水穗之國)
あしび(馬醉木) (品) 九九
あしび 馬醉木 (圖) 一〇三
あしひきの (枕) 二〇一
あしびなす (枕) 二〇五
あしほやま (枕) 二〇六
あしほやま(安志保夜麻) 蘆穗山 (所) 三三
あすか(明日香(飛鳥)大和國高市郡) (所) 三四
あすか(明日香) 大和國添上郡 (所) 三五
あすか(明日香) (所) 三五
明日香川 (所) 三四
明日香川原宮 御宇 天皇 (人) 二
明日香清御原宮 御宇 天皇 (人) 三
明日香皇女 (人) 二二
安宿王 (人) 三九
安宿 奈孺磨 (人) 一一三
あせかがた(安齊可我多) (所) 三六
あせぼ (圖) 一〇三
あそ(安蘇) (所) 三六

あそのかはら(安蘇乃河泊良) (所) 三六
あそやまつづら (品) 五五
あだ(阿太)(安太)大和國宇智郡 (所) 三七
あだ(安太)紀伊國在田郡 (所) 三七
阿太の大野 (所) 三七
あだたら(吾田多良)(安太多良) (所) 三七
あぢ (品) 一七四
あぢ (圖) 一七六
あぢかま(味鎌) (所) 三九
あぢかも(安遅鴨) (品) 一七四
あぢ鴨 (圖) 一七五
味經の原 (所) 三九
味原の宮 (所) 三九
味澤相 (枕) 二五一
あぢさゐ 紫陽花 (品) 一〇二
あぢさゐ 紫陽花 (圖) 一〇六
あぢのすむ (枕) 二〇六
あぢふ(味經)(味原) (所) 三八

あぢまぬ(安治麻野) (所) 三九
あぢむら (品) 一七四
あぢむらの (枕) 二〇六
あづさ(梓) (品) 一〇〇
あづさ梓 (圖) 一〇四
あづさゆみ(梓弓) (品) 一〇一
あづさゆみ (枕) 二〇七
厚見王 (人) 二九
安曇宿禰三國 (人) 一〇六
安曇外命婦 (人) 一四五
安曇三國 (人) 一〇六
あて(足代) (所) 三九
あてかをし (枕) 二〇九
あど(阿戸) (所) 三九
安都宿禰年足 (人) 九九
安都年足 (人) 九九
安都 扉娘 (人) 一四六
あなし(痛足)(病足) (所) 四〇

痛足の河カハ (所) 四〇
 痛足の山ヤマ (所) 四〇
 あぬ(安努)(阿努) (所) 四〇
 安努君キミ廣島ヒロシマ (人) 一一三
 安努廣島ヒロシマ (人) 一一三
 あは(粟) (品) 五
 あは粟 (圖) 七
 あは(安房) (所) 四〇
 あはしま(粟島) (所) 四一
 あはしまの (枕) 二〇九
 粟田女王メグミ (人) 四五
 粟田大夫オウヂ (人) 五九
 粟田娘子メグミ (人) 一四六
 あはぢ(淡路) (所) 四一
 あはぢしま (枕) 二〇九
 あはのこしま(粟小島) (所) 四一
 あばのぬ(阿婆乃野) (所) 四〇
 あはのやま(阿波乃山) (所) 四一

あはび(鰻) (品) 二三一
 あはび鰻 (圖) 二三一
 あはびたま(鰻珠) (品) 二三一
 あはを(安波乎) (所) 四〇
 あひづね(安比豆禰) (所) 四二
 あふさか(相坂) (所) 四三
 相坂山サカヤマ (所) 四三
 あふち棟 (品) 一〇一
 あふち棟 (圖) 一〇五
 あふみ(淡海)(近江) (所) 四二
 あふみあがた(淡海縣) (所) 四二
 近江大津宮ミヤ 御宇ミコト 天皇ミカド (人) 三
 近江天皇(天智) (人) 六
 淡海真人三船ミツフネ (人) 八七
 淡海三船ミツフネ (人) 八七
 あほひ(葵) (品) 五
 あほひ蜀葵、葵 (圖) 八
 あほやま(阿保山) (所) 四四

あへ(阿倍) (所) 四三
 あへしまやま(阿倍島山) (所) 四四
 あへたちばな(安倍橋) (品) 一〇二
 あへたちばな 阿倍橋 (圖) 一〇七
 阿倍朝臣老人オノノ (人) 七三
 安部朝臣奥道オキミ (人) 六二
 安倍朝臣子祖父コノオ (人) 六五
 安倍朝臣豊繼トヨツグ (人) 六〇
 安倍朝臣蟲麻呂ムシマロ (人) 五七
 阿部女郎メカ (人) 四二
 安倍奥道オキミ (人) 六二
 阿倍老人オノノ (人) 七三
 安倍子祖父コノオ (人) 六五
 安倍沙美麿朝臣サミヤ (人) 八一
 あへのしま 阿部の島 (所) 四三
 阿部繼人オノノ (人) 六四
 阿部繼麻呂オノノ (人) 六四
 安倍豊繼トヨツグ (人) 六〇

阿閉皇女アノヒ (人) 二一
 安丘廣庭オホノ 卿キミ (人) 五二
 安倍蟲麻呂ムシマロ (人) 五七
 高氏海人タカウヂ (人) 二二八
 白水郎荒雄アラウ (人) 二六一
 天數アメノカサ (枕) 二二四
 あまくもの (枕) 二二二
 あまごもり (枕) 二二三
 あまざかる (枕) 二二〇
 あまつたふ (枕) 二二〇
 あまつみづ (枕) 二二一
 あまとぶや (枕) 二二一
 海犬養宿禰岡麻呂ウミイヌノカミ (人) 二〇〇
 海犬養宿禰岡麻呂ウミイヌノカミ (枕) 二〇〇
 あまのがは(天河)(天川) (所) 四四
 あまのはら (枕) 二〇九
 尼理願ニリガン (人) 一五五

あまは(天羽) (所) 四五
あまをぶね (枕) 二二二
あみのうら(留鳥浦) (所) 四五
あめにます (枕) 二二四
あめのかぐやま(天香具山) (所) 四五
天の香具山 (所) 八二
あもりつく (枕) 二二四
あや(安益) (所) 四五
あやしきかめ(神龜) (品) 二三九
文忌寸馬養 (人) 二一五
文馬養 (人) 二一五
あやめぐさ(菖蒲)(蒲草) (品) 六
あやめぐさ 蒲草 (圖) 九
あゆ(鮎)(年魚) (品) 二二〇
あゆ 鮎 (圖) 二二二
あゆこ 鮎子 (品) 二二二
あゆち(年魚市) (所) 四五
あらかきの (枕) 二一九

あらかだ(荒城田) (所) 四五
あらかのをだ(荒木之小田) (所) 四五
あらたへの (枕) 二二五
あらたまの (枕) 二二七
あらたま(璞)(阿良多摩) (所) 四七
あらちやま(有乳山) (所) 四六
あらつ(荒津) (所) 四七
荒津の崎 (所) 四八
あらひきぬ (枕) 二一九
あらめ 荒布 (圖) 八四
あられ(安良禮) (所) 四六
あられうつ (枕) 二一五
あられなす (枕) 二一六
あられふり (枕) 二一六
あらぬのさき(荒蘭之崎) (所) 四六
荒雄 (人) 一六一
ありきぬの (枕) 二二〇
ありそなみ (枕) 二一九

ありそまつ (枕) 二二〇
ありそまつ(荒磯松) (品) 一六一
ありちがた (枕) 二二〇
ありちがた(在千方) (所) 四八
ありま(有間) (所) 四八
ありますげ (枕) 二二〇
ありますげ(在間菅) (品) 四二
有間皇子 (人) 一七
あれのさき(荒崎) (所) 四八
あわゆきの (枕) 二二二
あをうま(青馬) (品) 二一一
あをかぐやま(青香具山) (所) 四八
あをくもの (枕) 二二四
あをこま(青馬) (品) 二二二
あをな(蔓菁) (品) 七
あをな 蔓菁 (圖) 一〇
あをによし (枕) 二二二
あをねがたけ 青根が峯 (所) 四八

い部

あをねろ(安乎禰呂) (所) 四九
あをのうら(英遠浦) (所) 四九
あをはたの (枕) 二二五
あをみづら (枕) 二二六
あをみづら(青角髪) (所) 四九
あをやぎ(青柳) (品) 一六六
あをやぎの (枕) 二二四
あをやなぎ(青柳) (品) 一六六

いかこやま(伊香山) (所) 五〇
いかつち(雷) (所) 四九
雷山 (所) 四九
いかほ(伊香保) (所) 五〇
伊香保沼 (所) 五〇
いかるが(斑鳩) (品) 一七五
いかるが 斑鳩 (圖) 一七七
いかるが(斑鳩) (所) 五〇

軍王 (人) 二二
 生玉部足國 (人) 一三一
 いくぢ(活道) (所) 五一
 活道の岡 (所) 五一
 活道山 (所) 五一
 生部道磨 (人) 一三一
 いくりのもり(伊久里能母里) (所) 五〇
 いけかみ(池神) (所) 五一
 池田朝臣(眞枚) (人) 六五
 池田得大理 (人) 一三二
 池田日奉直得大理 (人) 一三二
 池田廣津娘子 (人) 一四八
 池田眞枚 (人) 六五
 池邊王 (人) 二九
 いこま(伊駒) (所) 五一
 伊駒の山 (所) 五一
 いざかは(率去河) (所) 五二
 いささむらたけ (品) 九六

いさた(鯨魚) (品) 二二二
 いさな鯨魚 (圖) 二二二
 いさなとり (枕) 二二七
 いざにはのをか(射狹庭乃崗) (所) 五二
 いざみのやま(去來見乃山) (所) 五二
 いさやがは (枕) 二二八
 いさやがは(不知哉川) (所) 五一
 いし(五十師) (所) 五三
 いしかは(石川) (所) 五二
 石川朝臣老夫 (人) 六一
 石川朝臣廣成 (人) 五七
 石川朝臣水通 (人) 七二
 石川朝臣水通 (人) 七二
 石川 郎女 (人) 一三九
 石川 郎女(山田郎女) (人) 一四一
 石川 郎女(大名兒) (人) 一四一
 石川 女郎(藤原宿奈磨朝臣之妻) (人) 一五三
 石川老夫 (人) 六一
 石川夫人 (人) 一四一

石川賀係女郎 (人) 一四八
 石河(君子)大夫 (人) 六三
 石河年足 (人) 六三
 石川年足 (人) 六七
 石川 命婦 (人) 一四四
 石川 廣成 (人) 五七
 石川 大夫(宮麻呂) (人) 四九
 石河 卿 (年足) (人) 三、六
 石川 水通 (人) 七二
 石川宮麻呂 (人) 四九
 五十師の原 (所) 五三
 いしむ(伊思井) (所) 五三
 いせ(伊勢) (所) 五三
 いそかひの (枕) 二二九
 いそさき(磯崎) (所) 五四
 いそつゝじ 磯跡躰 (品) 一四二
 いそのかみ (枕) 二二八

いそのかみ(石上) (所) 五四
 石上朝臣宅嗣 (人) 七八
 石上宅嗣 (人) 七八
 石上乙麻呂 (人) 五一
 石上 大 臣(麻呂) (人) 四九
 石上 堅魚朝臣 (人) 六一
 石上 卿 (乙麻呂) (人) 五一
 石上麻呂 (人) 四九
 いそさき(磯前) (所) 五四
 いそへのやま(石邊山) (所) 五五
 いそまのうら(伊素末乃宇良) (所) 五五
 いそまつ 磯松 (品) 一六一
 いそまつの (枕) 二二九
 いち(伊知) (所) 五五
 いちかし (圖) 一〇九
 いちし(壹師) (品) 八
 いちし 壹師 (圖) 一一
 いちはら(市原) (所) 五五

市原王 (人) 二七
 市原王 獨子(五百井女王) (人) 四四
 いちひ櫟 (品) 一〇六
 いちひ櫟 (圖) 一〇九
 いちひづ(櫟津) (所) 五五
 いづ(伊豆) (所) 五六
 いつき(五十槻) (品) 一四六
 伊豆の高嶺 (所) 五六
 いつはたのさか(伊都波多野佐加) (所) 五六
 いづみ(泉) (所) 五五
 泉川 (所) 五六
 いつも 五十藻 (品) 八四
 いづも(出雲) (所) 五六
 いつもとやなぎ (品) 一六七
 出雲娘子 (人) 一四三
 いでみのはま(出見濱) (所) 五七
 かと(怡土) (所) 五七
 いとかのやま(絲鹿乃山) (所) 五七

いなさほそえ(伊奈佐保會江) (所) 五八
 いなのめの (枕) 二三〇
 いなは(因幡) (所) 五八
 いなび(稻日) (所) 五七
 荒氏稻布 (人) 一二六
 いなみ(伊奈美)(印南) (所) 五七
 印南野 (所) 五八
 伊奈美の國 (所) 五八
 いなむしろ (枕) 二二九
 いならぬま(伊奈良能努麻) (所) 五七
 いには(印波)印幡 (所) 五八
 いぬ(犬) (品) 二〇八
 いぬ犬 (圖) 二一一
 いぬかみ(狗上)犬上 (所) 五八
 いぬじもの (枕) 二三一
 いね(稻) (品) 一九
 いね稻 (圖) 一二
 いはきやま(磐城山) (所) 五九

いはくえの (枕) 二三五
 いはくにやま(磐國山)(石國山) (所) 六〇
 いはくらのをぬ(石倉之小野) (所) 五九
 いはしろ(磐代)(磐白) (所) 五九
 磐代野 (所) 五九
 磐白の濱 (所) 五九
 磐代の岡 (所) 五九
 いはせぬ(石瀬野) 磐瀬野 (所) 六〇
 いはせのもり(磐瀬乃杜) (所) 六〇
 いはた(石田) (所) 六一
 いはたぬ(伊波多野) (所) 六一
 石田王 (人) 二七
 石田の杜 (所) 六一
 いはつな(石綱) (品) 五三
 いはつなの (枕) 二三四
 いはぬづら (品) 一一
 磐姫 皇后 (人) 一二
 いはばしの (枕) 二二三

いはばしる (枕) 二三二
 いはひしま(伊波比之麻) (所) 六一
 いはひつき(齋槻) (品) 一四五
 いはふちの (枕) 二三四
 いはほすげ (枕) 二三四
 いはほなす (枕) 二三四
 いはほろのそひ(伊波保呂乃蘇比) (所) 六二
 いはみ(石見) (所) 五九
 いはゆ(石湯) (所) 六一
 いはれ(磐余) (所) 六〇
 磐余の池 (所) 六一
 磐余伊美吉諸君 (人) 二一七
 磐余諸君 (人) 二一七
 いはぬづら (枕) 二三四
 いはぬづら (圖) 一三
 庵君諸立 (人) 一二二
 いへしま(家嶋) (所) 六二
 いへつとり (枕) 二三五

いへつとり(家鳥) (品)二七九
いへつとり家つ鳥 (圖)一八二
いへのしま(家乃島) (所)六二
いほさき(廬前) (所)六二
いほはら(廬原) (枕)二三五
いほへなみ (人)一二九
伊保麻呂 (人)一二二
伊保麻呂 (人)四四
庵諸立 (人)二八
五百井女王 (所)六二
いまき(今木)(今城) (人)一三四
今城王 (人)二八
今奉部與會布 (所)六三
いみづかは(射水河) (人)一一四
忌部首黑磨 (人)一一四
忌部黑磨 (所)六三
いむたね(伊牟多禰) (枕)二三五
いめたちて (所)六三
いめのわだ(夢乃和太) (所)六三

いめひとの (枕)二三六
いもがいに (枕)二三六
いもがかど (枕)二三八
いもがかみ (枕)二三八
いもがける (枕)二三六
いもがしま(妹之島) (所)六四
いもがそて (枕)二三七
いもがひも (枕)二三八
いもがてを (枕)二三八
いもがめを (枕)二三七
いもがりと (枕)二三九
妹背之山 (所)一五二
いものやま(妹之山)(妹乃山) (所)六四
いもやま(妹山) (所)六四
いやひこ(伊夜彦) 彌彦 (所)六五
いゆきあひの (枕)二四〇
いゆししの (枕)二四〇
いよ(伊與)(伊豫) (所)六五

伊豫の高嶺 (所)六六
伊豫湯 (所)六五
いらごがしま(伊等籠荷四間)(伊良虞能島) (所)六六
いらごのしま(五十等兒乃島) (所)六六
いりぬ(入野) (所)六七
いりぬ(伊利野)上野國多胡郡 (所)六七
いりひなす (枕)二四〇
いりま(伊利麻)入間 (所)六七

う 部

う(鶺鴒) (品)二七五
う鶺鴒 (圖)二七八
うかねらふ (枕)二四一
遊行女婦土師 (人)一五〇
うきくさ(浮艸)萍 (品)一一
うきくさ萍、蕨 (圖)一四
うきくさの (枕)二四一
うきたのもり(浮田之杜) (所)六七

うきぬのいけ(浮沼池) (所)六八
うぐひす(盟) (品)一七七
うぐひす盟、鶯 (圖)一七九
うぐひすの (枕)二四一
うけら 朧 (品)一一
うけら朧 (圖)一五
うさかがは(鷗坂河) (所)六八
うし(牛) (品)二〇九
うし牛 (圖)二二二
うしまど(牛窓) (所)六八
うすひ(宇須比) 碓氷 (所)六八
うすらひの (枕)二四一
うだ(宇陀) (所)六八
宇陀野 (所)六八
うち(兔道)(宇治) (所)六九
打上 (枕)二四二
うちえする (枕)二四二
宇治川 (所)六九

うちたをり (枕)二四四
 うちなびく (枕)二四一
 うちのおほぬ(内乃大野) (所)六八
 内藏忌寸繩磨 (人)一一六
 内藏繩磨 (人)一一六
 うちのぬ(内野) (所)六八
 打上 (枕)二四二
 宇治若郎子皇子 (人)一〇
 宇治の波 (所)六九
 うちひさす (枕)二四四
 うちひさつ (枕)二四四
 宇遅部黒女 (人)一五二
 うちまやま(宇治間山) (所)六九
 うちよする (枕)二四二
 うつ木 (圖)一一一
 うつせがひ (枕)二四八
 うつせかひ 空石花貝 (品)二四六
 うつせみの (枕)二四六

うつそやし (枕)二四五
 うつそを (枕)二四五
 うつゆふの (枕)二四六
 うづら(鶉) (品)一七七
 うづら鶉 (圖)一八〇
 うづらなき (枕)二四八
 うづらなく (枕)二四八
 うづらなす (枕)二四九
 うど(宇度) (所)六九
 有度部牛磨 (人)一三一
 うなかみ(海上) (所)七〇
 海上女王 (人)四三
 うなてのもり(卯名手之杜) (所)七一
 うなひ菟原(宇名比攝津國兔原郡) (所)七〇
 うなひ(宇奈比)武藏國 (所)七〇
 うなひがは(宇奈比河波) (所)七〇
 宇努男人 (人)一一四
 宇努首男人 (人)一一四

うねび(畝火) (所)七一
 宇彌日の宮 (所)七一
 畝火の山 (所)七一
 采女安見兒 (人)一三九
 うのはな 卯花 (品)一〇九
 うのはな 卯花 (圖)一一一
 うのはなの (枕)二四九
 うはぎ(菟芽子) (品)一三三
 うはぎ 菟芽子 (圖)一六
 うばら(棘原) 薔薇 (品)一四
 うばら 薔薇 (圖)一七
 うばらぎ(茨城) (所)七一
 うへかたやま(宇敞可多山) (所)七一
 上宮 聖徳皇子 (人)九
 うま(馬) (品)二一〇
 うま馬 (圖)二二三
 うまぐたのねろ(宇麻具多能彌呂) (所)七二
 うまこり (枕)二五二

うまさけ (枕)二四九
 うまさけの (枕)二四九
 うまさけを (枕)二四九
 味澤相 (枕)二五一
 うましもの (枕)二五三
 うまじもの (枕)二五三
 うませ(馬柵) (品)二一四
 馬國人 (人)一一一
 うまのつめ (枕)二五三
 馬史國人 (人)一一一
 田氏肥人 (人)一二七
 うまや(厩) (品)二一四
 うまら(棘原) 薔薇 (品)一四
 うまら 薔薇 (圖)一七
 うみをなす (枕)二五四
 うめ(梅) (品)一〇八
 うめ梅 (圖)一一〇
 うも芋 (品)一四

うも 芋

うもれきの

占部 廣方

占部 蟲磨

うらぬのやま(宇良野乃夜麻)

占部 小龍

うり 瓜

うり 瓜

うるやがは(潤八川)

うるわかは(潤和川)

うれつむはな(末摘花)

うゑつき(殖槻)

え 部

え(榎)

え 榎

恵行

えなつ(得名津)

(圖) 一八

(枕) 二五四

(人) 一三四

(人) 一三六

(所) 七二

(人) 一三四

(品) 一五

(圖) 一九

(所) 七二

(所) 七二

(品) 三〇

(所) 七三

(品) 一一〇

(圖) 一一二

(人) 一五四

(所) 七三

榎井王

えはら(荏原)

縁達師

お 部

おう(餓字)(於宇)

於宇の浦

阿氏奥島

置始 東人

置始 長谷

置始 連長谷

おきそやま(奥十山)(奥磯山)

おきつしまやま(奥島山)(奥津島山)

おきつとり

おきつとり(奥鳥)

おきつなみ

おきつまかも(奥鴨)

(人) 三〇一

(所) 七三

(人) 一五四

(所) 七三

(所) 七三

(人) 二二六

(人) 二〇七

(人) 一一〇

(人) 一一〇

(所) 七四

(所) 七四

(枕) 二五五

(品) 一八一

(枕) 二五四

(品) 一八一

おきつもの(奥藻)

おきつもの

おきな(置勿)

おきなが(息長)

息長川

息長 國島

息長 眞人 國島

おきにすむ

おくやまの

憶良大夫之男

忍坂王

おさかのやま(忍坂山)

刑部 直千國

刑部 直三野

忍坂部 乙麻呂

刑部 志加磨

刑部 垂麻呂

刑部 千國

(品) 八三

(枕) 二五四

(所) 七四

(所) 七四

(所) 七四

(人) 八六

(人) 八六

(枕) 二五五

(枕) 二五六

(人) 一一七

(人) 三三三

(所) 七五

(人) 一二二

(人) 一二二

(人) 一二二

(人) 一三六

(人) 一二二

(人) 一二二

忍壁皇子

刑部三野

刑部 蟲磨

おしたるをぬ(押垂小野)

おしてる

おしてるみや(於之豆流宮)

おしてるや

忍海部五百磨

おちたぎつ

故太政大臣(淡海公、不比等)

生石村主眞人

生石眞人

大海人皇子

大網 公人主

大網 人主

おほあらし(大荒木)

大石 養磨

おほうら(大浦)

(人) 一九

(人) 一二二

(人) 一二二

(所) 七五

(枕) 二五六

(所) 七五

(枕) 二五六

(人) 一三六

(枕) 二五七

(人) 一五四

(人) 一一九

(人) 一一九

(人) 三

(人) 一二二

(人) 一二二

(所) 七七

(人) 一三〇

(所) 七五

おほえのやま(大江乃山) (所) 七八
 太后(天智帝皇后) (人) 一一
 太上天皇(持統) (人) 五
 太上天皇(元正) (人) 六
 おほきのやま(大城乃山) (所) 七九
 大判官(壬生使主宇太磨) (人) 二二〇
 おほきみの (枕) 二六三
 おほくちの (枕) 二六三
 大伯皇女 (人) 二二二
 おほくらのいりえ(巨椋乃入江) (所) 八〇
 大藏麻呂 (人) 二一六
 おほとりの (枕) 二六一
 おほさか(大坂)大和國葛上郡 (所) 七九
 おほさき(大崎) (所) 七六
 おほしま(大島) (所) 七九
 おほしまのね(大島嶺) (所) 八〇
 おほすみ(大隅) (所) 八〇
 おほたぎ(大瀧) (所) 七九

大田部荒耳 (人) 一三四
 大田部足人 (人) 一三六
 大田部三成 (人) 一三五
 呂知王 (人) 三六
 おほつ(大津) (所) 七五、二四
 大津皇子 (人) 一六
 大津の宮 (所) 七五
 大舍人部千文 (人) 一三四
 大舍人部禰麿 (人) 一三五
 おほともの (枕) 二五八
 大伴東人 (人) 二〇一
 大伴稻公 (人) 九九
 大伴郎女(今城王之母) (人) 二四四
 大伴郎女(旅人之妻) (人) 二四八
 大伴牛養 (人) 一〇三
 大伴像見 (人) 九九
 大伴君熊凝 (人) 一一二
 大伴清繼 (人) 一〇五

大伴清繼 (人) 一〇二
 大伴熊凝 (人) 一一二
 大伴黒麻呂 (人) 一〇五
 大伴古慈悲 (人) 一〇四
 大伴胡麻呂 (人) 一〇五
 大伴坂上郎女 (人) 一四二
 大伴宿奈麻呂 (人) 九一
 大伴宿禰東人 (人) 一〇一
 大伴宿禰稻公 (人) 九九
 大伴宿禰牛養 (人) 一〇三
 大伴宿禰像見 (人) 九九
 大伴宿禰清繼 (人) 一〇五
 大伴宿禰黒麻呂 (人) 一〇五
 大伴宿禰宿奈麻呂 (人) 九一
 大伴宿禰駿河麻呂 (人) 九七
 大伴宿禰田主 (人) 九〇
 大伴宿禰千室 (人) 九九
 大伴宿禰書持 (人) 九八

大伴宿禰三中 (人) 九七
 大伴宿禰三依 (人) 九八
 大伴宿禰村上 (人) 一〇二
 大伴宿禰百代 (人) 九四
 大伴宿禰家持 (人) 九四
 大伴宿禰家持亡妾 (人) 一四四
 大伴駿河麻呂 (人) 九七
 大伴田主 (人) 九〇
 大伴(旅人)卿 (人) 九一
 大伴道足宿禰 (人) 一〇〇
 大伴千室 (人) 九九
 大伴書持 (人) 九八
 大伴眞足女 (人) 一五二
 大伴三中 (人) 九七
 大伴(御行)卿 (人) 一〇三
 大伴三依 (人) 九八
 大伴村上 (人) 一〇二
 大伴百代 (人) 九四

大伴家持オホトモノヤカモチ (人) 九四
 大伴家持亡妾オホトモノヤカモチガメカレルメ (人) 一四四
 大伴(安麻呂)宿禰オホトモノヤスマノロノスクネ (人) 九〇
 大伴四繩オホトモノヨツナ (人) 九四
 大伴部子羊オホトモノベゴヒヨウ (人) 一三六
 大伴部廣成オホトモノヒロナリ (人) 一三五
 大伴部節曆オホトモノフシヨロ (人) 一三七
 大伴部眞與佐オホトモノマヨサ (人) 一三六
 大伴部少歳オホトモノベノトシ (人) 一三七
 おほとり(大鳥) (品) 一七八
 おほとり 大鳥 (圖) 一八一
 おほぬ(大野) 越中國礪波郡 (所) 七五
 おほぬ(大野) 筑前國御笠郡 (所) 七六
 大野川オホヌカハ (所) 七六
 おほぬがはら(大野川原) (所) 七六
 太朝臣德太理オホノツミトコタリ (人) 七二
 おほのうら(大乃浦) (所) 七九
 太德太理オホトコタリ (人) 七二

おほはら(大原) (所) 七七
 史氏大原オホハラ (人) 一二六
 大原今城オホハラノイマキ (人) 八五
 大原 櫻井真人オホハラノサクラ井ノマヒト (人) 八八
 大原 高安オホハラノタカヤス (人) 八八
 大原真人今城オホハラノマヒトイマキ (人) 八五
 大原真人高安オホハラノマヒトタカヤス (人) 八五
 おほぶねの (枕) 二六二
 おほはやま(大葉山) (所) 七八
 志氏大道オホムチ (人) 一二七
 おほみま(大御馬) (品) 二二三
 大神朝臣奥守オホムシノイラツノ (人) 六五
 大神 女郎オホムシノメウラツノ (人) 二四五
 大神 奥守オホムシノオキモリ (人) 六五
 大神高市麻呂オホムシノタカキマロ (人) 六三
 大神 大夫(高市麻呂) (人) 六三
 おほやがはら(於保屋我波良) (所) 七六
 大宅女オホヤケノメ (人) 二四六

おほやぬ(大家野) (所) 七七
 おほやま(大山) (所) 七九
 おほやまと(大日本) (所) 七七
 大倭オホヤマト (人) 二二九
 おほゆきの (枕) 二六三
 おほわだのはま(大和太乃濱) (所) 七八
 おほゐぐさ (枕) 二五八
 おほゐぐさ 大蘭草 (品) 一七
 おほゐぐさ 大蘭草 (圖) 二一
 おほをそどり 大虚言鳥 (品) 一八二
 大炊王オホクヒノミコ (人) 一〇
 おみのき(巨木) (品) 一一〇
 おみのき 樅 (圖) 一一三
 おもひぐさ(思花)(思草) (品) 一五
 おもひぐさ 思草 (圖) 二〇
 高氏老オホウヂノラ (人) 二二八

か 部

か(鹿) (品) 二二四
 か鹿 (圖) 二二四
 かいつぶり (品) 一九九
 孝謙天皇カウケンテンノウ (人) 七
 がうな (圖) 二四七
 かえ(加曳) (所) 八一
 かが(加賀) (所) 八一
 かがみなす (枕) 二六四
 鏡女王カガメノメノキミ (人) 四二
 かがみのやま(鏡山)山城國宇治郡 (所) 八一
 かがみのやま(鏡山)豊前國田河郡 (所) 八一
 かがみやま(鏡山)豊前國田河郡 (所) 八一
 かがろひの (枕) 二六五
 かきかぞふ (枕) 二六四
 かきこゆる (枕) 二六四
 かきつばた (枕) 二六五
 かきつばた 杜若 (品) 一八
 かきつばた 杜若 (圖) 二二

かきつやぎ 垣つ柳 (品) 一一一
 かきつやぎ 垣つ柳 (圖) 一一四
 柿本朝臣人麻呂 (人) 四九
 かぐやま(香具山)(香山) (所) 八一
 香來山の宮 (所) 八二
 かけ(鶏) (品) 一七八
 かけ 鶏 (圖) 一八二
 かけのみなと(可家能水奈刀) (所) 八三
 かけやま(可雞夜麻) (所) 八三
 かこ(鹿兒) (品) 二一六
 かこじもの (枕) 二六七
 かこのしま(可古能島) (所) 八三
 かさしま(笠島) (所) 八五
 笠縫 女王 (人) 四五
 かさぬひのしま(笠縫之島) (所) 八四
 笠朝臣金村 (人) 五四
 笠朝臣子君 (人) 七二
 笠女郎 (人) 一四三

笠金村 (人) 五四
 笠子君 (人) 七二
 笠沙彌 (人) 二二六
 かさのやま(笠乃山) (所) 八四
 かざはや(風早) (所) 八四
 かざはやのうら(風早能宇良) (所) 八四
 かし(樞) (品) 二二〇
 かし 樞 (圖) 二二三
 かしこのさか(恐乃坂) (所) 八七
 かしひのかた(香椎瀧) (所) 八六
 かしのみの (枕) 二六七
 かしは(柏) (品) 二一四
 かしは 柏 (圖) 二一九
 膳部 王 (人) 二八
 かしはら(樞原) (所) 八七
 かしひがた(香椎瀧) (所) 八六
 かしふえ(可之布江) (所) 八七
 かしま(香島)能登國能登郡 (所) 八五

かしま(鹿島)富陸國鹿島郡 (所) 八五
 かしま(鹿島)紀伊國日高郡 (所) 八六
 香嶋嶺 (所) 八五
 鹿嶋の崎 (所) 八六
 かすが(春日) (所) 八八
 春日野 (所) 八八
 春日王 (人) 二六
 春日老 (人) 二二二
 春日藏首老 (人) 二二二
 春日部麿 (人) 一三二
 春日山 (所) 八八
 かすみたつ (枕) 二六八
 かすや(萍屋) (所) 八九
 かぜのとの (枕) 二六八
 かぜのやま(鹿脊之山) (所) 八九
 かせやま(鹿脊山) (所) 八九
 かだ(可太) (所) 九〇
 かたかこ(堅香子) (品) 一九

かたかこ 堅香子 (圖) 二三
 かたかひがは(可多加比河波) (所) 九〇
 かたかひのかは(可多加比河波) (所) 九〇
 かたすはがは(片足羽河) (所) 九〇
 かたみのうら(形見之浦) (所) 九一
 かたもひの (枕) 二六八
 かたをか(片岡) (所) 九〇
 かぢ 梶 (圖) 一三七
 かぢしま(梶島) (所) 九一
 かぢぬ(勝野) (所) 九一
 勝野の原 (所) 九一
 かちのおとの (枕) 二六九
 かづしか(勝鹿) (所) 九一
 かづのき (品) 二一九
 かづのき (圖) 二二一
 かづのきの (枕) 二六九
 かつまたのいけ(勝間田之池) (所) 九二
 かつみ(勝見) (品) 二〇

蒲生娘子 カマフイラツ (人)一五〇
 かまめ 鴨 (品)一八〇
 かまめ 鴨 (圖)一八四
 神社忌寸老麻呂 カミコノイキユヤ (人)一一五
 神社老麻呂 カミコノオヤ (人)一一五
 かみしま(神島) (所)九五
 かみたかはぬ(上小竹葉野) (所)九九
 かみつけぬ(可美都家野)(上野) (所)九八
 上毛野牛甘 カミツケウシカビ (人)二三七
 上毛野君駿河 カミツケノキミスルガ (人)一一三
 上毛野駿河 カミツケノスルガ (人)一一三
 かみつけの(可美都家野)(上野) (所)九八
 かみつふさ(上総)(上總) (所)九九
 かみのかぐやま (所)八三
 かみのさき(神之崎) (所)九六
 上古麻呂 カミノマロ (人)一一九
 かみのわたり(神之渡) (所)九六
 かみのをはま(神之小濱) (所)九八

かみやま(神山) 大和國城上郡 (所)九六
 かみやま(神山) 出雲國神門郡 (所)九六
 かみをかのやま(神岳之山) (所)九六
 かむかせの 巫部麻蘇娘子 カミカセノ (枕)二七〇
 巫部麻蘇娘子 カミカセノ (人)一四六
 かむしだ(可牟思太) (所)一〇〇
 かむすぎ(神杉) (品)一三〇
 神人部子忍男 カミトブコオシラ (人)一三七
 かむなび(神南備)(神奈備) (所)一〇〇
 甘南備伊香真人 カミナベノイカマヒト (人)八八
 神麻績部島麿 カミツネノシマ (人)一三五
 かめ(龜) (品)二三九
 かめ龜 (圖)二三四
 かも 鴨 (品)一八〇
 かも 鴨 (圖)一八五
 かもがは(鴨川) (所)一〇一
 かもしもの 賀茂女王 カモオホキミ (枕)二七三
 賀茂女王 カモオホキミ (人)四三

鴨 君足人 カモノキミタリヒト (人)一二二
 鴨 足人 カモノタリヒト (人)一二二
 かもやま(鴨山) (所)一〇一
 かや(萱)(草) (品)二四
 かや 萱 (圖)二六
 かや 柏 (圖)一八
 かやのやま(可也能山) (所)二〇二
 から(韓)(可良) (所)二〇二
 からかぢの (枕)二七三
 からくに(韓國) (所)一〇三
 からころも (枕)二七四
 からさき(辛崎)(韓崎) (所)一〇三
 からす(鳥) (品)一八二
 からす 鳥 (圖)一八六
 からす 鳥扇 カラスアヲ (圖)六四
 からたち(枳) (品)一八
 からたち 枳 (圖)二二〇
 からのさき(辛乃崎) (所)一〇三

からにのしま(辛荷乃島) (所)二〇二
 韓の浦 カラス (所)二〇二
 からゐ(韓藍)(雞冠草) (品)二五
 からゐ 韓藍 (圖)二八
 かり(鷹) (品)一八三
 かり 鷹 (圖)一八七
 かりがねの (枕)二七五
 かりこもの (枕)二七四
 かりしま(借島) (所)一〇五
 かりたか(借高) (所)一〇四
 借高の野 カケカ (所)一〇四
 かりぢ(獵路) (所)一〇四
 獵道の池 カケチ (所)一〇四
 かりのこ(鷹乃兒) (品)一八四
 かりはのをぬ(鷹羽之小野) (所)一〇四
 かる(輕) (所)一〇五
 かるぬのはし(刈野橋) (所)一〇五
 輕の池 カスミ (所)一〇五

輕の市
輕皇子(文武天皇)
甘南備河
神奈備山

き部

き(木)(紀伊) (所)一〇五
きぎし(雉)(鳩) (品)一八六
きぎし雉 (圖)一八八
きく(聞)(企玖) (所)一〇六
企玖の池 (所)一〇六
聞の濱 (所)一〇六
きこく(楨殼) (圖)一二〇
きさ(象) (所)一〇六
私部石島 (人)一三五
象山 (所)一〇六
きしみがたけ(吉志美我高嶺) (所)一〇七
きつ(狐) (品)二一八

(所)一〇五
(人)一四
(所)一〇一
(所)一〇一

きつ狐 (圖)二一五
絹 (人)二二八
紀朝臣鹿人 (人)五九
紀朝臣清人 (人)六八
紀朝臣豐河 (人)六一
紀朝臣男棍 (人)六八
紀飯麻呂朝臣 (火)七三
紀女郎 (人)一四五
木の川 (所)一〇六
紀鹿人 (人)五九
きのき(記夷城) (所)一〇七
紀清人 (人)六七
紀豐河 (人)六一
紀皇女 (人)二二
きのへ(城上) (所)一〇七
城上の宮 (所)一〇七
紀卿 (人)五九
きのやま(城山) (所)一〇七

紀男棍 (人)六八
きはつくのをか(伎波都久乃乎加) (所)一〇八
きび黍 (品)二七
きび黍 (圖)二九
きび(吉備) (所)一〇八
きびのこしま(吉備乃兒島) (所)一〇八
きびのさけ(吉備の酒) (品)二七
きびのみちのしりのくに(備後國) (所)一〇八
きへ(寸戸)(伎倍) (所)一〇九
きみ黍 (品)二七
きみがいへに (枕)二七六
きみがける (枕)二七六
きもむかふ (枕)二七六
きよすみのいけ(清隅之池) (所)一一〇
きよみ(淨)(清) (所)一〇九
清見河 (所)一〇九
きよみのさき(清見之崎) (所)一〇九

きよみはらのみや(清見原乃宮) (所)一〇九
きり(梧桐) (品)二二一
きり梧桐 (圖)二二四
きりめやま(殺目山) (所)一一〇
くが(玖珂) (所)一一〇
くくたち(九久多知) (品)八
くくみら菴 (品)二七
くくみら (圖)三〇
くくりのみや(八十一隣之宮) (所)一一〇
くさか(草香) (所)一一〇
草香江 (所)一一一
くさかげの (枕)二七七
日下部使主三中 (人)一一〇
日下部使主三中父 (人)一一〇
草壁皇子 (人)八
日下部三中 (人)一一〇

日下部三申父 (人) 一二〇
 くさまくら (枕) 二七七
 くじがは(久自我波) 久慈川 (所) 一一一
 くしろまく (枕) 二七八
 くす(葛)(真葛) (品) 二
 くす葛 (圖) 三一
 くすのねの (枕) 二七九
 くすはがた(久受葉我多) (所) 一一一
 くせ(久世) (所) 一一一
 久世清川原 (所) 一一一
 來背社 (所) 一一一
 くそかづら(屎葛) (品) 二九
 くそかづら 屎葛 (圖) 三二
 くそふな(屎耐) (品) 二二九
 くだみやま(朽網山) (所) 一一二
 くだら(百濟) (所) 一一一
 百濟野 (所) 一一二
 百濟原 (所) 一一二

くにのみやこ(久邇乃京) (所) 一一二
 くは(桑) (品) 一二二
 くは桑 (圖) 一二六
 くはこ(桑子) 蠶 (品) 二二九
 くはこ 桑子 (圖) 二三五
 くひやま(咋山) (所) 一一三
 くま(熊) (品) 二一八
 くま熊 (圖) 二一六
 くまき(熊來) (所) 一一三
 くまけのうら(熊毛浦) (所) 一一三
 くまぬ(熊野) (所) 一一三
 久米朝臣繼麻呂 (人) 七二
 久米朝臣廣繩 (人) 七二
 久米女郎 (人) 二四七
 久米女王 (人) 四五
 久米禪師 (人) 二二三
 久米繼麻呂 (人) 七二
 久米廣繩 (人) 七二

くも 蜘蛛 (品) 二四〇
 くも 蜘蛛 (圖) 二三六
 くもりよの (枕) 二七九
 くもゐなす (枕) 二七九
 くらが(久良我) (所) 一一五
 桜作村主益人 (人) 一一九
 桜作益人 (人) 一一九
 くらなしのはま(倉無之濱) (所) 一一四
 くらはし(倉椅)(倉橋) (所) 一一四
 倉椅川 (所) 一一四
 倉橋の山 (所) 一一四
 椋椅部弟女 (人) 一五二
 倉橋部女王 (人) 四三
 椋椅部刀自賣 (人) 一五二
 椋椅部荒蟲之妻宇遲部黒女 (人) 一五二
 藏部女 (人) 一四九
 くり栗 (品) 一二一
 くり栗 (圖) 一二五

くるすのをぬ(栗栖乃小野) (所) 一一五
 車持氏娘子 (人) 一五〇
 車持朝臣千年 (人) 五九
 車持千年 (人) 五九
 くれなる(紅)(吳藍) (品) 二九
 くれなる紅 (圖) 三三
 くれなるの (枕) 二八〇
 くれのさと(伎人郷) (所) 一一五
 くろうし(黒牛) (所) 一一六
 くろかみやま(玄髮山)(黒髮山) (所) 一一五
 くろこま(黒駒) (品) 二二二
 くろほのねろ(久路保乃禰呂) (所) 一一六
 くろま(黒馬) (品) 二二一
 皇極天皇 (人) 二
 光明皇后 (人) 一三
 元興寺之僧 (人) 一五四

け部

雞頭花 (圖) 二八
 けころもを (枕) 二八〇
 けひのうみ(飼飯海) (所) 一一六
 けひのうら(飼飯乃浦) (所) 一一七
 けふけふと (枕) 二八一
 玄勝 (人) 一五四
 けもも(毛桃) (品) 一六五
 元正天皇 (人) 六
 元明天皇 (人) 五

こ部

こ(蠶) (品) 二四〇
 こ蠶 (圖) 二三五
 かが(許我) (所) 一一七
 こかたのうみ(子難漕)(粉瀧乃海) (所) 一一七
 許我の渡 (所) 一一七
 こけ(蘿)(薜)(苔) (品) 三〇
 こけ蘿 (圖) 三四

こし(越) (所) 一一八
 碁師 (人) 一二九
 越路 (所) 一一八
 越海 (所) 一一八
 越の大山 (所) 一一八
 こしのなか(古思能奈可) (所) 一一八
 越邊 (所) 一一八
 兒島 (人) 一四七
 こしま(兒島)吉備 (所) 一一九
 こしま(子島)紀伊國名草郡 (所) 一一九
 こしま(小島)紀伊國牟婁郡 (所) 一一九
 こしま(小島) (所) 一一九
 こすげ(小菅) (品) 四一
 こすげのうら(古須氣呂乃宇良) (所) 一一九
 こせ(巨勢) (所) 一一〇
 巨勢路 (所) 一一〇
 巨勢野 (所) 一一〇

巨勢朝臣豊人 (人) 六六
 巨勢朝臣奈底麻呂 (人) 六八
 巨勢郎女 (人) 一三九
 巨勢宿奈麻呂朝臣 (人) 六〇
 巨勢豊人 (人) 六六
 巨勢奈底麻呂 (人) 六八
 巨勢斐太朝臣 (人) 六六
 巨勢山 (所) 一一〇
 こそ(許會) (所) 一一〇
 巨曾倍對馬朝臣 (人) 六〇
 こつき(小槻) (品) 一四六
 ことさへく (枕) 二八一
 ことひうし(牡牛) (品) 二〇九
 ことひうしの (枕) 二八二
 こなき(子水葱) (品) 五九
 こなのしらね(故奈乃思良禰) (所) 一二〇
 こなら小櫛 (品) 一四八
 こぬみのはま(許奴美乃濱) (所) 一二一

このくれの (枕) 二八三
 このしろ(鯛) (品) 二二八
 このしろ (圖) 二二七
 碁檀越 (人) 一二五
 このてかしは(兒手柏) (品) 一二二
 このてかしは 兒手柏 (圖) 一二七
 こば(古婆) (所) 一一一
 こはたのやま(強田山)(木幡山) (所) 一一一
 こばま(粉塗) (所) 一一一
 佐氏子首 (人) 一二六
 こひわすれがひ(戀忘貝) (品) 二五二
 こひわすれぐさ(戀忘草) (品) 八九
 こふのはら(子負原) (所) 一一一
 子部王 (人) 三三二
 兒部女王 (人) 四五
 こほろぎ(蟋蟀) (品) 二四一
 こほろぎ 蟋蟀 (圖) 二三七
 こま(駒) (品) 二二二

こま(狛)(高麗) (所) 一二二
 こましま(狛島) (所) 一二三
 こまつ(小松) (品) 一六〇
 こまつるぎ (枕) 二八三
 高麗朝臣福信 (人) 七五
 高麗福信 (人) 七五
 こまやま(狛山) (所) 一二二
 金明軍 (人) 一二五
 こも(薦) (品) 三一
 こも菰 (圖) 三五
 こも鴨 (品) 一八二
 こも鴨 (圖) 一八五
 こもたたみ (枕) 二八六
 こもちやま(兒毛知夜麻) (所) 一二三
 こもまくら (枕) 二八五
 こもりくの (枕) 二八四
 こもりぬの (枕) 二八五
 ころがてを (枕) 二八七

ころもて (枕) 二八七
 ころもての (枕) 二八八
 ころもてを (枕) 二九〇
 さ部
 齊明天皇 (人) 六
 さうま(相馬) (所) 一二四
 さかき(賢木) (品) 一二五
 さかき賢木 (圖) 一二九
 さかたのはし(坂田乃橋) (所) 一二四
 坂田部首磨 (人) 一三三
 さかて(坂手) (所) 一二四
 尺度氏娘子 (人) 一五〇
 坂門人足 (人) 一二三
 さかとり (枕) 二九二
 さかのへ(坂上) (所) 一二四
 坂上家之二嬢 (人) 一四三
 坂上家之大嬢 (人) 一四三

坂上忌寸人長 (人) 一一五
 坂上人長 (人) 一一五
 酒人女王 (人) 四四
 境部王 (人) 三五
 境部老鷹 (人) 一〇三
 境部宿禰老鷹 (人) 一〇三
 さがむ(相模) (所) 一二五
 相模嶺 (所) 一二五
 坂本朝臣人上 (人) 七九
 坂本人上 (人) 七九
 さがらやま(相樂山) (所) 一二四
 さき(咲)(佐紀) (所) 一二五
 さきくさ(三枝) (品) 三二
 さきくさ三枝 (圖) 三六
 さきくさの (枕) 二九三
 張子福子 (人) 一四七
 さぎさか(鷺坂) (所) 一二六
 咲澤 (所) 一二五

さきたがは(辟田河)(左伎多河) (所) 一二五
 さきだけの (枕) 二九二
 さきたのかは(辟田河)(左伎多河) (所) 一二五
 さきたま(前玉) 埼玉 (所) 一二六
 咲野 (所) 一二五
 咲沼 (所) 一二五
 鷺尻刺 (圖) 四一
 佐紀の宮 (所) 一二五
 さきはぎ(先芽) (品) 六九
 佐紀山 (所) 一二五
 さくはなの (枕) 二九三
 さくら(櫻) (品) 一二三
 さくら櫻 (圖) 一二八
 さくらあさ(櫻麻) (品) 二
 さくらあさ櫻麻 (圖) 四
 さくらだ(櫻田) (所) 一二六
 櫻兒 (人) 一四九
 さくらばな (枕) 二九三

桜井王 (人) 三三
 さくらを(櫻麻) (品) 三
 さくらを 櫻麻 (圖) 四
 さごろもの (枕) 二九三
 ささ(小竹) (品) 九五
 ささ小竹 (圖) 九八
 ささがは 小竹之葉 (人) 一五一
 佐々貴山君 (人) 一五一
 内侍佐々貴山君 (人) 一三六
 雀部 廣島 (所) 一三六
 ささなみ(樂浪)(神樂浪)(左左浪) (所) 一二六
 樂浪の國 (所) 一二七
 ささば 小竹葉 (圖) 九八
 ささらをぎ (品) 九二
 ささらのをぬ(左佐羅能小野) (所) 一二七
 さざれなみ (枕) 二九四
 指進乃 (枕) 二九四
 さしなみの (枕) 二九五

さしなみのくに(刺並之國) (所) 一二八
 さしのぼる (枕) 二九四
 さしま(猿島) (所) 一二八
 さすだけ(刺竹) (品) 九五
 さすだけ 刺竹 (圖) 九七
 さすだけの (枕) 二九五
 さすやなぎ (枕) 二九七
 さそり (圖) 二四〇
 さだのうら(左太能浦)(貞浦) (所) 一二八
 さだのうらの (枕) 二九七
 さだのをか(佐太乃岡)(佐田乃岡) (所) 一二八
 さづひとの (枕) 二九七
 さつま(薩摩) (所) 二二九
 薩妙觀 (人) 一五五
 さてのさき(佐堤乃埼) (所) 一二九
 さど(佐渡) (所) 一二九
 さなかづら (枕) 二九九
 さなかづら 五味 (品) 三五

さなかづら 五味 (圖) 三七
 さなつらのをか(左奈都良能乎可) (所) 一二九
 さにつらふ (枕) 二九八
 さぬ(狹野)紀伊國牟婁郡 (所) 一二九
 さぬ(佐野)上野國 (所) 一三〇
 さぬかた(狹野方) (所) 一三〇
 さぬきのくに(讃岐國) (所) 一三〇
 さぬだ(佐野山) (所) 一三〇
 さぬつとり(狹野津島) (品) 一八七
 狹野茅土娘子 (人) 一四九
 佐農能岡 (所) 一二九
 さぬやま(佐努夜麻) (所) 一三〇
 さねかづら 五味 (枕) 二九九
 さねかづら 五味 (圖) 三七
 さねかや 佐葵草 (品) 二五
 さねかやの (枕) 二九九
 さば(佐婆) (所) 一三〇
 さはあららぎ(澤蘭) (品) 三六

さはあららぎ 澤蘭 (圖) 三八
 さば(五月蠅) (品) 二四八
 さばへなす (枕) 二九九
 さひか(左日鹿)(狹日鹿) (所) 一三一
 左日鹿野 (所) 一三一
 狹日鹿乃浦 (所) 一三一
 さひづるや (枕) 三〇〇
 左檜隈 (所) 二一七
 佐伯赤麻呂 (人) 九七
 佐伯東人 (人) 九七
 佐伯宿禰赤麻呂 (人) 九七
 佐伯宿禰東人 (人) 九九
 さへき(佐伯) (所) 一三一
 さへきやま(佐伯山) (所) 一三一
 さほ(佐保) (所) 一三一
 佐保川 (所) 一三一
 さほのうち(佐保乃内) (所) 一三一
 さみね(狹岑) (所) 一三二

沙彌女王 (人) 四五
 沙彌滿誓 (人) 二五三
 さみのやま (所) 二二三
 さむかは(寒川) (所) 二二三
 さや(佐野) (所) 一三三
 さやた(佐野田) (所) 一三三
 さゆり (品) 八六
 さゆりばな (枕) 三〇〇
 さゆる (品) 八六
 さらしぬ(曝井) (所) 一三三
 さる(猿) (品) 二一八
 さる猿 (圖) 二一七
 猿のたすき (圖) 七一
 さわたり(左和多里) (所) 一三四
 さわらび 早蕨 (圖) 九三
 佐爲王 (人) 三〇
 さをしか(左牡鹿) (品) 二一六
 さをしかの (枕) 三〇〇

し部

しか(鹿) (品) 二一五
 しか(志賀)(四可)(之賀)(思可) (所) 一三五
 しが(志賀) (所) 一三四
 しがつ(志我津)(四賀津) (所) 一三五
 吉備津采女 (人) 一四二
 四賀津の浦 (所) 一三五
 志賀の山 (所) 一三六
 志賀能大和太 (所) 一三四
 しかま(思賀麻) 傍磨 (所) 一三六
 思賀麻江 (所) 一三六
 思可麻河 (所) 一三六
 志賀山寺 (所) 一三四
 しぎ(鳴) (品) 一八七
 しぎ鳴 (圖) 一八九
 しきしま(磯城島) (所) 一三六

しきしまの (枕) 三〇二
 しきたへの (枕) 三〇一
 しきつのうら(敷津之浦) (所) 一三七
 しきのぬ(敷野) (所) 一三七
 志貴皇子(天智帝の皇子) (人) 一五
 志貴皇子(天武帝の皇子) (人) 一八
 しきみ 橋 (品) 二二八
 しきみ 橋 (圖) 二二二
 しくらがは(淑羅川) (所) 一三八
 しげをか(茂岡) (所) 一三八
 しこほととぎす 醜霍公鳥 (品) 二〇二
 しし(鹿) (品) 二一七
 しし鹿 (圖) 二一四
 しじくしろ (枕) 三〇四
 ししじもの (枕) 三〇四
 ししだ(鹿猪田) (品) 二一七
 しじみ 蜆 (品) 二四三
 しじみ 蜆 (圖) 二三八

しだ(斯太)(思太)駿河國志太郡 (所) 一三八
 しだ(信太)常陸國信太郡 (所) 一三八
 しだくさ(子太草) 羊齒 (品) 三六
 しだくさ 羊齒 (圖) 三九
 しただみ(小螺) (品) 二四三
 しただみ 小螺 (圖) 二三九
 斯太の浦 (所) 一三八
 したひやま(下檜山) (所) 一三八
 したびもの (枕) 三〇五
 しだりやなぎ(垂柳) (品) 二二七
 しだりやなぎ 垂柳 (圖) 一三〇
 しづくのたみ(師付之田井) (所) 一三九
 しづすげ(靜菅) (品) 四二
 しづたまき (枕) 三〇六
 しつのいはや(志都乃石室) (所) 一三八
 倭文部可良曆 (人) 一三四
 しでのさき(四泥能埜) (所) 一三九
 しながどり (枕) 三〇七

しながどり (品)一八八
 しながとり 志長鳥 (圖)一九〇
 しなごかる (枕)三〇六
 しなでる (枕)三〇八
 しなぬ(信濃) (所)一三九
 しなぬのはま(信濃乃波麻) (所)一三九
 しなひねぶ (枕)三〇八
 しぬ(細竹)(小竹) (品)九七
 しぬ細竹 (圖)九九
 しぬすすき 細竹薄 (品)四四
 しぬだ(小竹田) 信太 (所)一四〇
 しぬのめの (枕)三〇八
 しぼ芝 (品)三七
 しば芝 (圖)四〇
 しはせやま(師齒迫山) (所)一四一
 しはつ(四極)(四八津) (所)一四〇
 しばつき(芝付) (所)一四〇
 四極山 (所)一四〇

しひ(椎) (品)一二九
 しひ椎 (圖)一三三
 しび(鮪) (品)二二五
 しび鮪 (圖)二二四
 椎野長年 (人)一一一
 椎野連長年 (人)一一一
 志斐姫 (人)一四二
 しぶたに(澁溪) (所)二四一
 しほつ(鹽津) 近江國淺井郡 (所)一四一
 しほつ(鹽津) 鹽津山 (所)一四一
 しほのや(鹽屋) (所)一四二
 しほぶねの (枕)三〇八
 しま(志麻) 國ノ名 (所)一四二
 しま(島) 筑前國志摩郡 (所)一四二
 しま(志滿)(島) 大和國平群郡 (所)一四二
 しま(島) 大和國高市郡 (所)一四二
 しまくまやま(島熊山) (所)一四三

島足 (人)一二八
 しまつどり (枕)三一〇
 しまつとり(島津鳥) (品)一七六
 しまづたふ (枕)三〇九
 しまのぬ(司馬乃野) (所)一四二
 しまのぬの (枕)三一〇
 島の宮 (所)一四二
 しままつ(島松) (品)一六一
 島村大夫 (人)六六
 島山 (所)一四二
 しめ(鶺鴒) (品)一八八
 しめ (圖)一九一
 しもつけぬ(之母都家野) 下野 (所)一四三
 しもつぶさ(下總) (所)一四三
 しゃうぶ 菖蒲 (圖)九
 聖武天皇 (人)七
 舒明天皇 (人)一、六
 しらかし 白樫 (品)一二七

しらかし 白樫 (圖)一三一
 しらかみのいそ(白神之磯) (所)一四三
 しらき(新羅) (所)一四三
 しらくもの (枕)三一四
 しらさき(白崎) (所)一四三
 しらさぎ(白鷺) (品)一九〇
 しらさぎ 白鷺 (圖)一九三
 しらすげ(白菅) (品)四〇
 しらすげ 白菅 (圖)四四
 しらすげの (枕)三一〇
 しらたまの (所)三一五
 しらつつじ (枕)三一六
 しらつつじ 白躑躅 (品)一四二
 しらつつじ 白躑躅 (圖)一四四
 しらつゆの (枕)三一四
 志良登保布 (枕)三一
 しらとり(白鳥) (品)一八九
 しらとり 白鳥 (圖)一九二

しらとりの (枕)三二一
 しらなみの (枕)三二一
 しらぬくに (枕)三一五
 しらぬひ (枕)三二三
 しらね(思良禰) (所)一四三
 しらまなご (枕)三一二
 しらまゆみ (枕)三一五
 しらまゆみ(白檀)(白眞弓) (品)一六三
 しらゆきの (枕)三一四
 しらやま(之良夜麻) (所)一四三
 しりくさ(知草) (品)三七
 しりくさ知草 (圖)四一
 しりくさの (枕)三一六
 しるはのいそ(志留波乃伊宗) (所)一四四
 しろたへの (枕)三一六
 しをぢ(之乎路) (所)一四四

す部

すがうら(菅浦) (所)一四四
 すがしま(酢嶋島) (所)一四四
 すがとり(菅鳥) (品)一九〇
 すがとり 菅鳥 (圖)一九四
 すがのあらの(須我能安良能) (所)一四五
 すがのねの (枕)三一八
 すがのやま (枕)三一八
 すかのやま(須加能夜麻) (所)一四五
 すがはらのさと(須我波良能佐刀) (所)一四五
 すがも(菅藻) (品)八四
 すがる (品)二四四
 すがる (圖)二四〇
 すぎ(杉) (品)二二九
 すぎ杉 (圖)一三四
 すぎた(次田) (所)一四五
 すぎのぬ(楳野) (所)一四五
 すぎむらの (枕)三一九
 野氏宿奈麻呂 (所)一二七

すげ(菅) (品)三七
 すげ菅 (圖)四二
 すさのいりえ(渚沙乃入江) (所)一四六
 すす(珠洲) (所)一四六
 すずかがは(鈴鹿河) (所)一四六
 すすがねの (枕)三一九
 すすき薄 (品)四三
 すすき薄 (圖)二六
 すずき(鱸) (品)二二六
 すずき鱸 (圖)二二五
 珠洲の海 (所)一四六
 すずめ貝 (品)二四三
 すずめ貝 (圖)二三八
 少辨 (人)一二九
 少判官(大藏忌寸麻呂) (人)一一六
 すはう(周防) (所)一四六
 すま(須麻) (所)一四六
 すみさか(住坂) (所)一五〇

すみだがはら(角田河原) (所)一五〇
 すみのえ(住吉)(墨吉)(墨江) (所)一四六
 攝津國住吉郡
 すみのえ(墨江)丹後國與謝郡
 住吉の三津 (所)一四八
 清江娘子 (人)一三八
 すみれ菫 (品)四五
 すみれ菫 (圖)四五
 天皇(孝謙) (人)七
 天皇(聖武) (人)七
 すもも(李) (品)一三〇
 すもも李 (圖)一三五
 するが(駿河) (所)一五〇
 駿河嫁女 (人)一四四
 する(末) (所)一五〇
 末珠名娘子 (人)一四九
 するのはらぬ(末之腹野) (所)一五〇

せ部

多藝の野 (所) 一六〇
 たぎのへ(瀧上) 大和國吉野郡 (所) 一六〇
 たぎのへ(瀧上) 淡路國 (所) 一六〇
 たぎのみかど(多藝能御門) (所) 一六〇
 たぎのや(瀧屋) (所) 一六一
 たぎのみやこ(瀧之宮子) (所) 一六〇
 當麻真人麻呂 (人) 八二
 當麻麻呂 (人) 八一
 たく(栲) (品) 一三五
 たく栲 (圖) 一三七
 たくしま(栲島) (所) 一六一
 田口朝臣馬長 (人) 六七
 田口朝臣大戸 (人) 八〇
 田口朝臣家守 (人) 六二
 田口馬長 (人) 六七
 田口大戸 (人) 八〇
 田口廣麻呂 (人) 五五
 田口益人大夫 (人) 五二

田口家守 (人) 六二
 たくづぬの (枕) 三二二
 たくなはの (枕) 三二三
 たくひれの (枕) 三二三
 たくぶすま (枕) 三三二
 たけ(茸) (品) 四七
 たけ(竹) (品) 九四
 たけ竹 (圖) 九六
 たけた(竹田) (所) 一六一
 竹田の原 (所) 一六一
 たけち(高市) (所) 一六一
 高市黒人 (人) 一〇六
 高市皇子 (人) 九
 高市連黒人 (人) 一〇六
 高市岡本宮 御宇 天皇 (人) 一
 たこ(多古)(多胡) (所) 一六一
 たご(多胡) (所) 一六一
 多祜の浦 (所) 一六一

たこのうら(田兒浦) (所) 一六二
 多胡の崎 (所) 一六一
 多古の島 (所) 一六一
 たこのよびさか (所) 一六二
 (手兒乃欲妣左賀) 田兒呼坂
 ただこえ(直超) (所) 一六二
 たたなづく (枕) 三二三
 たたなめて (枕) 三二四
 たたねども (枕) 三二四
 たたみけめ (枕) 三二五
 ただわたり (枕) 三二六
 たちこもの (枕) 三二八
 たちのしり (枕) 三二七
 たちばな(橋) (品) 一三一
 たちばな橋 (圖) 一三六
 たちばな(橋) 大和國高市郡 (所) 一六二
 たちばな(多知婆奈) 武藏國橋樹郡 (所) 一六三
 たちばな(多知波奈) (所) 一六三
 たちばなの (枕) 三二六

橋文成 (人) 一〇一
 橋の島 (所) 一六二
 橋宿禰 文成 (人) 一〇一
 橋宿禰 奈良麿 (人) 一〇〇
 橋の寺 (所) 一六二
 橋奈良麿 (人) 一〇〇
 橋諸兄 (人) 三〇
 たちばなを (枕) 三二六
 丹比縣守 卿 (人) 八三
 丹比屋主 真人 (人) 八三
 丹比乙麻呂 (人) 八四
 丹比笠麻呂 (人) 八三
 丹比國人 (人) 八三
 多治比應主 (人) 八六
 多治比土作 (人) 八五
 丹比真人 (人) 八二
 丹比真人 乙麻呂 (人) 八四
 丹比真人 笠麻呂 (人) 八三

丹比真人國人 (人) 八三
 多治比真人應主 (人) 八六
 多治比真人土作 (人) 八五
 丹比大夫 (人) 六四
 丹比屋主真人 (人) 八四
 多治比部北里 (人) 一三〇
 丹比部國人 (人) 一三一
 但馬皇女 (人) 二二
 たちやま(立山) (所) 一六三
 たづ(鶴) 田鶴 (品) 一九四
 たづ 田鶴 (圖) 一九七
 たづがなく (枕) 三二九
 たつきりの (枕) 三二八
 たつた(立田)(龍田) (所) 一六三
 龍田路 (所) 二六四
 龍田彦 (所) 一六三
 立田山 (所) 一六三
 たつとりの (枕) 三二八

たづなのはま(手綱乃濱) (所) 一六四
 たつなみの (枕) 三二九
 たづのき (品) 一七〇
 たつのま 龍馬 (品) 二一二
 たで(蓼) (品) 四七
 たで 蓼 (圖) 四八
 建部牛麿 (人) 一二六
 たどかは(田跡河) (所) 一六四
 たどり(多籽里) (所) 一六四
 たなかみやま(田上山) (所) 一六四
 たなくらのぬ(多奈久良能野) (所) 一六五
 たにぐく 蟾蜍 (品) 二四七
 たにぐく 蟾蜍 (圖) 二四二
 たには(丹波) (所) 一六五
 丹波大女娘子 (人) 一四六
 田邊秋庭 (人) 一二〇
 田部櫟子 (人) 一一四
 田部忌寸櫟子 (人) 一一四

田邊福麻呂 (人) 一二〇
 たはみづら (枕) 三二九
 たはみづら (品) 四九
 たはみづら (圖) 五〇
 たひ(鯛) (品) 二二七
 たひ鯛 (圖) 二二六
 たふしのさき(手節乃崎) (所) 一六五
 たま(多麻) (所) 一六六
 たまえ(玉江) (所) 一六六
 たまかぎる (枕) 三三五
 玉蜻 (枕) 四五二
 たまかつま (枕) 三三三
 玉葛 (枕) 三三四
 玉葛 (品) 四九
 たまかづら(玉葛) (圖) 一三八
 たまかづら 玉葛 (所) 一六七
 多麻河 (所) 一六七
 たまきはる (枕) 三三九

たまくしげ (枕) 三三七
 たまくしの (枕) 三三七
 たまくしろ (枕) 三三六
 たまこすげ(玉小菅) (品) 四一
 たましま(玉島) (所) 一六五
 玉嶋川 (所) 一六五
 玉嶋の浦 (所) 一六五
 たまたすき (枕) 三四〇
 たまたれの (枕) 三四〇
 たまちはふ (枕) 三二九
 玉作部國忍 (人) 一三三
 玉作部廣目 (人) 一三三
 たまづさの (枕) 三四二
 たまづしま(玉津島) (所) 一六六
 たまのうら(玉之浦)紀伊國牟婁郡 (所) 一六六
 たまのうら(多麻能宇良) 備中國淺口郡 (所) 一六六
 多麻乃余許山(多麻の横山) (所) 一六七
 たまのをの (枕) 三三〇

たまばはき(玉掃) (品) 五〇
 たまばはき 玉掃 (圖) 五一
 たまはやす (枕) 三四五
 たまほこの (枕) 三四三
 たままつ(玉松) (品) 一六〇
 たまも(玉藻) (品) 八二
 玉藻 (圖) 八三、八
 たまもかる (枕) 三三三
 たまもなす (枕) 三三二
 たまもよし (枕) 三三一
 たむけ(手向) 大和國添上郡 (所) 一六七
 たむけ(多牟氣) 越中國彌波郡 (所) 一六七
 たむけぐさ (枕) 三四六
 たむけのやま(手向乃山) (所) 一六七
 たむのやま(多武山) (所) 一六七
 たむら(田村) (所) 一六八
 田村大嬢 (人) 一四五
 たもとほり (枕) 三四六

手持女テテメノメ王 (人) 四三
 たゆひがうら(手結我浦) (所) 一六八
 たゆひがた(多由比我多) (所) 一六八
 たゆらぎのやま(絶等寸笑山) (所) 一六八
 たらちしの (枕) 三四六
 たらちねの (枕) 三四六
 たるひめ(垂姫) (所) 一六八
 たるみ(垂水)(垂見) (所) 一六八
 たわやめの (枕) 三四八
 たわらはの (枕) 三四七
 淡海公 (人) 五四

ち部

ちえのうら(千江之浦) (所) 一六九
 ちかのさき(智可能岬) (所) 一六九
 ちかや(茅草) (品) 五一
 ちかや 茅草 (圖) 五二
 ちぐまのかは(知具麻能河泊) (所) 一六九
 筑摩川

ちさ 松楊 (品) 一三九
 ちさ (圖) 一三九
 ちたのうら(知多乃浦) (所) 一七〇
 ちち (品) 一三九
 ちち (圖) 一四〇
 ちちのみ (枕) 三四九
 ちちぶ(秩父) (所) 一七〇
 持統天皇 (人) 四、五
 ちどり(千鳥) (品) 一九七
 ちどり 千鳥 (圖) 一九八
 ちどりなく (枕) 三四九
 ちぬ(千沼)(血沼)(知努) 茅渚 (所) 一七〇
 陳奴の海 (所) 一七一
 智努王 (人) 三五
 智努女王 (人) 四六
 ちばな(茅花) (品) 五一
 茅花 (圖) 五二
 ちはのぬ(知波乃奴) (所) 一七一

つ部

ちはやひと (枕) 三五三
 ちはやぶる (枕) 三四九
 ちひさがた(少縣) (所) 一七一
 ちりひぢの (枕) 三五三
 沈丁花 (圖) 三六
 つが(都賀) (所) 一七一
 つがぬ(都賀野) (所) 一七一
 つかねども (枕) 三五三
 つがのき(樛木) (品) 一四三
 つがのき 樛木 (圖) 一四六
 つがのきの (枕) 三五三
 大使(阿部朝臣繼麻呂) (人) 六四
 大使(阿朝臣繼曆)之第二男 (人) 六四
 つき(槻) (品) 一四四
 つき 槻 (圖) 一四八
 つきくさ(鴨頭草)(鴨跖草) (品) 五二

つなきさ 鴨跖草 (圖) 五三
 つきくさの (枕) 三五四
 つきぬちのかつら (品) 一一三
 つぎねふ (枕) 三五五
 調淡海 (人) 一一三
 調首淡海 (人) 一一三
 調使首 (人) 一一四
 つくし(筑紫) (所) 一七三
 都久志の崎 (所) 一七三
 筑紫道 (所) 一七三
 つくしのみちのくちのくに(筑前國) (所) 一七四
 つくぬ(都久怒) (所) 一七一
 都久の嶋 (所) 一七三
 つくは 筑波(都久波) (所) 一七二
 つくま(託馬)(都久麻) (所) 一七一
 託馬野 (所) 一七一
 通觀法師 (人) 一五三

つなし (品) 二二八
 つなし (圖) 二二七
 つなしとる (枕) 三五六
 つなでひく (枕) 三五六
 つぬ(角)(蔦) (品) 五四
 つぬ(角) (所) 一七四
 つぬが(角鹿) 敦賀 (所) 一七五
 つぬさはふ (枕) 三五六
 つぬしま(角島) (所) 一七五
 角朝臣廣辨 (人) 六二
 角の浦 石見國郡賀郡 (所) 一七四
 つぬのうら(網能浦) 讃岐國鷓足郡 (所) 一七四
 角廣辨 (人) 六二
 つぬのまつばら(角松原) (所) 一七五
 つねしらぬ (枕) 三五七
 つのくに(都乃久爾) (所) 一七五
 つばいち(海石榴市) (所) 一七六
 つばき(椿)(海石榴) (品) 一四〇

つくるのしま(机島) (所) 一七一
 つげ(黄楊) (品) 一四三
 つげ 黄楊 (圖) 一四五
 つしま 對馬 (所) 一七四
 對馬の渡 (所) 一七四
 つた 蔦 (品) 五三
 つた 蔦 (圖) 五四
 つたのほそえ(都多乃細江) (所) 一七四
 つちはり(土針) (品) 五四
 つちはり 土針 (圖) 五五
 つちはり 土棒 (圖) 六五
 つつき(都筑) (所) 一七四
 つつきのほら(管木之原) (所) 一七四
 つつじ(茵) 躑躅 (品) 一四二
 つつじ 躑躅 (圖) 一四二
 つつじはな (枕) 三五六
 つつら 葛 (品) 五四
 つつら 葛 (圖) 五六

つばき 椿、海石榴 (圖) 一四一
 つばさなす (枕) 三五七
 つばめ(燕) (品) 一九八
 つばめ 燕 (圖) 一九九
 兵部川原 (人) 一二九
 つぼすみれ 壺葦 (品) 四六
 つまごもる (枕) 三五七
 つまのもり(妻社) (所) 一七六
 つまま (品) 一四四
 つまま (圖) 一四七
 つみ(柘) (品) 一四六
 つみ 柘 (圖) 一四九
 つもり(津守) (所) 一七七
 津守宿禰小黒栖 (人) 一〇六
 津守通 (人) 一〇七
 津守連通 (人) 一〇七
 津守小黒栖 (人) 一〇六
 つるぎたち (枕) 三六〇

つるぎのいけ(劔池) (所)一七七
 つるのつつみ(都留能都追美) (所)一七七
 つるはみ(椽) (品)一〇七
 つゆしもの (枕)三五九
 つらつらつばき 列々椿 (品)一四一
 つゑたらす (枕)三六一
 つをのさき(津乎能崎) (所)一七七

て部

てしま(豊島)(手嶋) (所)一七八
 豊島采女 (人)一四七
 てらゐ(寺井) (所)一七八
 てるつきの (枕)三六二
 天智天皇 (人)三六三
 天武天皇 (人)三

と部

とが樽 (圖)一四六

とききぬの (枕)三六二
 ときじくのかくのこのみ (品)一三四
 ときじくふぢ(非時藤) (品)七五
 ときつかぜ (枕)三六二
 とこじもの (枕)三六三
 とこのやま(鳥籠之山) (所)一七八
 とこよ(常代)(常世)仙境 (所)一七八
 とこよ(常世) 海外國 (所)一八一
 とこと(常呼) 黄泉國 (所)一八三
 とこよもの (枕)三六三
 ところづら (枕)三六二
 ところづら(冬薯)(蕷葛) (品)五六
 ところづら 冬薯、蕷葛 (圖)五七
 とさ(土佐) (所)一八四
 としま(豊島) (所)一八四
 となみ(利波)(刀奈美)(刀奈美) (所)一八四
 となみはる (枕)三六三
 とねがは(刀禰河泊) (所)一八四

とほつかに (枕)三六八
 十市皇女 (人)二二
 とほつひと (枕)三六七
 とみ(跡見) (所)一八七
 跡見の崎 (所)一八七
 跡見の岡 (所)一八七
 跡見山 (所)一八七
 ともしひの (枕)三六八
 とものうら(鞆浦) (所)一八七
 とやのぬ(等夜乃野) (所)一八七
 とよくに(豊國) (所)一八八
 とよくにのみちのしり(豊後) (所)一八八
 とよらのてら(豊浦寺) (所)一八八
 とら(虎) (品)二二九
 とら虎 (圖)二一八
 とり(鶏) (品)一七九
 とり鶏 (圖)一八二
 とりがなく (枕)三六八

とりかひがは(取替河) (所)一八八
 とりじもの (所)三六九
 土理宣令 (人)二二四
 とりのをか(等里乃乎加) (所)一八八
 とろしのいけ(取石池) (所)一八九

な 部

なか(中)(那賀) 常陸國那珂郡 (所)一九〇
 なか(那珂) 筑前國那珂郡 (所)一九〇
 ながさ(長狹) (所)一九〇
 長田王 (人)二二五
 中大兄(天智天皇) (人)一三三
 中皇命 (人)二二〇
 ながと(長門) 國名 (所)一九〇
 ながと(長門) 安藝郡 (所)一九一
 長門の浦 (所)一九一
 長門の島 (所)一九一
 中臣朝臣東人 (人)五五六

中臣朝臣清麻呂 (人)七四
 中臣朝臣武良自 (人)六一
 中臣朝臣宅守 (人)六四
 中臣東人 (人)五六
 中臣女郎 (人)一四五
 中臣清麻呂 (人)七四
 中臣部足國 (人)一三五
 中臣武良自 (人)六一
 中臣宅守 (人)六四
 長忌寸奥麻呂 (人)一四四
 長忌寸娘 (人)一四八
 長奥麻呂 (人)一四四
 ながのしも(長下) (所)一九〇
 長皇子 (人)一五
 なかのみなと(中乃水門) (所)一九〇
 ながはま(長濱) 豊前國球玖郡 (所)一九一
 ながはま(長濱) 遠江國磐田郡 (所)一九一
 ながはま(奈我波麻) 越中國射水郡 (所)一九一

ながはまのうら(奈我波麻能宇良) (所)一九一
 なかまな(中麻奈) (所)一九〇
 長屋王 (人)二二五
 ながやのはら(長屋原) (所)一九一
 ながら(長柄) (所)一九二
 ながらのみや(長柄之宮) (所)一九一
 ながぬのうら(長井浦) (所)一九一
 なぎ(水葱) (品)五八
 なぎ 水葱 (圖)五八
 なきさはのもり(哭澤之神社) (所)一九二
 なきすみ(名寸隅) (所)一九二
 なきのかは(名木之河) (所)一九二
 なくこなす (枕)三七〇
 なくさやま(名草山) (所)一九二
 なくたづの (枕)三七〇
 なくとりの (枕)三七〇
 なくはし又なぐはしき (枕)三六九
 たぐるさの (枕)三七〇

なご(名兒)(奈吳)(名子) (所)一九二
 撫津國住吉郡
 なご(奈吳)(那吳)越中國射水郡 (所)一九三
 名子江の濱 (所)一九三
 奈吳の海 撫津國住吉郡 (所)一九二
 奈吳の海 越中國射水郡 (所)一九三
 奈吳の浦 (所)一九三
 奈吳の江 (所)一九三
 なごやま(名兒山) (所)一九三
 なさかのうらみ(奈左可能宇美) (所)一九三
 なし(梨) (品)一四七
 なし 梨 (圖)一五〇
 なす(那須) (所)一九四
 なすきやま(名次山) (所)一九三
 なたかのうら(名高浦) (所)一九四
 なつくさの (枕)三七一
 なつくす(可葛) (品)二九
 なつそびく (枕)三七二
 なつみ(夏身) 大和國城上郡 (所)一九四

はこぐさの (枕)三七六
 にしのいち(西市) (所)二〇五
 につつじ 丹躰 (品)一四二
 につつじ 丹躰 (圖)一四三
 にはたづみ (枕)三七七
 にはつとり (枕)三七八
 にはつとり(庭津鳥)(鶏) (品)一七九
 にはつとり 庭つ鳥 (圖)一八二
 にはつとり(接骨木) (品)一七〇
 にはにたつ (枕)三七六
 にひかは(新川) (所)二〇五
 にひぐはまよ 新桑藪 (品)二四〇
 新川部皇子 (人)一八
 にひたやま(爾比多夜麻) 新田山 (所)二〇五
 にひばり(新治) (所)二〇五
 にひむろを (枕)三七八
 にふ(爾布) (所)二〇六
 丹生王 (人)二八

丹生女王 (人)四三
 にふのかは(丹生乃河) (所)二〇六
 にふのひやま(丹生檜山) (所)二〇五
 にふのやま(丹生之山) (所)二〇六
 にへのうら(爾閉乃宇良) (所)二〇六
 にほどり 鳩 (品)一九九
 にほどり 鳩 (圖)二〇〇
 にほどりの 仁徳天皇 (枕)三七八
 (人)六

ぬ部

ぬえことり (枕)三八〇
 ぬえことり(奴婁子鳥) (品)二〇〇
 ぬえことり 鷓小鳥 (圖)二〇一
 ぬえどり 鷓 (品)二〇〇
 ぬえとり 鷓、奴延鳥 (圖)二〇一
 ぬえとりの 拔氣大首 (枕)三八〇
 (人)二三〇

額田王 (人)四〇
 ぬさかのうら(野坂乃浦) (所)二〇六
 ぬしま(野島)(奴島) (所)二〇六
 野嶋が崎 (所)二〇七
 ぬつとり (枕)三八〇
 ぬつとり(野鳥) (品)一八七
 ぬなかは(沼名河) (所)二〇七
 ぬなは(尊) (品)六三
 ぬなは 尊 (圖)六三
 ぬばたま(烏玉)(野干玉) (品)六四
 ぬばたま 烏玉 (圖)六四
 ぬばたまの (枕)三八〇
 ぬはり(野榛) (品)六五
 ぬはり 野榛 (圖)六五
 ねじろたかがや 根白高草 (品)二五
 ねつこぐさ (品)六六

ね部

ねつこぐさ (圖)六六
 ねぶ(合歡木) (品)一四九
 ねぶ 合歡木 (圖)一五三
 のこ(能許) (所)二〇八
 野薔薇 (圖)一七
 能巨の浦 (所)二〇八
 後瀬の山 (所)二〇九
 のちせやま (枕)三八二
 のちせやま(後瀬山) (所)二〇九
 後瀬本宮御宇天皇 (人)三
 のと (所)二〇九
 のとかのやま(能登香山) (所)二〇九
 のとがは(能登河) (所)二〇九
 のとがはの (枕)三八二
 のとせがは(能登湍河) (所)二〇九

のとせのかは(能登瀬乃河)
 能登乙美 (所)二〇九
 能登臣乙美 (人)一一七
 式部大倭 (人)一二九
 磯氏法麻呂 (人)一二七

は部

はかひのやま(羽買乃山) (所)二〇九
 はかひやま(羽易山)(羽飼山) (所)二〇九
 はぎ(芽)(芽子)萩 (品)六七
 はぎ萩 (圖)六七
 博通法師 (人)一五三
 はくひのうみ(波久比能海) (所)二一〇
 羽粟 (人)一一八
 はこね(宮根) (所)二二〇
 箱根草 (圖)六二
 宮根の山 (所)二二〇
 はじ楯 (品)二五一

はじ楯 (圖)一五五
 はしたての (枕)三八三
 間人大浦 (人)九一
 間人老 (人)一〇六
 間人宿禰 (人)一〇二
 間人宿禰大浦 (人)九一
 間人連老 (人)一〇六
 はしむかふ (枕)三八四
 丈部直大藏 (人)一二三
 丈部稻麿 (人)一三三
 丈部大藏 (人)一二三
 丈部川相 (人)一三一
 丈部黒當 (人)一三一
 丈部龍麻呂 (人)一二二
 丈部足人 (人)一三五
 丈部足麿 (人)一三二
 丈部鳥 (人)一三三
 丈部人麿 (人)一一九

丈部眞麿 (人)一三一
 丈部造人麿 (人)一一九
 丈部山代 (人)一三三
 丈部與呂麿 (人)一三三
 はたすすき (枕)三八五
 はたすすき旗薄 (品)四三
 はたぬ(旗野) (所)二一〇
 波多朝臣少足 (人)一五三
 秦石竹 (人)一一七
 秦伊美吉石竹 (人)一一七
 秦忌寸朝元 (人)一一六
 秦忌寸八千島 (人)一一六
 秦許遍麻呂 (人)一一五
 秦朝元 (人)一一六
 秦間滿 (人)一一五
 秦八千島 (人)一一六
 はたのよこやま(波多横山) (所)二一〇
 波多少足 (人)一五三

はちす(蓮) (品)六九
 はちす蓮 (圖)六八
 はつかり(始鷹) (品)一八四
 はつせ(泊瀬)(長谷) (所)二二〇
 泊瀬川 (所)二二一
 泊瀬朝倉宮御宇天 (人)一
 皇 (雄略)
 泊瀬の國 (所)二二一
 泊瀬の山 (所)二二一
 泊瀬部皇女 (人)一三三
 泊瀬小國 (所)二二一
 はつはなの (枕)二八六
 服部皆女 (人)一五二
 服部於田 (人)一三八
 はなかつみ (枕)三八六
 はなぐはし (枕)三八六
 はなすすき花薄 (品)四四
 はなちらふ (枕)三八六
 土師 (人)一五〇

はにしな(波爾思奈) 埴科 (所)二二二
 土師稻足 (人)一〇三
 土師宿禰道良 (人)一〇三
 土師宿禰水通 (人)九八
 土師道良 (人)一〇三
 土師水通 (人)九八
 はにふ(埴生) (所)二二二
 はにやす(埴安) (所)二二二
 埴安の池 (所)二二二
 はねず(唐棣花) (品)一五三
 はねず庭櫻 (圖)一五七
 はねづいろの (枕)三八六
 ははそ柞 (品)二五二
 ははそ柞 (圖)一五六
 ははそばの (枕)三八七
 はひつきのかは(延槻河) (所)二二二
 はふくすの (枕)三八七
 はふつたの (枕)三八七

はへ(蠅) (品)二四八
 はへ蠅 (圖)二四三
 はほまめの (枕)三八八
 濱おもと (圖)六九
 はますどり (枕)三八八
 はまつづら 濱つづら (品)五五
 はまひさき (枕)三八八
 はまひさき(濱久木) (品)一五五
 はまひさき 濱久木 (圖)一五八
 はままつ(濱松) (品)一六一
 はまゆふ(濱木綿) (品)七〇
 はまゆふ 濱木綿 (圖)六九
 はまをぎ(濱荻) (品)九二
 はやかはの (枕)三八八
 林王 (人)三七
 はやひと(隼人) (所)二二三
 はやみはま(早見濱) (所)二二二
 はゆま 驛馬、速馬 (品)二二三

はのまうまや 驛馬舎 (品)二一四
 はらろがは 波良路可波 (所)二二三
 はり(榛) (品)一四九
 はり榛 (圖)一五四
 はりま(播磨) (所)二二三
 はるかすみ (枕)三八九
 はるかぜの (枕)三九一
 はるかさの (枕)三九一
 はるかさを (枕)三九一
 はるとりの (枕)三九一
 はるはなの (枕)三九〇
 はるひを (枕)三八九
 はるやなぎ (枕)三八九
 はるやなぎ(春楊) (品)一六六
 はやまの (枕)三九〇
 榛木 (圖)一五四

ひ部

ひ(楡) (品)一五六
 ひ楡 (圖)一五九
 ひえ(稗) (品)七一
 ひえ稗 (圖)七〇
 ひかげ(日影) 蘿 (品)七一
 ひかげ蘿 (圖)七一
 ひかさのうら(日笠浦) (所)二二三
 ひかるかみ (枕)三九一
 ひきつ(引津) (所)二一四
 ひきてのやま(引手乃山)(引出山) (所)二二三
 ひくあみの (枕)三九二
 ひくまぬ(引馬野) (所)二一四
 ひぐらし 蝸、茅蝸 (品)二四九
 ひぐらし 蝸 (圖)二四四
 ひさかたの (枕)三九二
 ひさき(久木) (品)一五七
 ひさき久木 (圖)一六〇
 ひし(菱) (品)七三

ひし菱 (圖) 七二
 ひだ(斐太) (所) 二二四
 ひたがた(比多我多) (所) 二二五
 ひたち(常陸) (所) 二二五
 常陸娘子 (人) 二四五
 ひだのほそえ(斐太乃細江) (所) 二二四
 土形娘子 (人) 二四三
 ひぢきのなだ(比治奇乃奈太) (所) 二二五
 皇太子(大炊王) (人) 一〇
 ひとくにやま(人國山) (所) 二二五
 ひとつまつ 一つ松 (品) 二六一
 ひなくもり (枕) 三九四
 日並皇子尊(草壁皇子) (人) 八
 ひなもり(夷守) (所) 二二六
 ひのくま(檜隈) (所) 二二六
 檜隈川 (所) 二二六
 檜隈 女王 (人) 四二
 檜前舍人石前妻大伴眞足女 (人) 二五二

ひのいるくに(日入國) (所) 二二七
 ひのみちのくちのくに(肥前國) (所) 二二七
 ひのみちのしりのくに(肥後國) (所) 二二七
 ひのもと(日本) (所) 二二六
 ひのものと (枕) 三九五
 檜原 (所) 二三一
 檜原の山 (所) 二三一
 ひばり 雲雀、告天子 (品) 二〇〇
 ひばり 雲雀 (圖) 二〇二
 ひみのえ(比美乃江) (所) 二二七
 ひむかしのいち(東市) (所) 二二七
 ひめしま(姫島) (所) 二二七
 ひめすがはら(日賣菅原) (所) 二二八
 ひめゆり 姫百合 (品) 八七
 姫百合 (圖) 八九
 ひもかがみ (枕) 三九五
 ひものをの (枕) 三九六
 ひら(比良) (所) 二二八

ひらしき(平敷) (所) 二二八
 比良の浦 (所) 二二八
 比良の大わだ (所) 二二八
 比良の湊 (所) 二二八
 比良山 (所) 二二八
 ひる(蒜) (品) 七四
 ひる蒜 (圖) 七三
 ひるがほ 晝顔 (圖) 二五
 ひれふる嶺(領布磨之嶺) (所) 二二八
 廣河 女王 (人) 四四
 ひろせがは(廣瀬川) (所) 二一九
 廣瀬 王 (人) 三一

ふ 部

ふかみるの (枕) 三九七
 吹黄刀自 (人) 一三八
 ふけひのはま(吹飯乃濱) (所) 二二〇
 ふさ(總) (品) 二
 布士(富士)の嶺 (所) 二二二
 ふじ(不盡)(不自) 富士 (所) 二二〇
 不盡河 (所) 二二二
 ふしごえ(伏超) (所) 二二二
 不自能之婆山 富士の芝山 (所) 二二二
 布士(富士)の高嶺 (所) 二二二
 布時(富士)の山 (所) 二二二
 ふしみ(伏見) (所) 二二二
 ふすま(袂) (所) 二二二
 ふすまぢを (枕) 三九七
 ふせ(布勢)(敷勢) (所) 二二二
 布勢朝臣人主 (人) 八〇
 布勢の海 (所) 二二三
 布勢の浦 (所) 二二三

布勢人主 (人) 八〇
 ふせやたき (枕) 三九七
 布勢の水海 (所) 二二三
 ふたがみ(二上)大和國葛下郡 (所) 二二三
 ふたがみ(二上)越中國射水郡 (所) 二二四
 ふたぎ(布當) (所) 二二三
 二上山 大和葛下郡 (所) 二二三
 二上山 越中射水郡 (所) 二二四
 布當の野 (所) 二二三
 布當の原 (所) 二二三
 布當の宮 (所) 二二三
 布當山 (所) 二二三
 ふたみ(二見) (所) 二二三
 ふち(藤) (品) 七四
 ふち藤 (圖) 七四
 ふちえのうら(藤江之浦) (所) 二二五
 ふちころも (枕) 三九八
 ふちころも(藤衣)(藤服) (品) 七五

ふちしろのみさか(藤白之三坂) (所) 二二五
 ふちたみ(藤浪) (品) 七五
 ふちなみの (枕) 三九八
 ふちはかま(藤袴) (品) 七六
 ふちばかま 藤袴 (圖) 七五
 ふちはら(藤原)大和國高市郡宮地 (所) 二二四
 ふちはら(藤原)大和國高市郡大原村ノ別名 (所) 二二五
 藤原朝臣清河 (人) 七一
 藤原朝臣久須麻呂 (人) 五八
 藤原朝臣宿奈鷹(後改良繼) (人) 七九
 藤原朝臣豊成 (人) 六七
 藤原朝臣執弓 (人) 八一
 藤原朝臣仲麻呂 (人) 六九
 藤原朝臣廣嗣 (人) 六〇
 藤原朝臣八束 (人) 五五
 藤原郎女 (人) 四七
 藤原宇合卿 (人) 五三
 藤原皇后(光明皇后) (人) 一三

藤原夫人 (人) 一四〇
 藤原鎌子(朝臣) (人) 四七
 藤原鎌足 (人) 四七
 藤原清河 (人) 七二
 藤原久須麻呂 (人) 五八
 藤原宿奈鷹 (人) 七九
 藤原豊成 (人) 六七
 藤原執弓 (人) 八一
 藤原永手朝臣 (人) 七七
 藤原仲麻呂 (人) 六九
 藤原廣嗣 (人) 六〇
 藤原(房前)卿 (人) 五八
 藤原不比等 (人) 五四
 藤原麻呂大夫 (人) 五六
 藤原の宮 (所) 二二四
 藤原宮御宇 (持統、文武) (人) 四
 藤原八束 (人) 五五
 藤原良繼 (人) 七九

藤原部等母鷹 (人) 一三八
 ふちのがはら(藤井我原) (所) 二二五
 葛井大成 (人) 一〇七
 葛井子老 (人) 一〇七
 葛井廣成 (人) 一〇八
 葛井連 大成 (人) 一〇七
 葛井連 子老 (人) 一一〇
 葛井連 廣成 (人) 一〇八
 葛井連 諸會 (人) 一一一
 葛井諸會 (人) 一一一
 ふつま 太馬 (品) 二二二
 ふとゐ 大藪 (圖) 二二一
 ふな 鮒 (品) 二二九
 ふな 鮒 (圖) 二二八
 ふなせ(船瀬) (所) 二二六
 船王 (人) 二九
 ふねはつる (枕) 三九八
 ふは(不破) (所) 二二六

不破の關フヘノセキ (所)二二六
 不破山フヘノヤマ (所)二二六
 ふふし(鳳至)フフシ (所)二二六
 文屋智努麻呂真人フムヤチヌマロウマキト (人)八六
 ふる(古)布留フルカ (所)二二七
 ふるえ(舊江)(古江)フルカヘ (所)二二七
 古河(振河)フルカヘ (所)二二七
 ふるころもフルコロモ (枕)四〇〇
 故郷豊浦寺之尼フルキヨトヨラノテラノアヲ (人)一五五
 振(布留)の里フルマタケノスクナ (所)二二七
 振田向宿禰フルマタケノスクナ (人)一〇二
 振(布留)の山フルマタケノヤマ (所)二二七
 ふるや(古屋)フルヤ (所)二二六
 ふるゆきのフルユキ (枕)四〇〇
 ふゆきのうめ(冬木梅)フユキノウメ (品)一〇九
 ふゆこもりフユコモリ (枕)三九九

へ部

平榮ヘイエイ (人)一五四
 日置長枝娘子ヘキナガエノナギ (人)二四八
 日置少老ヘキナカノオキ (人)二二五
 へくそかづら 尻屎葛ヘクソカヅラ (圖)三二
 平群氏女郎ヘイリクヂノイラツメ (人)一五〇
 平群朝臣(廣成)ヘイリクノアサヒ (人)六六
 平群廣成ヘイリクノヒロナリ (人)六六
 平群文屋朝臣益人ヘイリクノフムヤノアサヒ (人)六四
 へぐりのやま(平群乃山)ヘグリのヤマ (所)二二七
 へつも(邊津藻)ヘツモ (品)八四
 へそがた(綜麻形)ヘソガタ (所)二二七
 辨基ヘンキ (人)一五三
 穂(稻)の穂ホ (品)一〇
 僧惠行ホウシヤク (人)一五四
 僧玄勝ホウシヤク (人)一五四
 僧平榮ホウシヤク (人)一五四

ほ部

ほうの木ホウノキ (圖)一六一
 ほこすぎ(梓枴)ホコスギ (品)一三〇
 ほそかは(細川)ホソカハ (所)二二八
 細川山ホソカハノヤマ (所)二二八
 ほたで(穂蓼)ホタデ (品)四八
 ほたで 穂蓼ホタデ (圖)四八
 ほたる(螢)ホタル (品)二五〇
 ほたる 螢ホタル (圖)二四五
 ほたるなすホタルナス (枕)四〇一
 ほづみ(穂積)ホヅミ (所)二二八
 穂積朝臣(老人)ホヅミノアサヒ (人)六六
 穂積朝臣老ホヅミノアサヒノオキ (人)五〇
 穂積老人ホヅミノオキ (人)六六
 穂積老ホヅミノオキ (人)五〇
 穂積皇子ホヅミノミコ (人)一六
 ほととぎすホトトギス (枕)四〇一
 ほととぎす(霍公鳥)ホトトギス (品)二〇〇
 ほととぎすホトトギス (圖)二〇三

ま部

ほほがしは朴ホホガシハ (品)一五八
 ほほかしは朴ホホカシハ (圖)一六一
 ほよ 寄生ホヨ (品)一五九
 ほよ 寄生ホヨ (圖)一六二
 ほりえ(穿江)(保里江)堀江ホリエ (所)二二八
 堀江の河ホリエノカハ (所)二二九
 まかなもちマカナモチ (枕)四〇二
 まかねふくマカネフク (枕)四〇二
 まかみのはら(眞神之原)マカミノハラ (所)二三〇
 まがりのいけ(勾乃池)マガリノイケ (所)二三〇
 まき(眞木)マキ (品)一五六
 まきさくマキサク (枕)四〇三
 まきたつマキタツ (枕)四〇三
 まきつむマキツム (枕)四〇三
 まきのたつマキノタツ (枕)四〇三
 まきばしらマキバシラ (枕)四〇二

まきむく(巻向)(纏向) (所)二三〇
 巻向の川 (所)二三一
 巻向の山 (所)二三〇
 まくさ(真草) (品)四四
 まくさかる (枕)四〇四
 まくすはふ (枕)四〇四
 まぐはしまど(麻具波思麻度) (所)二三一
 まくらづく (枕)四〇四
 麻久良我 (所)一一五
 まけ (品)一五六
 真菰 (圖)三五
 まこもかる (枕)四〇四
 ましき(益城) (所)二三一
 寒水之 (枕)四〇四
 ましらふのたか(白大鷹) (品)一九二
 ましろのたか(白鷹) (品)一九二
 ますがよし (枕)四〇五
 ますげ(真菅) (品)四二

ますらをの (枕)四〇五
 まそかがみ (枕)四〇五
 またまつく (枕)四〇七
 またまづら (枕)四〇七
 またまづら(真玉葛) (品)五〇
 またまなす (枕)四〇七
 またみる(俣海松) (品)七八
 またみるの (枕)四〇七
 まつ(松) (品)一五九
 まつ松 (圖)一六三
 まつがうら(麻都我宇良) (所)二三三
 まつがねの (枕)四〇八
 まつかへの (枕)四〇九
 まつがへり (枕)四〇九
 まつがへり(松反) (品)一六二
 まつだえ(麻都太要)松田江 (所)二三三
 まつちのやま(信土乃山) (所)二三二
 まつちやま (枕)四一〇

まつちやま(真土山) (所)二三二
 まつのはな松の花 (品)一六二
 まつばら(松原) (所)二三三
 まつほのうら(松帆乃浦) (所)二三三
 まつら(松浦) (所)二三一
 松浦縣 (所)二三二
 松浦川 (所)二三二
 松浦の海 (所)二三二
 松浦山 (所)二三二
 まとかた(圓方) (所)二三三
 圓方女王 (人)四六
 まとかたのみなど(圓方之湊) (所)二三三
 まとり(真鳥) (品)二〇七
 まとりすむ (枕)四一〇
 まながうら(真長之浦) (所)二三四
 まなごつち (枕)四一〇
 まぬ(真野)攝津國八部郡 (所)二三四
 まぬ(真野)奥羽國行方郡 (所)二三四

眞野の池 (所)二三四
 眞野の榛原 (所)二三四
 田氏眞人 (人)一二七
 まま(真間)下總國葛飾郡 (所)二三五
 まま(麻萬)相模國足柄郡 (所)二三四
 眞間の入江 (所)二三四
 眞間の浦 (所)二三四
 眞間の纒橋 (所)二三四
 眞間の井 (所)二三四
 眞菅 (人)一五三
 茨田王 (人)三八
 茨田沙彌磨 (人)一一一
 茨田連沙彌磨 (人)一一一
 まめ(豆) (品)七七
 まめ豆 (圖)七六
 豆麴 (品)一七五
 豆麴 (圖)一七七
 まゆみ(檀) (品)一六二